
天使は甘美な夢の中で

amnesia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使は甘美な夢の中で

【Nコード】

N1707Q

【作者名】

amnesia

【あらすじ】

神をも超える力を持つ何か、「大いなる存在」は自身が創りあげた世界を眺め、考えていた。

人間は夢を見る。だがそれは夢であって、現^{うつ}ではない。夢の中で、また夢を見ることもある。それでも夢は裏返って現^{うつ}になったりせず、あくまでも夢のままではあるはずだ。だが夢は時として現^{うつ}に姿を現すことがある。繋がることのないはずの二つの輪。もしそれらが繋がるとすれば、輪の切れ目はどこにあるのだろうか。

そうして始まる新しい遊び。それにより暴かれる真実、隠された

記憶。崩される「真理」たちの存在条件。今、全ての概念が破綻してゆく。

プロローグ

我々は夢を見る。だがそれは夢であって、現^{まじ}ではない。夢の中で、また夢を見ることもある。それでも夢は裏返って現^{まじ}になったりせず、あくまでも夢のままであるはずだ。

しかし夢は時として、現に姿を表すことがある。そう、世界が違うといえども、夢と現は紙一重。夢も現となりうるし、現も夢となりうるのだ。それらが織り成す究極のファンタジー。

今回はそれらの世界の中で楽しそうに遊ぶ、神をも超える力を持つ何か、大いなる存在の物語。

なんだか、長い夢を見ていたような気がする。それもそのはず。私は無限の時の中にいる。いつから私が存在し、いつからこの空間があるのかさえ覚えていない。

そろそろ何も無いこの空間にも飽きてきた。そうだ、この空間の中に小さな世界を作って、その中に生命を入れてみよう。無限の時の中で生命は一体どんな姿に形を変えるのだろう……。面白そうだ。生命が姿を作ったら、私もその姿を借りて降りてみよう

夢は宇宙の中で予兆を見るか

こちらは夢と呼ばれている世界。静かな風が吹き抜ける、どこか神々しい空気の漂う建物の屋上。一つの庭園程の広さはあるようなそこに、それは居た。

腰まで流れるライトオレンジティーの髪。挑発的で、セクシャルな妖気を感じる顔立ち。こちらの世界では珍しい、シンプルな真紅のドレス。

その存在は長い髪を風になびかせ、どこか遠くを見ながら何かを呟いていた。

「何をしていらっしやるのですか」

そこへ一人の女性が近づいてきた。その女性は優しさに満ちた美しい顔をしていて、その微笑みからは暖かな空気を感ずる。彼女が着ている、裾に金の刺繍が施された純白のドレスと、風になびく亜麻色の髪が、どことなく落ち着いた雰囲気を醸し出す。

「考えていたのよ。次はどんな遊びをしようかと」

「また別の世界へ行くのですか？」

「いいえ、もうしばらくはここに居るつもりよ」

さらさら。風に乗って来る、いつもと違う何かを感じた二人。

「……何か来る」

「そのようですね」

「行ってくるわ」

「ふふっ。お気をつけて」

このような事には慣れていているらしい。白いドレスの女性は優しく微笑みながら言った。

「今度はこの世界で、新しい物語が始まるのよ」

そう言った直後、赤いドレスを着た女性は、ふわっ、という音を立てて消えてしまった。

光を超える可能性

涼しい風を感じる草原。そこに赤いドレスの女性は居た。女性は特に動こうともせず、腕組みをして立っているだけだ。

「よう」

声が出た瞬間、背後から強い下降気流が発生した。地面にぶつかり、水平方向に広がった突風が、ライトオレンジティの髪をひどく乱す。

「髪が乱れるじゃない。着地は静かにやって貰いたいものね」

「今の、ダウンバーストって言うんだぜ」

先ほどの風の中から現れたのは、まだ若々しさを感じる男性だった。髪を逆立てていて、左耳にはリング状の装飾品が付けられている。どこことなく、遊びを好みそんな風体をした存在だ。

「あなた、来る時代を間違えたんじゃない？」

「まあそう言うなって。秩序は乱さないからさ」

「くれぐれも気をつけるように。……それは？」

女性の視線の先にあるのは、二つの車輪が前後にあり、その間に原動機と思われる物が付いている乗り物。

「ああ。輪廻が未来の現に連れていってくれた時に持ってきた。バイクって言う乗り物だ」

「あら、そう。……確かに、もうしばらくしたら現れるみたいね」

「どうだ、羨ましいだろ？」

「いいえ、全く。そんなものに乗るより、飛んでいたほうが速いわ」

「それはどうかね」

「……あなた、それ」

「改造済みだぜ」

自慢げにそう語る男性に対し、呆れたような溜め息をつく女性。

「あなたというひとは……」

「競争、するか？」

女性はその言葉に反応するように口角を上げた。

「いいでしょう。その代わり、楽しませて貰えないと困るわ」

「おう。じゃあ、どっちが早く向こうの森を抜けられるか、でどうだ」

そう言って、男性は地平線の向こうを指さす。

「素敵ね。さあ、位置に着いて。鈴の音がしたら開始よ」

「いよいよ始まるんですね……」

先ほどの建物から、望遠の魔法を使って草原の様子を見ていた白いドレスの女性が呟く。そして、いつの間にか手にしていた小さな鈴を軽く指で弾き、その音を飛ばした。

ちりん。瞬間、二人の姿は目の前から消え、既に小さい影となって地平線の上にあった。

風のような速さで飛んでゆく二人は、あっという間に草原を抜け、森に入ってしまった。

「まだ速くなるぜ」

次々と目の前に迫る樹木を器用に避けながら、男性は言った。

「なら、私も本気を出さないと」

その言葉をきっかけに、更に速度を上げてゆく両者。もはや背景はただの線にしか見えず、風の音以外は何も聞く事が出来ない。それでも二人には迫りくる障害物が見えているらしく、細かく左右に動いているのが分かる。と、背景に白い線が混ざってくる。もう出口が近いようだ。最期の力を振り絞るかのように両者は僅かに速度を上げ

「ええ、これでも引き分けかよ」

「残念ね」

本人達の話によれば、二人は同時に到着したらしい。

「それ、輪廻も手を加えたのね」

「よく分かったな」

「時を捻じ曲げない限り、あなたにあの速さは出せないもの。風が光よりも速いなんて、おかしいでしょう?」

「それくらいしないと、お前には勝てないだろ」

「大丈夫よ。何をしても私には勝てないわ。私がそう言っている限り、ね」

「その言霊、絶対破ってやるからな」

「楽しみだわ。……それ、名前は?」

女性が乗り物を指さして言う。

「ゼファー」

「そよ風? そよ風が私に勝てるんでも?」

「そうだよな……じゃあ、名前変えるか」

「そうしなさい。せいぜい、ラファーガが良いところだと思うけど」

「それでもまだ、お前には勝てないだろ」

「じゃあ何にしたいのよ」

そう問いかけた女性に対し、男性は少し考えたのち、やや口角を上げながらこう答えた。

「……タキオン」

「光を超える可能性……素敵ね。私に勝ちたいのなら、そのくらいの名前を与えなさい。名前は」

「名前は大切、だろ?」

「そうよ。今度は私に勝ってくれる事を願っているわ」

女性は意地悪な笑みを浮かべると、始めに居た建物の辺りを見て、再び口を開く。

「そろそろ行かないと」

「じゃあ、俺も帰るとするか」

「ではまた、その時まで」

「おう」

直後、激しい上昇気流が発生し、再び女性の髪を乱す。風が治まった時、既に男性の姿は無かった。

「風……面白い存在ね」

ふわっ。女性も姿を消した。

なぜ人は夢を見るか

「お帰りなさい」

白いドレスの女性が声をかけた。

「ねえ、あなた」

「はい」

「人間は夢を見るでしょう？」

突然、奇妙な事を言い始める赤いドレスの女性。また、あの意地悪な笑みを浮かべている。

「はい。そうでなければ、この世界はありません」

「そうね。では、人間は夢の中で夢を見る事があるけれど、それは裏返って現になったりはしない。あくまでも夢は夢でしかない。それでも時として、夢はある瞬間から現となる。だとすると、輪の切れ目はどこにあるのかしら？」

白いドレスの女性は少し考えたのち、

「あるとすれば……現でしょうか」

と答えると、確信を持ったような顔をする赤いドレスの女性。

「やはり、そうでしょうかね」

「探しに行きますか？」

「現はあまり好きではないのだけど。まあ、いいでしょう」

「器は、どうしましょう？」

「そうね……私は器を決めるのが苦手なのよ。あなたが決めていいわ」

白いドレスの女性は、こうなる事が始めから分かっていたようで、迷わずにこう言った。

「分かりました。では、アイデアさん。私はフレイアです。よろしいですね」

そう言って微笑むフレイア。その微笑みからは芸術性さえ感じる。限りなく抽象的であった存在に、正式に形が与えられた証拠だ。

愛と美の女神、フレイア。彼女はその名の通り、見ただけで魂が浄化されてしまうほど美しくなければならぬ。ひとたび見れば永遠にその姿を忘れることはなく、ふたたび見れば永遠にその美しさの虜となる。彼女は存在自体が芸術。その姿自体がひとつの小宇宙なのだ。

「やはり、居心地のよい器です」

「そうかしら。一番大きな器でも窮屈だわ」

アイデア。現では、最高度に抽象的で永久不滅の真実の實在的な存在と言われているもの。この器については多くを語る事が出来ない。限りなく抽象的なものを具体的に表そうとする時点で、そこには矛盾が生じてしまうからだ。強いて言うならば、言葉という具体的な存在では説明が出来ないほど壮大で抽象的な存在。それがアイデアなのだ。

「じゃあ、行きましようか」

「ちよつと待った!」

声がすると同時に、二人の前に集中的な光が差した。

「ふふつ。こんにちは、シルヴィアさん」

「また賑やかなのが来たわね」

光の中から現れたのはシルヴィアと呼ばれる女性。人間、特に騎士と呼ばれる存在に魅力を感じているらしく、いつかは鎧だけではなく、『中身』が欲しいと本気で思っている。その情熱と意欲に反し、やる気の無さそうな顔をしているのが特徴だ。

「相変わらず、やる気の無さそうな顔をしているわね」

「いいの! この器、結構気に入ってるんだから!」

「それで、何故あなたはこんなタイミングで現れたのかしら」

「だって、これから人間を見に行くんでしょ? 私が行かないなんて、ありえないと思わない?」

「思わないわ」

「……まあ、そう言わないで。もっと人間のこと知りたいんだもん、いいでしょ?」

「別に、好き好んで人間を見に行く訳ではないのだけど」

「私は別に構いませんよ。シルヴィアさんはいつも面白い事をしてくれますから」

そう言つて微笑むフレイア。

「そうね。特に前回の遊びの時なんて」

「それはもう忘れてくださいアイデア様……」

シルヴィアの顔から更に『やる気』が失われていく。よほど恐ろしい過去であるらしい。

「さて、今度こそ、と言いたところだけど」

アイデアが何かの気配を感じたらしい。と言つても、この流れからいくと大体の予想は付くというものだが。

「俺を置いて行くつもりか？」

案の定、三人の前にダウンバーストが発生する。

「次から次へと……何をしに来たのよ」

「現に行くんだろ？ だから慌てて準備して来たんだ」

「それで乗り物を置いてきたのね」

「ああ、あれはこっち用に改造してあるし」

「ところで……その服装、何？」

シルヴィアが不思議なものを見るような目で男性を見ている。

「そうそう、これ、未来の現でしか手に入らないんだぜ」

男性は再び自慢げに語り始めるが……

「あなた、まさかその格好で現に行くつもり？」

「素敵なお洋服ですが……秩序が乱れるという程度の話ではありませんね」

そう言われるのも当然だ。ようやく科学というものの先端が見え始めたような世界に、数百年後に流行する洋服を着た存在が現れるのだ。下手をすれば時という概念が壊れてしまうほどの大惨事である。

「心配はいらないぜ。これがあるからな」

男性の首から下がっているのは、紐を通した六角柱状の綺麗な結

晶。

「あら、珍しいものを持っているのね」

「大自然の涙ですか」

大自然の涙。それはこちらの世界で最も貴重とされる宝石の一つだ。大自然の息吹が何らかの理由で凝縮し、気が遠くなるほどの時を経て、ようやく触れる事が出来るようになると言われている。

いまだに片手で数えられるほどの数しかないそれには、大自然の理を一つだけ無視できるという特別な力がある。大自然には法則があり、守らなければ破滅の道を辿ることになる。これを持つていけば、その法則を一つだけ都合の良いように捻じ曲げる事が出来るのだ。

「前は出来る前に誰かが触っちゃったみたいでさ、せつかく出来そうだったのに消えちゃったんだよ」

「それは大変でしたね」

「いいな」。私の『レディアントの理』と交換しない？」

そう言ってシルヴィアが懐から取り出したのは、中に光と闇が同時に存在している不思議な水晶。

「いや、これ交換したら現に行けないんだって」

「えー。レディアントの理も昼と夜を自由に操れる貴重な宝石なんだよ！ 素晴らしいでしょ？」

「だけどそれを創っているのはあなたでしょう？」

「それは言わないお約束ですよ。ふふっ」

が、時すでに遅し。イデアは呪いの言葉を発してしまった。

「え？ お前、自分が創った宝石を貴重だと言って他の奴に売ってたのかよ」

「あれー何のことかなー」

「一番知られてはいけない存在に知られてしまいましたね」

まるで、シルヴィアの居る所だけ夜になってしまったようだ。そこには生氣という存在を全く感じない。

「さあ、シルヴィアの冥道が開いたところで、行きましょうか」
「そうですね」

「開きなさい、次元の扉」

アイデアの前に小さな空間の切れ目が出る。ふわっ。アイデアが消える。フレリアも続いた。

「ほら、早く来ないと置いて行っちゃうぞ」

ふわっ。

「あつ……あれ、切れ目どこ？ どの辺から入れば……」

シルヴィアは腕を左右に振りながら次元の切れ目を探している。ふわっ。ようやくシルヴィアが消えた。

輪の切れ目を探しに

「今の現まわつて、まだこんなもんだったのか」

一同が辿り着いたのは、石造りの建物が並んでいる静かな街。ただ日が真上にあるというのに人が見当たらない。もちろん、その方が我々にとって都合がよいのは確かだが。

「時を移動しすぎるのは、あまり良い事ではありませんよ」

「時の迷い人にならないように気をつけなさい。ここは未来の言葉で言うなら、近代と中世の間くらいね」

「なんか、誰も居ないね。どうしてかな？」

「そうね……」

と、イデアが何かに気付いたようだ。

「隠れなさい、早く」

すぐさまフレイアが何かを呟く。すると彼女はフレイアという器から一時的に離れ、人間の目に入らない状態となった。

「え、出来ないよ、助けて！」

「全く、仕方ないわね。………」

イデアが何かを呟き、シルヴィアを器からはずした。

「あ、何か聞こえてきたよ」

地面を岩で突くような音に混じって、金属がこすれるような音が聞こえてくる。それらの音は徐々にこちらへ近づいてきているようだ。

「耳障りな音ね」

その時、向こうの方から沢山の馬がやってくるのが見えた。馬の群れは、ぱかつ、ぱかつ、という鋭い音を立てて走って来る。それに乗っているのは……

「あれ？ ……なんか違う」

重たそうな鎧を着た騎士だ。騎士達は剣を抜き、乱暴に振り回しながら馬を走らせている。

「馬に乗りながら剣を振るなんて、行儀の悪い人達ね。あなたの言っている騎士とは違う存在よ。安心しなさい」

やがて騎士を乗せた馬は通り過ぎ、耳障りな音と共に小さくなっていた。

「ふう、危なかったー」

「シルヴィア。いい加減、器から出る方法くらい覚えてもらわないと困るわ」

「だって難しくて発音できないんだもん、出来るのはアイデアとフレアくらいだよ」

「輪廻さんも出来たはずですよ」

「輪廻も特別な存在だと思うけど……」

「それはそうとして。あなた、まだ器に入っていないなかったのね」

「いや……いい器が思い浮かばなくてさ。考えてたんだよ」

「早く決めなさい、先に進めないでしょう」

「ええ、そんな急かすなって」

「私達が見えないものと話している、頭の変な人だと思われると困るの。それに……つまらないでしょう？」

アイデアが何か良くないことを考えているような気がするが、恐ろしい目に遭いたくないのか、何も言わないでいるシルヴィア。そして相変わらず微笑んでいるフレア。

「じゃあ、シエルなんてどうだ？ こっちでは『空』って意味だっただろ」

「あら、別の名前を期待していたのだけど」

「別の名前？」

「あなたの好きな、あれの名前よ」

「え、あれは……」

あなたの好きな、に反応したのか、シルヴィアが話に食い付いてくる。

「どんな名前なの？ 気になるー！」

「いや、気にしなくていいから」

「えー、気になって夜も眠れないよー」

「気にしてあげなさい。きっと喜ぶから。ねえ、シエル」

別の名前というものが気になり、しつこく聞いてくるシルヴィアに対し、必死に気にしないよう促すシエル。イデアはその光景に満足げな笑みを浮かべると、次の行動に移る。

「さあ、人間が出てくる前に行くわよ」

「あ、置いて行かないで！　ところで別の名前って」

「だから忘れろって！　全く、イデアが誤解を生むような言い方を
するから……」

全員が器に入り、ようやく本格的な行動を始めた一同。しかし、夢が現に変わる瞬間に現れる『輪の切れ目』など、どこにあるのだろうか。その手がかりを知る由もない一同には、数え切れないほどの困難が待ち受けていることであろう。

穏やかならぬ空気の中で

「輪の切れ目なんてどこにあるのかな」

「まずは手掛かりが欲しいですね」

まだ人の気配がしない街を歩きながら、手掛かりとなりそうなものを探している。が、そんなものがすぐに見つかる訳もない。

「そもそも、輪の切れ目なんて神の世界でも見つかるんじゃないのか？」

「向こうにあるものとは少し違うのよ。私や彼らが使うような切れ目なんて、いくらでもあるわ」

疑問を持ったシエルに対し、アイデアが長い説明を始める。概要はこうだ。

神と呼ばれる存在は、人間達に強く崇拜され、求められている間に限り、『次元の扉』が使えるという。これにより神は人間達の前に降臨する事が出来るのだ。これがいわゆる『輪の切れ目』の事なのだが、それは誰かが創った切れ目であり、自然に出来たものではない。

しかし実際には現に夢が現れていて、自然に切れ目が発生している瞬間がある。仮に夢と呼ばれているアイデア達の世界が意思を持っていて、人間の所に降臨しているとしたら、アイデア達の世界は現と融合してしまうはずだ。そのような事が起こらないと言うことは、現には人間にしか分からない『何か』があり、それが人間に力を貸している。アイデアはそう考えたのだ。

「何か、って言われてもなあ……」

「それが何だか分からないから、何かと呼ぶしかないのよ」

「ところで、話を変えちゃって悪いんだけど」

「どうかしたの？」

「あの、さっき通った人達のこと、私の言ってる騎士とは違ってる……」

「元々、騎士というものは残虐非道な存在だったの。当たり前のように物を盗み、中には血が流れるのを楽しむ者まで居た。それを見兼ねたある者が、騎士とはこういうものであるべきだと言う規範、つまり騎士道を生み出したの。あなたが言う『騎士様』という存在は、その騎士道を心得ている存在のことよ」

「そうなんだ……それで、その騎士道には、どんな規則があったの？」

「寛大であること。弱者を守ること。崇高な行いをする事。他にもあるけど、面倒だから省略するわ」

「へえー。やっぱり私の騎士様は素敵な人だったんだね、よかった！」

「さあ、外に出る方法を考えるわよ」

「普通に出られないの？」

「無理だろうな。出口に見張りが居る」

シエルが嫌そうな顔をしている。ここに漂う穏やかならぬ空気を感じ取ったらしい。

「ええ。おそらく、戦争でも始まるのでしょーうね」

「じゃあ、さっきの人たちは……」

「いいえ、あれはこの騎士よ。戦いの前に酒でも飲むつもりでしょう。街の人間から奪って、ね」

「いずれにしても、穏やかな空気ではありませんね」

「まあ、いいでしょう。その辺の壁から出ましょーう」

「見られちゃったらどうする？」

「シエルがなんとかしてくれるわ」

「え、俺？ いや、見つからないようにするくらいなら出来るけどさ」

こうして街から出る方法を決めた一同。次は壁を探す作業だ。

「こつちよ」

アイデアが望遠の魔法を使い、一番近い壁へ向かう。後に続く三人。「複雑な造りをした街ですね」

「迷路みたいで迷っちゃうよー」

「それが狙いなんだろ。領主の居る建物も他の家に紛れてるみたいだし」

「領主の部屋は地下にあるみたいね。領主は今、怪しい儀式をしてるわ」

「そんなとこまで見えるんだ……」

「本当は望遠の魔法なんて使わなくても見えてるんだろ」

「ええ、そうだけど」

「じゃあ、なんでそんな面倒なことしてるんだ？」

「だって、つまらないじゃない」

不敵な笑みを浮かべたアイデア。アイデアにとっては、目を閉じながら歩く程度は娯楽でしかないらしい。実際、アイデアは移動を開始してから一度も目を開けていないのだから。

「望遠の魔法を使わずに、ただ目を閉じただけでも歩けるわよ」

「空気で分かるのか？」

「あなたとは違うわ。目を閉じていると、余計なものが見えない分、いろいろなものが見えるようになるの」

「というか、そもそも望遠の魔法ってどんな魔法なの？」

話を聞いていたシルヴィアが、一番重要そうな質問をした。

「遠くを見る魔法よ」

「それは分かるけど……」

「私が説明します。望遠の魔法は、基礎的なものだど景色を拡大して見る、つまり見たいものが建物の向こうなどにあつた場合は見ることができません。術者の能力が高くなれば、望んだものを透視してその向こうにある対象を見ることが出来るようになります」

こつちよ、と言いながら右へ、左へ、せかせかと移動するアイデア。実際に望遠の魔法を使って解説をしながら歩くフレリア。フレリアの解説を聞きながら、迷わないようにしっかりと付いてゆく二人。やはり構造はかなり複雑らしく、壁に辿り着くまでにはもう少し時間がかかりそうだ。

「更に能力が上がれば、目をその場所に移動させたかのように、自由な視点でものを見ることが出来るようになります。これは本来、ものをいろいろな視点から捉えることによって、本質を見極めようと創られた魔法なのですよ」

「そうなんだ。私には縁のなさそうな……もちろん、何か欠点もあるんでしょ？」

「はい。この魔法を使っている間は目を閉じていないといけません。基礎的なものしか使えない場合は、このように歩きながら使うと大変なことになってしまいますから、気をつけて下さいね」

「着いたわ」

フレリアの解説が終わると同時に、丁度よく壁に辿り着いた一同。「あら、変な結界が張ってあるわね。壊してしまおうかしら」

「いやいや、絶対ばれるだろ」

「いいじゃない、その方が面白くて」

またあの意地悪な笑みだ。

「私はどちらでも構いませんよ。面白ければ」

「案外、フレリアって怖いところがあるよな」

「ふふつ。聞かなかったことにしてあげます」

いつものように優しく微笑むフレリア。しかし、その優しさの中に気づいてはいけない何かがある……

「……で、どうするんだ？」

「この結界は私たちに害を与えるようには作られていないわ」

「分かりました。普通に出ましよう」

「そうね」

そう言っただけで、そのまま壁に向かって歩き出したアイデア。

フレリアも後に続くが、そのまま行けば壁にぶつかってしまうだろう。少々戸惑いながら後に続くシエルとシルヴィア。そして壁は目の前に迫り

今にもぶつかる、という瞬間、アイデアは目に少しだけ力を入れた。するとアイデア達の体は壁をすり抜け、あっという間に壁の向こう側

へ出てしまった。

「どうかしたの？」

「俺、壁は通れないものだと思ってたからさ……」

「私も壁を壊して出るのかと思ってただけど……」

「壁つてすり抜けるものでしょう？ 私、壁を避けて歩いたことなんて無いわよ」

「じゃあ、壊したことは？」

「あるわよ。力加減を間違えて、空間と一緒に壊してしまったことが」

アイデアは平然と、そして至って真面目に言っているようだが……。アイデアの側に居るような存在でも理解が出来ない話だということは言うまでもない。

「この人、なんかおかしいよ……」

「この方は少し特別なですよ」

「こちらの世界で言えば、トンネル効果というものよ。粒子が一定確率で壁を抜けてしまうという現象があるの。本来は一つの粒子が移動できるだけでも確率が低いから、体を構成する全ての粒子が壁を抜けるなんて天文学的な確率よ。だからそれが起きる確率を百パーセントにしたの。自然の法則の中にあるものだから、決して自然を捻じ曲げている訳ではないわ」

「確率を弄るだけでも相当捻じ曲げると」

「あなたの存在を捻じ曲げるわよ」

「はい、何も言いません……」

自然と言葉遣いが丁寧になってしまふシエル。

「それでよろしい。深く考え過ぎてはいけないのよ。それこそ、秩序を乱してしまうわ」

「それで、これからどうするの？」

「そうですね……別の街を探すしか無さそうですが」

「戦争の起きていない街に行きたいわね。手分けして手掛かりを探すという手もあるけど」

「えー。私、そんなの見つけられる自信ないよ」

「俺も……」

「でしょうね」

「ふふつ。まずは次の街まで移動しましょう。後のことは、その時考えても遅くありません」

「そうね。今は考えるべき時ではないのでしょうか」

その言葉を合図に歩きだす一同。だがここは、間もなく戦争がはじまると言う街のすぐ外だ。一見何も無い草原に見えるが、何も無い訳がない。

「きゃあ！」

地面が崩れる音と共にシルヴィアの姿が消えた。落とし穴に落ちたようだ。

「あなたというひとは……」

「おい、さすがに地面に空いた穴に気付かないようにするなんて無理だぞ」

「大丈夫です。私達に気付かなければ、きっと動物でも落ちたんだ、と思って貰えますよ」

「実際、珍獣が落ちていた訳だけど」

「いいもん、どうせ珍獣だもん。どうせやる気の無い顔だもん！」

「向こうに森が見えるわ。あの森を抜けましょう」

その後は罨にかかることも無く、無事に森の入り口に着くことが出来た。が、入口と言ってもその部分の草がやや少ないだけであつて、決して道と呼べるような程しつかりとしたものではない。道ではない所を無理やり通り抜けると言つた方が正確だろう。

「なんか、ちよつと気持ち悪い森だね……」

「そうかしら。賑やかで楽しそうだけど」

「にぎ、やか……？」

「多分それ、見えちゃいけない奴だぞ」

「あなた達を見る必要が無い。だから見えないのよ。それに、見え

ても気分が悪くなるだけだもの」

「襲われたりしたらどうしよう!」

「その時は私が助けますよ」

「あれ、俺達つてこっちの世界の存在じゃないから、そういつのは関われないんじゃないか?」

「え、本当?」

シルヴィアは嬉しそうに言ったが、そんなささやかな希望は一瞬にして碎かれることとなる。

「今、私達はどこに居る存在の器を使っているのかしら。特にあなたの器は人間にとっても近いものだから……ね」

そう言ったアイデアが浮かべていたのは悪魔の笑みそのものだった。この時、辺りにシルヴィアの悲鳴が響き渡ったのは言うまでもない。「行くわよ」

「いや……」

「残ってもいいけど」

「もっと嫌!」

「シエルさんが気配を消して下さっているので、自分から関わらなければ何も起りませんよ」

「だといいけど……」

こうして、この世ならざる者達が住まう森へと足を運ぶ一同だった。

冥界からの招待状

まだ日が出ているというのに、薄暗くてじめじめとした森の中。木の葉を踏む音だけが聞こえてくる。

「なんか、空気が変……寒いと言うか、ひりひりすると言うか……」
「彼らはあなたの本質とは逆の存在。反発し合ってもおかしくはないわ」

「え、じゃあ……触られてる、の？」

「違うわ。彼らにも気配というものがあるの。暗い気配に満たされれば、暗い雰囲気になるでしょう？」

「あ、そっか」

「それにしても……来るタイミングを間違えたかしら」

会話もほどほどに、静かに森を進んで行く一同。振り返ってみても、もう入口は見えない。かといって前方を見てもまだ出口は見えない。ただじめじめした空気と、道とは呼べないような道があり、まだ誰も気づいていない何かが、静かにこちらへ近づいてきているだけだ。

「きゃあっ」

右後ろ辺りから小さな悲鳴が聞こえる。もちろん悲鳴の主は。

「どうしましたか。シルヴィアさん」

「この木だけ枯れてる……絶対おかしいよ！」

シルヴィアの言う通り、ここに生えている木が一本だけ枯れ果てている。この広い森の中で、たった一本だ。アイデアは振り向かずに、こう忠告した。

「見ない方がいいわ。結構危ないのが居るから」

「特にシルヴィアさんは危険ですね」

「分かった、見ない……」

再び歩き出すアイデア。歩く速さは変わらないが、やや焦っているような気配を感じる。

「ところで、さっきの木はなんだったの？」

「知りたい？」

「え、どうしよう……」

「亡霊よ。首を吊って死を得ようとした人の。ね、フレリア」

「はい。茶色い服を着ていて、まるで枯れた木の色とそっくりで…

…目だけはこちらを見ていました」

「半分、木と同化していたわ。だから一瞬、何も無いように見える」
「もはや何も言わなくなったシルヴィア。言われてみれば、戦争の起きるようなこの時代。更には食べ物さえ満足に手に入らないのだ。深い森にたつた一人で潜り込む人間が居ても、おかしくはないのかもしれない。」

「シエル。そろそろ、来ているんじゃないかしら」

唐突に尋ねたアイデアに対し、深刻そうな顔つきで答えるシエル。

「そうだな、いつ来てもおかしくない」

「気配、消しきれない？」

「無理だろうな。相当な数がついて来てるし、相手も無理やり入ってくる」

「相当なものが居るのね。あなたの力が及ばないなんて」

「他の存在とは本質が違うからな」

気がつけば、辺りは互いの顔がようやく見えるくらいまで暗くなっていた。まだ日が暮れる頃ではないはずだが……ふと、目を右に向けると、何やら光っているものが見える。普通の人間が五人並べるほどの大きさで、青白く、丸い発光体。

「来たわね」

「なにあれ……」

「とりあえず、逃げるわよ」

視線を戻し、出口に向かって走り出すアイデア。皆も後に続く。

足元に絡みつくものになど目もくれず、とにかく走り続ける一同。だが、次第に速度が落ちてゆく。どういう訳か、足を動かす速さは変わらないにもかかわらず、進む距離が明らかに減ってきているの

だ。

「なんか、体が重い……」

辺りは既に真っ暗となり、互いの気配によって存在を確認するこ
としか出来ない。ふと上を見ると、木々の間から月の光が差してい
るのが見えた。そう、この世界には夜しかないのだ。天からは月明
かりが、背後からは青白い光が。今はどちらにも不気味な存在に感じ
る。

「招待されてしまったわね」

「困りましたね」

「もうここでは、気配を消しても無駄だぜ」

「分かっているわ。シルヴィア、あのひとに変われるかしら」

「え、いいの？」

「大丈夫よ。ここは夜しかない世界。だとすれば、あのひとの方が
居るべき存在」

「分かった。………」

シルヴィアは下を向き、小声で誰かと話しているようだ。辺りの
空気が張り詰めるのを感じる。

「……終わったよ」

話を終え、顔を上げた瞬間、シルヴィアの足元から夜よりも暗く、
重たい空気が溢れ出す。足元から出る漆黒は彼女の体に染み込んで
ゆき、ついに『あのひと』が姿を現す。

「久しぶりね」

「妾わがわがこちらへ来ても問題はなかったのか？」

そこに存在したのは、乾いた血液のような色をした翼で体を覆い、
真っ赤な髪の毛をなびかせる、紫黒しじくの肌を持つ存在。その存在は喉
が潰れたような声でゆっくりと話している。

「大丈夫よ。ここは現とはまた別の世界。ここなら好きに出来るわ」
「ならば都合がよい。妾も久しぶりに力を使いたいと思っていたの
だ」

「あなた、こちらの世界の者達とは近いでしょうか？ 私達は本質が

合わなくて、うまく力が掛けられないのよ。私達の代わりに、お礼をして貰えないかしら」

「それは面白い。ならば彼らと接触するに相応しい器が必要だな…

…」

「フレイア、このひとに器を作ってあげて」

「分かりました。今のあなたに合う器はこれです。イクリプスさん」

「良い名前だ……妾は闇の真理、イクリプス」

器が与えられた瞬間、イクリプスを中心に暗黒の気配が波動となつて広がる。それと同時に、月が徐々に欠けてゆく。皆既月食だ。

やがて月明かりは完全になくなり、あるのは謎の発光体のみとなつた。

「この力……満たされてゆく……」

闇が器と共鳴し、その力を増大させているようだ。この光景を目の当たりにした者になら、名前というものがどれほど重要なものか、理解出来ることであろう。

今、目の前にある唯一の光。それは時折強く、時折弱く、ゆらゆらと揺らめくように佇たたずんでいる。その光を良く見てみると、無数の顔が集まっているように見えた。おそらくは、この森で死を得ようとした者達の集まりだろう。

「この者達、自らの滅を理解しているのか？」

「そのようね。滅されてもなお、在るべき処へ還ろうとしない、還れない」

「死を冒流した者の行く末……」

悲しそうな顔をしているフレイア。

「死を冒流した罪は、決して軽いものではないわ。死はきちんとした手順を踏んで、初めて与えられるもの。手順を踏まずに得ようとするれば、その者に与えられる死は亡なくなり、亡霊となってしまう」

「肉体を滅され、自由を滅され、そして己の記憶、姿さえ滅される

……哀れな者達よ」

イクリプスは目の前に居る人ならざるものに哀れみの目を向け、

宣告した。

「汝らに真の闇を与えよう、せめてもの救いだ。……闇に溶けるがよい」

そう言っただけでイクリプスは地面に向けて手のひらをかざした。すでに闇の中に居るといふのに、それでも闇が立ち込めているのが見える。互いの気配もせず、感覚さえも麻痺しそうになる。これが本当の闇というものか。

「このような形でよろしいのだろうか？」

「ええ、完璧よ」

徐々に闇が晴れてゆく。青白い発行体はもう無い。同時に、この世界も徐々に姿を失いつつある。

「世界が消えるか」

「ええ、残念ね。また会いましょう」

「ふふ……妾もまた会えることを楽しみにしているぞ。ではまた、その時まで……」

夜の世界が消え、光に包まれる一同。急に光が入って来たため、辺りが真っ白にしか見えない。何度か瞬きを繰り返して、徐々に目を馴らしてゆく。……どうやら、森の出口に来られたようだ。

「ふう、疲れたー」

「おかえりなさい、シルヴィアさん」

目の前にはいつも通りのシルヴィアが居た。

「また賑やかなひとに戻ってしまっただわね」

「だって、私はあのひととは全く逆の存在だもん」

「そもそも、相反する二つの真理を同時に持っている時点で十分賑やかなものだけど」

「そうかな？ これでも結構抑えてるような気がするんだけど」

「賑やかなのは楽しいことです。抑える必要など、ありませんよ」

「やっぱりフレリアは誰かさんと違って優しいよね……あれ、どうしたの？ シエルが変なんだけど」

シエルは何か複雑そうな顔をして、シルヴィアのことを上から下

まで舐めるように見ている。

「どうかしたのですか？」

「いや……シルヴィアってこんなに凄い奴だったかなーって」

「もしかしてあなた、シルヴィアが光の真理だって知らなかったの？」

「だって、それっぽいこと全くしてなかったし……」

「あなたの思う光って何？ あなたの思う闇って何？」

「うーん」

「無理に頭で理解しようとする必要はないわ。理性は流れを崩すだけ。流れに逆らい過ぎれば」

「上手くいくものもいなくなる、だろ？」

「その通り」

「自分という概念ですら、時として自分を制限する存在になってしまいます。難しい世界ですね」

「うん、まあ……そう、かな？」

シエルには難しすぎたのか、頭に疑問符が浮かんでいる。

「あ、あっちの方に街が見えるよ！」

「何か手掛かりがあるかもしれませんね」

「見た感じでは、あまり良い気はしないけれど……まあ、良いでしょ」

充滿する死の香り

「次の町には騎士様居るかな？」

ようやく緊張が解け、徐々に口数が増えてゆく一同。今はのんびりと歩きながら雑談を楽しむ時のようだ。

「また見張りとか居なければいいけどな」

「そしたらまた壁をすり抜けるんでしょ？」

「もちろん。私は壁を避けないもの」

「壁を避けた事が無いって、どう考えても普通じゃないよな」

「もし競争をした時に、目の前に壁があつたら避けるわよ」

「だけどそういうことって絶対に無いんだろ」

「ええ。だって、競争をするときは事前に壁を消しているもの」

「競争くらいでそんな大げさなことしなくても……」

「競争の為ではないわ。私は壁を避けたことが無い。一度も無いというのが重要なの」

「まあ、イデアみたいに凄く長い間存在してるんなら、そう思っても仕方ないかもね」

「そうよ。私はあなた達の生まれる、ずっと前からこの場所に居るもの」

「しばらくするまでは、時という概念すら無かったと聞いたことがあります」

「えー、時も無かったの？」

「どんな存在なら時よりも前に居られるんだよ」

「分からないわ。本当に長い間、この世界を見てきたもの。自分がなんなのかさえ思い出せないの」

「ふーん、大変なんだな」

シエルとシルヴィアが目を合わせた。どうやら同じことを考えているらしい。

「ねえ、もしかしてだけど……」

「何よ」

「アイデアって、忘却の真理なんじゃないの？」

「それって、ただの老人と変わらな……あつ」

一瞬にして場の空気が凍りついた。危険を感じたシエルは素早く後ろへ下がる。一方、それに気づかないシルヴィアは。

「そのうち物忘れが激しくなりすぎて、『あら、帰り道が分からないわ』ってなったりして！」

向こうの町に聞こえそうなほど大きな笑い声が響いた。シルヴィアは腹を抱えてしゃがみ込み、地面を激しく叩いている。一人で盛り上がっているシルヴィアに対し、世界の終わりを見ているような顔のシエル。

「あなた達、消されたいのね」

口元だけ見れば微笑んでいるアイデアだが、目が全く笑っていない。シルヴィアは緊張が解けたばかりだからか、とても重要な事を忘れていたのだ。亡霊などという程度の低い存在よりも、もっと恐ろしい存在がいつも側に居るということを。

「……助けて、イクリプス！」

「俺はシエルじゃない、俺はシエルじゃない……」

いけない、と思った二人だがもう遅い。アイデアの背後から氷よりも冷たく、闇よりも暗い空気が溢れている。きつとイクリプスにも負けないだろう。

「あのひとは来ないわ。あなたもそんなことをして、器から出ようとしても無駄よ。そして私は忘却ではない」

「お、俺はちよっとした冗談のつもりで」

ぶわっ。アイデアの体から出る空気が二人の顔を掠った。もはや二人の悲鳴は声にもならない。

「忘却は恐ろしい存在よ。あのひとの名を呼び、笑うようなことはしない方がいいわ。下手をすれば、この世界ごと忘却の彼方に消し去られてしまうから」

「分かりました……」

亡霊よりも恐ろしいアイデア。アイデアよりも恐ろしい忘却。シルヴ
イア達はいつも恐ろしい存在に囲まれているということを認識させ
られてしまった。こんな状況であっても、フレリアはいつものよう
に微笑んでいる。ある意味では、こちらの方も恐ろしい存在なの
かもしれない……

「全く。そんなことばかり言っていると、コキュートスに落とすわ
よ」

「コキュートスって？」

「あなた……帰った方がいいわよ」

「あの、俺も分からねえ」

「帰りなさい」

アイデアはもはや、呆れを通り越している。なぜなら、アイデア達の
世界に住むものならば本質上知っていて当然であるはずだからだ。

「コキュートスはとても寒く、音の無い所です。中心部にある氷漬
けになった『何か』の側には、悲嘆という名の川が流れているので
すよ」

二人のとんちんかんな質問に対し、フレリアが優しく回答をした。

「あ、あれコキュートスって言うんだ」

「俺も知らなかった……」

「では、あなた達はコキュートスのことを何と呼んでいたのですか
？」

「寒いところ」

二人の声が重なった。

「さすがですね。ふふっ」

「寒いのはあなた達の頭の中よ」

と、こんな話をしているうちに町の入り口に着いたようだ。

「あ、そういえば近づく前に見張りが居るか確認しようって話だっ
たと思うんだけど」

「まあ、今見る限りでは居ないし……」

「結果的に問題は無かったのですから、良いと思いますよ」

「あなたが忘れていたのは偶然ではないわ。そう決められていたのよ」

「どういうことだ？」

「分かっているくせに。中を見てみれば分かるわ」

そう促され、少し開いている門の隙間から中を覗くシエル。

「私にも見せて」

シルヴィアも隙間の下の方から中を覗いた。そして彼らは目の当たりにしてしまった。この町に、見張りが必要でない理由を。

「きついな……」

町中、横たわっている人々で埋め尽くされていた。しかし、死んでいる訳ではないようだ。全身が黒いあざだらけになっていて、苦しそうにうめき声をあげている。

「黒死病よ」

「治らないの？」

「この時代に治療法は無いわ」

「じゃあ……」

「諦めるしかないわ」

「だからさっきの町の領主、変な結界を張ってたのか」

「そうすることで、疫病が入れないと思っただけでしょうね」

「運命とは、残酷なものです」

『運命』と聞くと、多くの人は決められた巡りあわせのことを想像するかもしれないが、実際は違う。運命というのは、自分が望む、望まないに関わらず、選ぶことになってしまった道のことを言うのだ。そういった意味では、未来は自分達の手によって決められると言えるよう。自分で決めてしまった以上、逆らうことは出来ないのだ。

「そうね。未来は過去には逆らえない。一見、関係の無いように見えることでも、必ず規則性がある」

裏を返せば、規則さえ見えていれば、流れさえ知っていれば、このような事にはならなくて済むということだ。しかし、それが分か

らないのが人間。人間は、目に見えないものに気づけないよう『決められて』いるのだから。

「少し調べていきますか？」

「この中に入るのか……」

「私は別に構わないけど」

「気付かれたりしないかな？」

「シエル、気配を消して」

「分かった」

「音を立てずに行くわよ」

次の瞬間、全員が足音を消した。正確に言えば、どんなに地面を踏みつけても何の音も出ないのだ。アイデアが一時的に音という概念を消したのであろう。

念のため、静かに門を開く。やはり音はしなかった。そしてシエルの力により、一同が入って来たことに気づいた者も居ないようだ。「本当に見えてないの？」

「見えてはいるわ。だけど、意識して見なければ見えていないのと同じ。気付かれることはないわ」

「苦しそうだね……」

「ええ、だけど私達は手を出すべきではないのよ」

「そうですね。残酷ですが、仕方ありません」

さらさら。

「はっ」

アイデアが何かの気配を感じて建物の陰に目をやる。が、そこには何も居なかった。

「誰か、居るわね」

「そのようですね」

フレリアもまた何かの気配を感じていたようだ。

「少し先に進むわよ」

この町は以前の町と違い、複雑な地形をしていないので移動がし

やすい。倒れている人々を避けながら、更に奥へと足を踏み入れてゆく。

「そこ」

アイデアが突然右の建物を見る。開いている扉の裏に

「止まりなさい」

こちらを見ている者が居た。アイデアはすかさず拘束の魔法を放つが、それよりも速く、謎の人影は消えてしまった。その人影は消える直前、少し笑っているようにも見えたが……

「おかしいわね」

「はい。人間が拘束の魔法より速く動くのは不可能なはずです」

「じゃあ、また亡霊なの……？」

「それは無いわ。あれは確かに人間よ」

「だけど、俺の力が効かなかったのはなんでだ？ 効いてないことにすら気づけなかったし……」

「何故でしょうね。実際に会って、確かめないと分からないわ」

それからしばらく探索を続けたが、特に手掛かりとなるようなものは見つからなかった。

「そろそろ、別の所へ行きましょう。この町に手掛かりはないわ」

「やっぱり、分かれて行動するの？」

「効率よく探すには、その方がいいわね」

「そろそろ俺も自由に動きたいし」

「私は楽しければ構いませんよ」

「私に探せるかな？」

「意識して探さなくてもいいわ。その時が来れば自然に見つかるはずだから」

「そうだといいけど……じゃあ、私はこっちな」

「じゃあ、俺はこっち」

全員が違う方向を指さす。いよいよ全員が分かれて行動をする、その時が来たようだ。

「分かったわ。ではまた、その時まで」

上昇気流が起き、シエルが消えた。天使の梯子が現れ、シルヴィアが消えた。それに続くようにアイデアも消えた。フレイアは静かに何かを呟いている……

「そう言えばあのひと、まだ生きているのかしら」

アイデアは草原を歩きながら、前回こちらへ来た時に会った、ある人間のことを思い出していた。

「人間の寿命は短いから……行ってみれば分かるわね」
ふわっ。

高德な罪人は宇宙を見る

「国王様、開けて下さい！」

側近達が激しく扉を叩き、私を呼んでいる。だが、もういいのだ。私はこの国を捨てる。私が望んだのはこんなものではない。いつから私は、私の世界は……もはやベッドから起き上がる気力も無い。「後にしてくれ」

もう何回この言葉を使っただろう。ここ数日、食事もまともにしていない。

……音が鳴りやんだ。部屋から離れて行く音が聞こえる。ようやく諦めたか。それでいい。最期の時くらい、静かに過ごさせて貰いたいものだ

とんとん……。静かなノックが四回。今は誰も居ないはずだが、確かに聞こえる。このノック、聞いたことがある。私が若いころに会った、とても不思議な存在。私がまだ必死に勉強に励んでいた頃のことだ。まさか……。だが、それしか考えられない。なぜなら、この城の中でノックを四回する者は居ないのだから。

「入ってくれ」

私は話しかけてみる。そして思わず扉を見てしまう。彼女なら開くことが出来るだろう。嚴重に封鎖してある、この扉を。

何か、木材が落ちるような音がした。私が見ているのは本当に現実なのだろうか。私の目の前で、釘を打ちつけて扉に固定しておいた板が落ちてゆく。

カシャン。扉の取っ手に巻いておいた鎖が切れて落ちた。……来た。体から変な汗が噴き出してくる。心臓の鼓動が激しくなり、胸が少し苦しくなる。そして扉が徐々に開き……。

「久しぶりね」

めまいがした。視界がグレーのチェック模様になる。懐かしい声、変わらない姿。私が若いころに見たのと全く変わらない彼女が居た。

いや、正確には見えている訳ではない。感じるのだ。その息吹を、肌で。

「ああ……」

あまりの衝撃か、まともに声を出すことが出来ない。何度か深呼吸をする。彼女が、こちらを見ている。

「随分と、年をとってしまったわね」

「そうだな……それにしても、よく私が死ぬ前に来てくれた」

「本当ね。私達は、遊んでいるだけでも百年が経ってしまうから」

「ふふ、まだ三十年しか経っていないぞ」

「あら、そう。それでも、あなたには長すぎる時だったようだけど」

「まあ、な……」

「もう長くないのでしょうか？」

その言葉が胸に突き刺さる。きつと全て知られているのだろう。

私が彼女を裏切るようなことをしたのも……。

「……許してくれ」

「何を？」

「私は君を裏切るようなことをした。人の命は奪わないと決めていたのに」

人の命はとても重い。それを奪うということは、それこそ世界の秩序が滅茶苦茶になるくらい代償が必要だ。私はそれを知っていた。彼女がそれを教えてくれたのだ。だから私は戦争などと言った馬鹿げたことをしたくはなかった。

だが、現実には厳しかった。力を持たない国など、他の国にとっては格好の獲物だ。戦の神も敵国の味方をしたのか、全てが私にとって都合の悪いようになっていった。そして私は、ついに禁断の手を使ってしまった……。

「それがどうしたの？」

意外な言葉だった。秩序を乱し、真理を理解しない存在をひどく嫌っていた彼女が、私に対してそんな言葉をかけるなど……。

「罰するべきは行為ではなく意図。この世界には縛るものが多すぎ

るもの。思い通りに出来ると思わない方がいいわ。それに、あなたも人間だもの。人間は無力なの。一人では思い通りにすることも出来ない。そうでしょう?」

「だが、私は敵であろうと人を欺いたのだ……」

「人間は過ちを犯すように創られているのよ。位が上がったときに、そう言ったことが起こらないように。最近は私達の世界に來られる人間は少ないの。ここは過ちが許されない世界。数百年したら、もっとひどくなるわね」

「私を許してくれるのか」

「許すとか、そういう程度の話ではないわ。ここは気づくための世界。気づくためには体で覚えなさいといけない。あなたが言っていたことよ」

「そう、だったな……」

私はそんなことも忘れていたのか。……ああ、いつから私は、私の世界は壊れ始めたのだろうか。音もなく崩れていく私の世界、私の全て。いつ、どこで、なぜ。完全だったはずの私の世界。不変にして不滅であったはずの私の世界。全てが順調だった。全てが思いどおりだった。なのに、何故

「知りたい?」

「私の心が見えるのか」

「見たくなくても見えるわ。私は見なければならぬから」

知りたい。いや、知っている。私は理由を知っている。だけど知らない。知ってはいけない。それを知れば、真実の重みが私を押しつぶして壊してしまう。知れば私が壊れる。知らなければ世界が死ぬ。しかし世界が死ねば、私も死んでしまう。

「意味の無い繰り返しに、何を求めているの?」

なにも求めていない。求めたくない。意味の無いことだと分かっているのに。運命に素直になれば良いと分かっているのに。もう途は無いのだろうか……。

「意識して見なければ、見えていないのと同じ」

「はっ……。ふふ、それも私が言ったことか」
「そうよ」

「そうだ。意識して見なければ、見えていないのと同じ。私が望んでいるのは、人々の死でもなければ、私の世界の死でもない。私が見ていなかったのは、自分の心。そう、これだ。全てが満たされるような感覚とともに、全てが真っ白になってゆく。なんと甘い甘美な夢。きつと心地が良いのだろう。」

「心と体が繋がっているように、生と死も繋がっているんだな」
もう彼女は頷くことしかない。私の決断を待っているのだろう。そう、これが私の望んでいたこと。だから今こそ、自信をもって言おう。

「私は、全てを知っている」
その瞬間、私は宇宙を見た。それは酸素濃度の減った脳が見せる幻。沢山の星の集まりが見える。銀河だ。全てを受け入れた今、私には言いようのない満足感があつた。目の前で輝いている星たちも私を歓迎している。

全身に弱い電流が流れているような感覚と共に、全てが満たされてゆく。その時、目の前にある星が強い光りを放ち始めた。超新星爆発。全てが終わり、全てが始まる瞬間。ああ、なんと心地よい全てが真っ白になり、私の意識もそこへ溶けて行く。私が消えるその瞬間、頬に誰かの温もりを感じた。

「死は、怖い？」

「結局、大切な事を聞くのを忘れていたわ」

先ほどの草原に戻って来たアイデアは、次の目的地へ繋がりそうなことを聞こうと思っていたのだが、肝心な事を聞く前に向こうの世界に逝かれてしまい、行き先を決めかねていた。

「一度向こうに戻って聞いてみようかしら」

少々手間はああるが、他に行く予定の所も無いため、それを聞くためにも一度戻ることにするようだ。

「開きなさい、夢の扉」

静かな風と共に、『夢』へと続く次元の扉が開く。ふわっ。イデアは静かに中へ入った。

こちらは夢。草原という点では先ほどいた所と変わりはないが、やはり感覚でも捉えられないような『何か』がここにはある。

「来てくれたのか」

良く見ると、先ほどイデアが眠りへと導いた、あの国王が居た。

「無事に来られて良かったわね。まだ形が不安定なようだけど」

「ああ。肉体というものが、どれほど私の形を作っていたのかが良く分かったよ」

人間がこちらへ来られたとしても、国王のように自らの力で意識を持ち、他の存在の力を借りることもなく、その姿を維持することが出来るのはとても珍しいことだ。生きているうちに精神や智、品性が足りない者は肉体が消えると同時に、自身の精神もばらばらに散ってしまう。そういった者達がどうなるかは……その時が来たら説明するでしょう。

「その様子だと、まだ自分の真理が理解できていないようね」

「恥ずかしいことだが、その通りだ」

「まあ、そのうち分かるでしょう。ところで、聞きたいことがあるのだけど」

「現に変わったものや変わった場所は無いか、ということだろうか？」

「ええ。何か心当たりはないかしら」

「死の予言者」

「死の予言者？」

「ああ。いろいろな町へ行つては、誰かが死ぬことを予言する。町が滅びることを予言された領主もいるらしい」

町が滅びる、という言葉にイデアは心当たりがあった。拘束の魔法が効かなかった、あの存在を見た町だ。

「心当たりがあるわ」

「そうだろう。今もどこかの町で予言をしているはずだ」

「だけどそれだけではなくて、もっと目的に近づけるような手掛かりも欲しいわね」

「目的に近づくものか。特別な道具などは必要ない。ただ、念ずれば花咲く、とだけ言っておこう。私の恩師が口癖のように使っていた言葉だ」

「面白いわね。楽しみだわ」

「聞くことはそれだけかな？」

「ええ、参考になったわ。私はまた現まわに行くとしましょう」

「君のことだから、特に心配する必要もないが……気をつけてくれ。ではまた、その時まで」

「ええ」

それだけ言うと、静かに扉が開いた。アイデアは消える寸前に振り向いて、一言。

「また会いましょう、『英知』」
ふわっ。

無がある場所には何がある？

「私、なんでこんな所に居るんだろう……」

シルヴィアは誰も居ない静かな町の中に居た。

「何かないかなー。手掛かり、手掛かり……」

その時、背後から馬の走る音が聞こえてくる。最初の町での事を思い出し、とっさに近くにあった物の陰に隠れるシルヴィア。音を聞く限りでは、馬は一頭しかないようだ。

「あつ」

馬が目の前を通ったその時、上に乗っている騎士と目が合う。騎士は行儀よく馬にまたがり、シルヴィアに優しく微笑みかけていた。騎士を乗せた馬はそのまま通り過ぎ、先にある大きな建物へと向かってゆく。

「今度は本物の騎士様だ！」

走って後を追うシルヴィア。騎士は既に建物の中へ入ったようだ。

騎士の後を追って城へと踏み入ったシルヴィア。ここにも人はおらず、明かりも付けられていないため不気味な雰囲気漂っている。どう考えても『招待』されてしまったとは思えないが……

「騎士様どこ？　もしかして見えちゃいけない人だったのかな」

カシャン。

「きやあつ」

右前方辺りから鎧のような音が聞こえた。右前方には階段があり、上の方へと繋がっているようだ。

「とりあえず、行ってみよう」

恐る恐る階段へ近づくとシルヴィア。危なさそうなものを感じないことを確認して一段づつ上がってゆく。

「あれ……」

二階は大きな広間になっていた。向こうに豪華な椅子が置いてあ

るのが見える。ゆっくりと近づくと近づくシルヴィア。

「え、どうしよう」

何歩か近づいた時、前方に異変を感じる。目には見えないが、誰かが椅子に座っている。だが、人という気配がする訳でもなく、ただ何かを感じるというだけだ。シルヴィアからしてみれば、それだけでも恐怖の対象となるには十分であるが。

「何をしているのかしら」

「きゃあ！」

突然声をかけられ、大きな悲鳴を上げてしまったシルヴィア。

「声が大きいわ」

「アイデア……脅かさないでよ……」

「こんな所に居るのが悪いのよ」

「だって、騎士様を追いかけてたら……」

「それは残像よ」

「残像？」

「稀に起きる自然現象よ。何かを通った時、ごく稀に空間がそれを記憶してしまうことがあるの。そしてそれが何らかの弾みで再現される。シルヴィアの騎士を思う気持ちが、空間の記憶を呼び起こしてしまったのね」

「じゃあ、こつちを見て笑ってたってことは、前にも同じことをした人が居るっていうこと？」

「でしょうね」

身震いをするシルヴィア。

「あ、そう言えば、あそこになんか居るの……あれ、なに？」

「あれは『無』よ。あそこには何も無いの。だから私が何をしても無駄。だけど『無い』というのは、無というものが存在している状態のことを言うの。始まりのあるものには終わりがある。有るものは必ず無くなってしまう。無が在るという事は、いつかは『無い』という状態も無くなってしまうということ。あれはそういう存在よ」「難しい、けど……とりあえず大丈夫ってことだよね」

「そうよ」

ふと開いている窓の方を見ると、白い鳩がとまっていた。鳩はこちらを見て二、三回頷くような素振りを見せると、再び空へと飛び立っていった。

「そろそろ行くわよ」

「え、どこに？」

「フレイアの居る所よ。私達が着く頃には、ちょうど準備が出来ているでしょう」

ふわっ。アイデアと一緒にシルヴィアも消えた。

秘跡の背後に輪廻の象徴

「ようやく着いたはいいけど……何すればいいんだ？」

シエルは随分と活気のある、大きな町の中に居た。辺りを見回しながら歩いていくが、さすがにその辺りを歩いている人間に訳の分からない質問をするわけにもいかず、早くもなす術がないらしい。

「せめて神くらいの存在なら聞けるんだけどな。人間に輪の切れ目とか言っても……」

その時、シエルの視界に十字架が入って来た。

「教会か。もしかして神が降りて来てるなんて……まあ、行ってみるか」

教会の前には沢山の鳩が群がっていた。シエルが近づいたことにより、一斉に飛び立つ鳩。その中に白い鳩が一羽だけ混ざっていた。

「お、白い鳩。珍しいな」

扉を開き、中に入る。細長い椅子が並んでいて、頭上には大きな振り香炉がある。教会の独特の匂いを感じる。正面を見ると、大きなステンドグラスの前で静かに祈りを捧げている男が居た。十字架の刺繍がしてある白い衣装を着ていることから、この教会の聖職者であると判断できる。

「どうされましたか」

シエルの気配に気づいたのか、聖職者は祈りをやめ、こちらへ近づいてきた。

「お話は先ほど終わってしまったばかりですが」

「あ、いや……気配消してたのに……」

そう。気配を消していたのにも関わらず、人間に気付かれてしまったのだ。霊の類ならまだしも、人間という位の低い存在に力が破られるなど……

「どうして落ち込んでいるのですか。辛いことでも、あったのですか？」

優しい声で語りかけてくれる聖職者だが、まさか『あなたのせいで落ち込んでいる』などと言えるはずもない。

「今さつき、凄く辛いことが……」

「そうですね。では、私の顔を見てごらん下さい」

そう言われ、聖職者の顔を見たシエル。

「ん？」

聖職者の背後に何やら輪のようなものが見える……。正確に言えば見える訳ではない。その存在、息吹を感じるのだ。つまりそれはシエル達と同じような存在がここにも居るということを意味している。

「おい、お前……」

「気付いてくれましたかな？」

聖職者は悪戯が上手くいった子供のような笑みを浮かべた。背後に見える平たい輪は、人間に与えられた繰り返しの象徴。

「輪廻か！」

輪廻。シエルと同じく、流れをつかさどる真理だ。ただ、シエルはどちらかと言うと決められていない流れ、『自由度の高い流れ』であることに對し、この存在は決められている流れ、『自由度の低い流れ』であるという違いがある。

「気付くのが遅くはなかったか」

「いや、なんでこんな所に居るんだよ」

「我は知るべきだからだ。人間がどのように生きて、どのように繰り返すのかを」

「結構大変なんだな。ところで、聞きたいことがあるんだけどさ」

シエルは今までの経緯と、今回の目的を全て話した。

「……なんか、懺悔しに来たみたいだな」

「なにか、悪い事でもしたのか」

輪廻はからかうような笑みを見せた。

「それはさておき。輪の切れ目のことは我にも分からぬ。流れに逆らわずにいれば、その時が来て自然と見つかるだろう。そして病魔

に侵された町に居たという、謎の存在だが……心当たりがある」

「本当か？」

「事もあるうちに、この我に予言をして行った。あなたの仲間が死ぬことになる、と」

「それ、当たらないよな……？」

「お前たち次第だ。未来は選択の数だけ存在する。予言の外れる未来も、無い訳ではない」

「ならアイデアがなんとかしてくれるか」

「それで、お前たちはどうするのだ？ 奴を倒すのか」

「倒さなかつたら倒さなかつたで、アイデアが黙ってなさそうだからな。秩序的な意味で」

「いいだろう。可能な限り協力する。ただ、一つだけ頼まれてくれないか」

悲しむ母の正しき願い

ちょうどそれと同じくらいの時。フレイアはある村の中に居た。

「ああ、神よ。どうか私の娘を助けて下さい……」

ある村人の家では、母親と思われる人物が必死に願いを捧げている。抱きかかえられている娘は全身に黒いあざがあり……既に呼吸をしていない。

「悲しんではいけません」

母親の前に、白いドレスを着た女性が現れた。背中から神々しい光が溢れている。

「私は愛と美を司るもの。私の愛で、あなたの苦痛を和らげてあげましょう」

「女神様、私の娘は突然病に倒れました。数日前に黒いローブを着た怪しい者に予言をされたのです。初めはそんなものを信じてはいませんでした……予言の通り、娘は見たこともない病気にかかってしまいました」

母親はまるで老婆のように頬が痩せこけ、みすばらしい顔をしていた。心労が祟ったと考えるのが自然だろう。

「私は娘が倒れてから様々な治療法を試しました。それでも良くはなりませんでした。私は全財産と引き換えに、願いを叶えると言う伝説の宝石を商人から買いました。ですがこの宝石も、娘を救ってはくれませんでした」

母親の手にあったのは、透明な球の中に金色のオーロラが閉じ込められているような宝石。金色のオーロラは球に閉じ込められているながらも、光を放ちながら静かに波打っている。

「あなたは、どうしたいのですか」

女神は静かに、優しく語りかけた。

「それはマルデルの涙。確かに本物です。私達の世界にも片手で数えられるほどしか無い、大変貴重なものです」

「では、何故この宝石は私の願いを叶えてくれないのですか。願いが叶うならば、命でも喜んで差し出します。なのにどうして……」
「いけません」

女神は少し険しい口調で言う。

「あなたは死者を哀れんでいるのではありません。二度と大切な人に触れることの出来なくなつた、自分を哀れんでいるのです。この宝石は本来、祈りと愛を受け入れるためのものです。祈りとは自分を含まない無償の愛。愛とは自分を含まない無償の気遣い。自分を含めている以上、この宝石が願いを叶えてくれることはありません」
「女神様……」

それだけ言うと、女神は再び元の優しい口調に戻つた。

「絶えず願い続けなさい。それが本当の願いに変わった時、この宝石が割れ、あなたの願いを叶えることを約束しましょう。あなたの唯一の正しい願いを……」

そして女神は優しい光に包まれ、静かに天へと消えてゆく。

「大自然の長い歴史からすれば、人間の命など刹那せつなの煌めききりめき。しかしその一瞬が長い歴史の方向を決めると言うことを忘れないで下さい。皆大きいのです。繋がっているのです」

太陽の眠る刻に

「で、それを俺達が代わりにやると……」

場所は戻って輪廻の居る教会。輪廻はシエル達に力を貸す代わりに、信者の一人から受け取った『悪霊の鏡』を浄化して来て欲しいそうだ。

「待たせたわね」

勢いよく扉が開き、赤いものが視界に入ってくる。

「アイデア！ いい時に来てくれたな」

「あなたも少しは出来るじゃない。輪廻も一緒のようね」

「久しぶりだな。今はアイデアという器を使っているのか」

「ちよつと頼まれごとをしちゃってさ。他の奴らは？」

「もう来るわよ」

ステンドグラスに光が差し、辺りは幻想的な空間となる。それと共に、なんとも不釣り合いな存在が。

「お待たせ！ 一回やってみたかったんだよね」

「お前……その登場の仕方、似合わないぞ」

「それは気にしちやいけないの！」

「それで、何をすればいいのか詳しく教えてもらえないかしら」

「フレイアは来ないのか？」

「もう居るじゃない」

そう言っただけでアイデアは外に見える木を指さす。細い木の枝に止まる、白い鳩が目に残った。

「あの鳩、さつきからずっと居たような……」

「ばさつ。突然、その鳩がシエルに向かって飛んでくる。」

「うわっ」

鳩はシエルの頭上を触れるか触れないかの絶妙な所を滑空し、そのまま教会の奥まで入っていった。

「ふふっ。お待たせしました」

シエル達が振り向くと、鳩が居るはずの所にはフレイアが居た。
「さて、全員揃ったところで改めて説明をしよう」

一度奥の部屋に戻る輪廻。少しして、布に包まれた四角い物体を持ってきた。

「自分の姿を見たいのに、悪霊が見えてしまうと相談されたのだ」
布の端から植物の蔓をモチーフにしたような銀色の枠が見える。

「良い鏡じゃない」

「本当に悪霊が映るのか？」

布を捲るイデア。聖典が四冊置ける程の、芸術的な鏡が露わになる。

「特に変わりは無いように見えますが」

「私も悪霊とか見えないよ」

「これ、いつから人間の手にあつたか分かる？」

そう言われ、輪廻は目を閉じて集中する。背後の輪がゆっくりと回転し始めた。輪廻が力を使っている証拠だ。すぐに調べがついたのか、輪は二回転としないうちに止まった。

「……三百年ほど前だ。どうやら、普通の鏡ではないようだな」

「そうでしょうね」

「依頼主はこれを浄化してくれと言っている。使い物にならなくなつても構わないらしい。お前たちになら出来ると思うのだが」

「こんなに良い鏡なのに、人間には価値が分からないのかしら。まあいいわ、このひとに眠りを与えましょう」

「でも、どうやって浄化するの？」

「この鏡に何か映ってはいけないなら、何も映さなければいいのよ」

イデアはそう言って鏡を受け取り、少し楽しそうな顔をして言った。

「もうすぐ夜が来るわね。良いものが見られるわよ」

「嫌な予感しかしないんだけど……」

「さあ、準備をして。全員同時に飛ばすわよ」

ふわっ。

「あ、こっつて」

アイデアによって連れて来られたのはシルヴィアが見つけた町だった。

「あの建物の中よ」

「もうちょっと近くに飛べば良かったのに……」

「付く頃には真っ暗になってる、っていう計算だろ？」

「そうよ。確かめたいことがあってね」

「たまにはのんびりと歩くのも楽しいですね」

「楽しくない！」

「あら、一人で行って来てくれるの？」

「楽しいです……」

ゆっくりと静かに、太陽が地平線の下へ吸い込まれてゆく。空が暗くなるのと比例するように、シルヴィアの不安も高まるのであった。

「ところで……」

不安を少しでも紛らわすためか、シルヴィアが話題を振る。

「輪廻とシエルって具体的にはどう違うの？」

「え、違うのか？」

「違うと思うんだけど……どうなの？」

「ええ、違うわよ」

全く自覚がない様子のシエルを横目で見つつ、丁寧に解説を始めるアイデア。

「シエルは比較的人を縛らないような流れ、つまりこちらの世界で言う『風』を操れるのよ。その場所の空気や気配、雰囲気。気配を消すというのは『そこに人が居る』という雰囲気を無いことにしている。『影が薄い』という表現があるでしょう？ このひとが『人が居るような空気ではない』という状態を創るから、そういう現象が起きるのよ」

続いて、フレリアの解説。

「それに対し、輪廻さんは人を縛るような流れ、『時』を操ることが出来ます。それによって、輪廻さんは未来と過去を好きな時に見ることが出来るのです。この力は人間の感じる時間も操ることが出来るので、輪廻さんに気に入られた人間は幸せな時間が長くなり、苦痛を感じている時間が短くなると言われていきます」

「だけど輪廻はそう簡単に人間を好きになつたりはしないわ。まあ、人間によって形を与えられたようなものだから、当然のことでしょうね」

「へえー、そうなのか」

「あなた、自分がどのような存在なのか知らなかったの？」

「うん、まあ……俺は自分がどんな存在とか、あまり気にしないタイプだからさ」

「おめでたいひとね。まあ、その方があなたの本質に合っけど」

太陽は完全に眠りににつき、闇が空を支配する。頭上には青白く輝く月。その周りに散りばめられた星達は、今にも落ちて来てしまいうような程に力強く輝いている。闇を照らすそれらの輝きが、より一層夜という色を深めていた。

「着いたわ。空も調度いい具合ね」

「全然嬉しくない……」

イデアは嬉しそうにシルヴィアを見ているが、シルヴィアからしてみれば嫌がらせでしかない。

「騎士様に会えるかもしれないの？」

「変な期待をさせないでください！」

「本当に会えるかもしれませんよ。ふふっ」

「フレリアまでそうやって……」

「気配は消すのか？」

「消さなくていいわ。どうせ人間なんて居ないでしょうから」

「人間じゃないのは沢山居るんですね、分かります……」

これから何が起るのかという期待と、何も起こらないで欲しい

という不安が渦巻く中、恐怖の住む城へと足を運ぶ一同であった。

鏡が映すは真実の軌跡

「うわっ、なんか蹴った」

「ちゃんと見て歩きなさい」

「普通は見えないだろ！」

「見えないよ、助けて！」

「シルヴィア、そっちは逆よ。右に歩いて来なさい」

「え、こつち？ ああ、みんなの気配が離れていく……」

「おい、シルヴィア。なんか明るくする魔法とか使えないのかよ」

「え？ あ、出来るかも」

シルヴィアが人差し指で空間に漂う闇に触れた。すると触れた部分に強い光が発生し、辺りが少しだけ明るくなる。イデア達は既に右前方にある階段を上り始めているようだ。

「できたー」

「光が消える前に、早くこつちに来なさい」

「賑やかで楽しいですね」

既に階段を上りきっているフレイアは微笑みながら言う。

「しばらく使つてなかったから、魔法つていう存在を忘れてたよ」

「それにしてもお前はひどすぎると思うぞ」

「魔法ばかり使うのって、神くらいでしょ？」

「そうね。人間は本来魔法を使えない存在。私達はそもそも魔法を使う必要がない」

「確かに魔法は便利ですが、全く使わなくても問題はありませぬ」

「だけど魔法使わなかったら、壁を抜けられなくなるじゃないか？」

「壁を抜けるのは魔法とは違うの。競争の前に壁を無くしておくのもそう。壁を抜けるのは現象であって魔法ではない。競争の前に壁を無くすのは自然の流れを計算して、その時に『壁が無い』という未来が来るように調節しているのよ。それに、私は魔法を使うのではなくて……いえ、これはその時が来たら説明しましょう」

説明を聞く限りではそれも魔法としか思えないが、イデアが言うには魔法というものの他にも、普通には不可能な結果を得る力があるらしい。

「そもそも、あなた達は魔法の本質を知っているの？」

「え、何それ？」

「そんなの聞いたことないぞ……」

「……まあ、いいわ。そのうち分かるでしょうから」

返って来たのは若干期待はずれな言葉だった。

「さあ、始めるわよ」

イデアは輪廻から受け取った鏡をどこから取り出し、椅子の前へと持ってゆく。椅子の上には相変わらず何かが座っていた。

「あなたは私、私はあなた」

鏡に話しかけるイデア。

「あなたは真実。見る者の心を映し、真実を与える。もう、疲れたでしょう？　しばらく休みなさい」

鏡を椅子の方向に向け、『無』を映してやる。すると鏡にひびが入り、煙のようなものが噴き出してくる。

「そう、我は鏡。我は真実。見る者の心が汚れていれば、我に映った者は醜く見える。映った者が誰かの不幸を望んでいるなら、それはその者に跳ね返る。人間など、所詮は浅はかな存在。誰もが互いの不幸を願うもの……」

煙は意思を持っていているようで、自らの力で言葉を発している。この存在も無と同じように何かの形を作っているように見えるのだが、輪郭がぼやけていて、はっきりと認識することは出来ない。

「そうね。だけど彼らは生きなければならぬ。いえ、生きる事が全てなのよ。彼らもまた、無限の輪から抜け出せない犠牲者のひとつ。生まれてもすぐに消えなければならぬ、哀れな生命体よ」

「そうだな……。我も、本質を見抜かれたからには消えなければならぬ。同じ世界に生きる者よ。幸運に恵まれることを祈ろう……」

内側から突き破られたかのように、音を立てて鏡の破片が飛び散

る。

「……」

時が止まったかのような感覚に陥る。飛び散った破片がそのまま地面に落ちず、空中に留まり続けているのだ。「今までの記憶を見せているのね」

浮いている破片の一つ一つに、どこか知らない場所の風景が映っている。次々と場面が移り変わり、次第に見覚えのある風景へと変わる。そして、それらの破片が少しずつ砂になってゆき……再び時は動き出した。イデアの手には鏡の枠だけが残っている。

「本当に良い鏡は、心も映し出してしまうのよ。これは真実の鏡。この鏡自体が真理そのもの。こちらの世界に置いておくには勿体ないくらい貴重で高級な品よ。この存在には世界を移動する力がないの。だから眠っている間に流れに拾われて、在るべき場所に着いた時、再び起こされる」

イデアは砂になった鏡を丁寧に手ですくい、布の袋に入れてゆく。「死んじゃったの？」

相変わらずシルヴィアはひとの話を聞いていないようだ。あるいは、すぐに忘れてしまうのか……

「一時的な眠りよ」

「人間は互いの不幸を願う、か。みんなで仲良くすればいいと思うんだけどな」

「何が幸福か分からないから、何が不幸かも分からないのよ。何を代償とするべきか、自分がどのような存在なのか、人間は何も分からない。だから知らないうちに払いたくもない代償を払ってしまうのよ」

イデアはどこか遠くを見るような目をする。何かを思い出しているようだ。

「奇妙なことが起きればいい。恐ろしいことが起きればいい。もしも嫌いな人間が消えれば、面白くてたまらない。いつから人間は変わってしまったのかしら。他人の不幸は蜜の味？ 冗談じゃないわ

幸福の果実は不幸を呼ぶのよ。少なくとも、私の知っている彼らはそれを知っていた」

「どこかで誰かが、それを狂わせてしまったのですね」

「ええ。とは言っても、ここには『取引とつり合いの法則』がある。自分が何かのために何かを代償にしていると気づけば、そのうち良くなるでしょう」

「取引とつり……なんとかってなに？」

「取引とつり合いの法則。大自然には物事をつり合わせようとする働きがあるの。どちらかが貰い過ぎてても、払い過ぎててもいけない。つまり取引はつり合わないと成立しない。他人の不幸を望むには、自分も同じくらい不幸になるという代償が必要。それを守らなければ別の形で代償を払うことになるの」

「そうなんだ……だけど、私の騎士様は人の不幸なんて望まないもん！」

「自分の不幸はどう？　こんなに上手くいくなんて、次は不幸なことが起きるに違いない。こんなに良い話には裏があるに違いない。それだって不幸を望んでいることになるのよ。不幸は人間の無意識に潜んでいて、少しでもその存在を意識した瞬間、一瞬にしてその人を飲み込んでしまうの」

「騎士様、かわいそう……」

「さて、このくらいで良いでしょう」

大体拾ったところで、そろそろ帰ることにするようだ。

「あのひと、次は私達の世界に来ると良いわね」

「やったー、これで帰れる！」

「何を言っているの？　これから始まるのよ」

突然辺りが明るくなった。突然光を見たのにもかかわらず、不思議と目が眩むことは無かった。

「え、なに？」

華やかな音楽と共に華麗にダンスをする人々。先ほどの椅子の上には、威厳を感じさせる顔立ちの男性が座っていた。

「全部残像なの？」

「ええ、そうよ」

下の階にはテーブルが並べられており、ワインを飲みながら会話をを楽しむ者達で賑わっていた。

「ここは城というより、沢山の人が集まって楽しいことをして過ごすために作られたのね」

「じゃあ領主のお城はどこにあるの？」

「完全に崩されていて、今はもう無いわ」

あちこちから楽しそうな笑い声が聞こえてくる。しかし、そんな状態も長くは続かなかった。

「……来たわね」

突然、扉の方から重たい音が聞こえてくる。体に響く、非常に不快な音だ。楽しそうな声は一変し、辺りは恐怖と悲鳴で満たされた。

「何が起きたの？」

しかしアイデアはそれには答えず、辺りを見て何かを探している。やがて、何度も響く不快な音は大きくなり、建物自体も悲鳴を上げ始めた。と、そこで残像は風に飛ばされた砂のようになり、消えてゆく。

「見つけたわ」

消えてゆく残像の中、柱の陰に黒いローブを着た存在が居た。間もなく景色は元の暗い廃墟に戻る。シルヴィアの創った光もいつの間にか消えていた。

「あれも残像？」

「残像ではないけど、残像でもあるわ」

「あいつに会いに行くのか……」

「ふふっ、楽しみですわね」

「さあ、戻りましょう。輪廻が導いてくれるはずよ」
「ふわっ。」

「お前たちが用を済ませてくる間に、奴の居場所を突き止めておい

たぞ」

輪廻はこのことを予知していたのか、教会に戻った瞬間、全ての都合がついた。

「さすがね。それで、どこに居たのかしら」

「過去でも、現在でも、未来でもない。どの時代にも属さない所だ」

「人の世の理を外れたのね……」

アイデアは久々に険しい顔を見せた。たとえ触れ合っただけでも、そこには縁が生まれる。その縁が繋がるべきではない世界同士を繋げてしまうということも、それが世界の崩壊を意味することも、大いなる存在は知っているのだ。

「行きましよう。輪廻、案内を」

「承知した。少々反動があるぞ」

輪廻の象徴　黄金の輪が回転すると共に、辺りの景色が歪み、どこからか重力が掛けられてくる。上でも下でもなく、右でも左でもない。とにかく、どこか分からない所から力が掛けられているのだ。それらの力にアイデアたちは体勢を崩しそうになるが、目を閉じて静かに移送が終わるのを待つのみだ。

隔離された時と時の迷い人

「着いたわね」

「なにここ……地面、ないんだけど」

本来、空や地面があるはずの所には何もなく、真っ白の空間が広がっている。手を伸ばせば、一瞬にしてその空間に溶け込んでしまいうそだ。

「ここでは時が足場となっているのね」

「そのようですね」

「なんで見えるんだ……」

「『見える』ではなくて、『分かる』のよ」

次元の違う話をしている存在達はさておき、問題はどこが足場なのか分からない存在はどうするかだ。

「どこを歩けばいいのか分からないぞ」

「シエル、あと一歩前に進んだら落ちるわよ」

「シルヴィアさん、どの方向へ進んでも落ちてしまいますよ」

「え、私死亡じゃない」

「飛べばいいじゃない」

「え……えい！」

悲鳴と共に目の前からシルヴィアが消えた。

「落ちてしまいましたね」

「そうね」

「そうね、じゃないだろ！ どうするんだよ」

どう考えてもシエルの反応が普通である。イデアは目を閉じ、シルヴィアの居場所を掴むと、空間ごとその存在位置をずらした。

「あれ、私、生きてる？」

「あなた、全く飛べてなかったわよ」

「そういう問題じゃないだろ……」

「まあ、死ななかつたからいいんだけどね！ あ、あそこに林が見

えるよ」

「そうね、行きましょう。早く終わらせたいわ」

「そうですね」

そうして移動を始めた一同。シエルはフレイアの後ろにぴったりと付いて歩く。シルヴィアもそのあとに続く。

「結構遠いんだな」

「そもそも距離という概念が曖昧なのよ。空間を創るのなら、もっとまともなものを創ってもらいたいわね」

「そうですね。ですが、こういう空間だからこそ出来ることもあります」

そう言ってフレイアは微笑み、歩く足を速めた。それに合わせて後ろに続く存在も歩く速度を上げた。

「え、ちよつと、速いよ！」

「ああっ、急に曲がるな、落ちる！」

「ふふっ、楽しいですね」

「楽しくない！」

二人の声が重なった。

「ふう、殺されるかと思っただぜ……」

ようやく林の入り口に着くことが出来た一同。当然のことながら、地面が無いので木の根は丸見えだ。奇妙な方向に伸びる根が不気味な雰囲気を出している。

「ここにも落ちる所、あるの？」

「見た限りでは……無いようですね」

「やった！ これで走れる！」

シルヴィアは落ちる危険が無いと知ると、林の中を走り回り、喜びを全身で表現していた。

「……いつまで遊んでいるのよ。置いて行くわよ」

「あ、待って！ ……あっ」

こちらへ走ってくる途中、シルヴィアが何かにつまづいて転んだ。

しかし、シルヴィアは起き上がるうとせず、子犬のような目でこちらを見て、何かを訴えている。

「足、何かに掴まれてるみたいなんだけど……」

「大丈夫よ、人間の腕が落ちているなんて言わないわ」

「う、うで……」

この世の生き物とは思えない奇声をあげながら走ってくるシルヴィア。

「あれ、足に変な痕がついちゃってるぞ」

「見たくないんだけど」

「安心しなさい。期待通り、人間の手形が付いているから」

「言わないでよ！」

「私は嘘をつかないの」

そう言っただけでアイデアが浮かべたのは、やはりいつもの意地悪な笑みだった。

「もう……なんでこんな所にまで変なのが居るの？」

「ここはどの時から除けられた空間、いわば時の断片。変なところに変な残像があってもおかしくはないわ」

「シルヴィアさん、痕を見せてください」

フレリアに言われ、足を前に出すシルヴィア。フレリアは紫色に変色している部分に触れ……

「可愛がってあげてくださいね」

「いや、治してよ！」

「ふふっ、冗談です」

そう言っただけで微笑み、フレリアは治療魔法を使う。さらさらとした風がシルヴィアの足を包むと、変色していた部分は見ると見ると元の色に戻っていった。

「やったー、ありがとう！」

「よかったですね」

そして再び歩き出す一同。今度はシルヴィアも静かに付いてきている。

「ん、なんか見えてきたぞ」

前方、道の中央に何やら人のようなものが見えてくる。実際に見えているわけではないが、その部分の空間が歪んでいるため、存在を認識することが出来るのだ。

「今度はなに？」

「時の迷い人よ」

アイデアが空間を歪ませている何かの前で立ち止まり、話し始める。「時を行ったり来たりしていると、当然、過去と未来に矛盾が起きてくる。その矛盾は大自然の秩序を大きく乱してしまうの」

辺りの空気が静まり返り、まるで怪談話をしているような雰囲気になる。

「その歪みは他の歪みを生み、やがて世界を構成する要素が破綻してしまう。そういったことが起こらないように、大自然はどう思う？」

アイデアが妖しい笑みを浮かべ、言う。

「消してしまうのよ」

その瞬間、アイデアを中心に渦を巻くような風が発生する。その風がアイデアの長い髪を持ち上げ、その一本一本に不思議な動きを与える。

「ここでは何も起きなかった。ここには何も居なかった」

「……」

他の存在は声が出なかった。その奇妙な気配に胸を圧迫され、呼吸が止まっているのだ。

「だけど、それでも大自然の力が及ばずに、残ってしまうものがあるの。それが、これよ。今はかろうじて形が残っているけど、そのうち目も当てられないような姿になってしまう……」

それだけ言うと奇妙な気配は消え、いつものアイデアに戻った。

「だからあなたも気をつけなさい。居ない存在にされないように」

「おっ……」

シエルはただ、小さく返事をするこゝろしか出来なかった。

「行きましょ。目的地はすべし」

残像の中に渦巻くデジャヴ

「着いたわ」

しばらく歩いたのち、アイデアが立ち止ったのは林の出口より少し手前の所だった。

「何も見えないよ?」

「こうすれば見えるでしょう」

アイデアが指先で触れた瞬間、それは大きく口を開く。空間を露骨に歪める黒い穴。

「強い重力を感じます。時を捻じ曲げて作ったのですね」

「これだけ大きくなっても、まだ相当な密度がある。よほど圧縮されているのね」

「これ、どこに繋がってるの?」

「入ってみれば分かるわ」

躊躇ためらいもせず入り口に飛び込むアイデア。アイデアの体は強く引き伸ばされ、渦を巻くように穴の中心へと吸い込まれてゆく。しかし、中心へ近づくとつれて動きが遅くなり……止まってしまった。

「なんで止まってるの?」

「これは残像のようですね。あの方は既に向こうに居るはずですよ。そう言っただけで後ろ向きに飛び込むフレリア。

「私、こんなの見ながら入りたくないんだけど」

「じゃあ残っただけでもいいぞ。あの腕と一緒に」

「行きます」

二人は同時に引き伸ばされた。

次に目に入ったのは……どこかの洞窟のようだ。全体的に湿り気を帯びていて居心地が悪い。フレリアは目を閉じ、この洞窟の全体図を見ている。

「空間が不安定なようです。むやみに壁などに触れない方がよさそ

うですね」

「あっ」

壁に触れようとしていたシルヴィアが慌てて手を引っ込めた。

「誰か居るようね」

壁に開けられた穴にトーチが差し込んでいる。まだ新しいことから、ここへ来て間もないのだろう。

「この先に湖が見えます。そこに向かいましょう」

「分かったわ。案内をして」

「はい。こちらです」

「結構複雑な作りをしているわね」

行く先行く先、道が三つ以上に分かれている。フレイアの案内なしには辿り着けないだろう。

「離れないようにしなさい。迷ったら時の迷い人になるわよ」

「シエルさんは……既に時の迷い人でしたね。ふふっ」

「いや、まだ迷ってないから！」

「きゃあっ」

後ろからシルヴィアの悲鳴が聞こえた。地面のぬかるみに足を取られ、体勢を崩したようだ。

「泥付いちゃった……」

「なあ、アイデア」

必死に泥を払おうとするシルヴィアを横目に、シエルが話しかける。

「どうかしたの？」

「わざわざこんなことしないで、壁を抜けて湖まで行ったらどうだ？」

「そうだよ！ 壁を避けたことはないんじゃないの？」

「私の言う壁は、あなた達の言うようなものとは違うのよ。私の言う壁は……そう、人間の言い方で表すなら、上手く行かないことや、困難なこと、つまり私の楽しみを奪う存在」

アイデアは壁に触れて遊んでいる。

「私がそこを通ろうとしているのに、壁は自慢げな顔をして私の邪魔をする。だから私は、それを正面からすり抜けてやるのよ。どちらが邪魔な存在か、はっきりさせてあげた方が良いでしょう?」

「じゃあ、最初の町で壁から出たのって」

「出口に見張りがあるからではなくて、目的地が壁から出た先にあつたからよ。その壁さえ無ければ普通に行けるのに、わざわざ遠回りする必要があるなんて、楽しくないもの」

「アイデアって……なんか怖い」

「なんか一人だけ世界が違うよな」

「当然よ。でなければ時よりも早く生まれたりしないわ」

「本当に、アイデアって何なんだらうな」

「何なんでしょうね。私にも分からないわ」

「アイデアは小さな笑みを浮かべた。」

「ところで、まだ着かないのか?」

「もう少しですよ」

「そうか……って、シルヴィア、必死だな」

シルヴィアは二度とぬかるみを踏むことが無いように地面を凝視し、慎重に足を運んでいる……ふと、アイデア達の方を見ると。

「あれ、アイデア、なんで浮いてるの?」

アイデアは地面より少しばかり浮いていて、空気の上を歩いていたのだ。

「なにを言っているの? 普通に歩いたら泥が付くじゃない」

「いや、そんな魔法見たことないんだけど……」

「この方は特別なのですよ」

そう言って微笑むフレイア……地面より少しばかり浮いていた。

「フレイア……あれ、前にもこんなことがあつたような……」

「早くしないと置いて行くわよ」

「あ、待って!」

それからしばらく歩き続けている一同。不意に、シルヴィアが足

を止めた。

「また汚染されている！」

そこにはシルヴィアの天敵とも言える地面のぬかるみが視界いっぱいに広がっていた。

「汚染ってなんだよ、汚染って」

「これはさすがに飛び越えられないわね」

「そうですね」

そう言っただけでそのまま行ってしまう二人。

「……えい！」

背後から何か声が聞こえた。今までの流れを知っていると、シルヴィアが何をしたのかが容易に想像できてしまう。

「もう帰りたいです」

案の定、今にも死にそうな声が聞こえてきた。

「……哀れね」

「これはひどいですね……」

「そんな派手に泥浴びる奴、初めて見たぞ」

「私の人生終わった……人じゃないけど」

横たわっている泥人形　シルヴィアは死人のような目でこちらを見て、笑っていた。

「仕方ないわね、フレリア」

「はい」

このまま湖まで行くのは無理だろうと判断したアイデアは、フレリアにシルヴィアを洗ってやるように言った。

「今こそ目覚めなさい。潤いて強く、かつ汚れなき者。アルドヴィ・スーラ・アナヒタ」

「うおっ」

シエルが慌てて後ろに下がる。それとほぼ同じ瞬間、シルヴィアの居る辺りの壁から恐ろしい勢いで水が吹き出し、辺り一帯は水の唸る音で満たされた。下から噴き出した水がシルヴィアを勢いよく立ち上げさせる。

「少し加減を間違えてしまいました」

左右からの水がシルヴィアの体を力強く洗っている。当然、顔も例外ではない。つまりシルヴィアは今、呼吸が出来ていない状態であるということだ。

「死ななければいのよ」

「そうですよね」

「本当に大丈夫なのか？」

水の中のシルヴィアは何かを言おうとしているようにも見えるが、相変わらず例の二人は気にする様子がない。

「大丈夫ではないかもしれませんがね」

「その時はその時よ」

やがて水は勢いを失い、ようやくシルヴィアの吸う空気が確保される。力を無くした水はそのまま地面へと吸い込まれてゆき、洗浄が完了したことを知らせる。

「はあ……死ぬかと思ったよ!」

「誰が見てもわかるわ」

「あの、水しぶきが……」

とつさに後ろへ下がったものの、シエルの自慢の服は見事に濡れてしまっていた。

「私も凄いいんだけど、どうしたらいいの？」

「乾かせばいいじゃない」

「私、そんな魔法使ったことないよ」

「俺もそんな魔法使ったこと……」

「なら、ずっとそのままでないさい」

「やだ……お願いフレリア、なんとかして!」

「シルヴィアさんは炎の魔法と相性が良いはずです。擬似的な太陽を作り出してみては」

「シエルは体を保護して服だけが調度よく乾くようにすればいいのよ」

「そんなこと……」

「出来るのか？」

「イメージが大切なのですよ。イメージすると同時に、出来ると思
じるのです」

「そうよ。それが魔法の本質。代償を払えば出来ないことはないの
そう言われ、目を閉じて集中し始める二人。

「できたー」

頭上にシルヴィアの頭と同じくらいの大きさの太陽が現れた。小
さいとはいえ、その太陽が放つ熱線は強く、シルヴィアたちの濡れ
た服は瞬く間に乾いてしまった。

「俺、何もしてなかったような……」

「ちゃんと出来ていましたよ」

「もし何もしてなかったら、今頃は炭になったものが転がっている
わ」

「俺たち、下手したら死んでたのか……」

「さあ、済んだのなら、もう行くわよ」

予言者が見るは泡沫の幸せ

「この先に、居るわね」

イデアは角を曲がる手前で立ち止まり、この先にある湖を透視している。

「ついにその時が来たのですね」

「さあ、行くわよ」

一同は勢いよく角を曲がり、湖のある広い空間へと飛び出したが

……

「また隠れたのね」

そこにイデアが透視した予言者の姿は無く、あるのは青い輝きを放つ湖と、不自然な空間の静けさだけだった。

「あれ？　なんか水が跳ねてるよ」

シルヴィアの視線の先を辿ると、静かであるはずの湖面から激しく水しぶきが上がっているのが見えた。それは魚が跳ねているというよりも、人が溺れているというような……。目の前にある奇怪に恐る恐る近づくとシルヴィア。しかし、それはどう見ても……

「あつ」

突然シルヴィアがしゃがみ込んだ。頭上には拳ほどの大きさをした黒い球体が発生している。渦を巻くような力を持つそれは、周りの空間を強引に押し広げながら存在を維持している。

「うおっ」

異常に気づき、その場から離れようとしたシエルだが、あっけなく黒い罨に捕らわれ、地に膝を付けられてしまう。

「なんだ、これ……体、動かないぞ」

「私も……」

「抵抗しても無駄よ。流れには逆らえないもの」

まもなく二人の時は完全に止められ、話すことも出来なくなってしまう。

「そこに居るのは分かっているわ。早く出て来なさい」

「ふふ……」

不気味な笑い声と共に、左前方から黒いものが煙のように現れた。「あなた、自分がどれほど大変なことをしたのか、理解しているのね」

予言者は返事をしない。

「沈黙を肯定と捉えるつもりはないけれど……大自然の秩序を乱した罪は決して軽いものではないわ。覚悟をすることね」

ぱりん。陶器の割れるような音と共にシルヴィア達が再び動き出す。フレイアが二人の『時』に付いた枷を砕いたのだ。

「治った！」

「なんか頭がくらくらするぞ……」

「当然よ。本質に合わないことをされたんだもの」

「無駄だ。お前たちは死ぬ。私の予言からは逃げられない……」

それはこの世のものとは思えないほど暗く、低い声だった。

「いいえ、滅されるのはあなたの方よ。試してみれば分かるわ……と、その前に」

アイデアは右手を挙げ、指を鳴らす。その瞬間、その場に居た者たちは何もない真っ黒の空間に投げ出されてしまう。先ほどの湖のあった場所は足元、遙か遠くで小さくなっていった。

「ここには時という概念が無いの。この場所はたった今創られ、これより未来にも、これより過去にも無い。あなたの予言には無いはずよ。そして時という概念が無い以上、あなたは力を使えない」

「……それはどうかね」

予言者は醜い笑みを浮かべる。すると時という概念が無いにもかかわらず、時を縛る黒い球体が発生した。大量に発生した球体は予言者の周りを守るように動いている。

「シエルさんは危険ですので離れていてください」

「おっ」

軽く返事をして離れるシエル。

「私も！」

「あなたは駄目よ」

「え、なんで？」

「試して欲しいことがあるのよ。あれに向かって光をあてて欲しいの。あなたが出来ると思う方法でいいわ」

「えっと……こうかな？」

上を見ると眩しいほどの光の輝きが見える。それは視線を戻すと同時に予言者へと降りかかった。が、降り注いだ光の帯が予言者に当たることは無く、周りにある黒い球体によって全て変な方向へ捻じ曲げられてしまった。

「やはり、ね」

「どういうこと？」

「操っているのは時ではないということですね」

「そうよ。おそらく輪廻も知っていて、あえて何も言わなかったのね。それが、あるいは」

「大自然の秩序を乱す存在とは、あまり関わるべきではないと考えていたか、ですね」

「………それを知ったところで、お前たちの運命は変わらない」

予言者は指先で何かを指示するような動きを見せる。と同時に、予言者の周りにあった黒い球体がシルヴィア達に向かって一斉に襲い掛かる。

「きゃあっ」

球体は不規則な動きをしながら確実に獲物を仕留めようとしてくる。当然のごとく逃げ惑うシルヴィア達であるが………やはり、このような状況でも例の二人は特別であったようだ。

「ちゃんと逃げなさい。捕まったら死ぬわよ」

「無理だよ！」

「加護をかけておくので頑張ってくださいね」

シルヴィア達を包むように薄くて青い膜が発生する。フレイアの使える中で最も位の低い防御魔法だ。

「足りているのに奪ってしまう。求めているのに壊してしまう。みんな同じことを願っているのに、それが叶うことはない……人間って、可哀そうね」

イデアは少し残念そうに言うと、再び腕をあげ、指を鳴らす。「もう、終わりにしましょう」

音を立てて一斉に崩れてゆく時の枷。予言者は力を使い果たしたのか、すぐに球体を創りなおすことはなく、肩で大きく息をしなから、こちらを睨むように見ている。

「何度も同じ過去ばかりを見ていたようだけど……そんなに素敵な思い出だったのかしら」

「うるさい！」

癪に障ったのか、予言者は声を荒らげる。今度は一つだけ大きな黒い球体が発生した。

「無理はやめなさい。私たちは絶対の真理。あなた程度に崩せる相手ではないわ」

しかし発生し始めた力は勢いを落とさない。その力はすでに予言者の支配下には無いのだ。徐々に密度と体積を増してゆき、やがて予言者の姿さえ歪んで見えるほどに成長した。

「私は夢と現、全ての時と世界を圧縮することによって、全てを私ものにしようとした……」

予言者が静かに話し始める。それが諦めを意味するのかは、まだ分からない。

「夢という世界があることも知っていたのね」

「私は夢の世界で神に言われた。お前には予言の力があるが、誰にも信じてもらえないという呪いがかかっている……あの時のことも私は知っていた。何度も警告をしたというのに……」

球体の持つエネルギーの秩序が乱れる。力の源である、予言者の精神が乱れている証拠だ。それは怒りによるものなのか、悲しみによるものなのか……あるいはそれら全ての感情が混ざったものなのかいなのもかもしれない。

「誰にも信じてもらえないまま、予言の日が近づいていたある日、私はまた別の神に語りかけられた」

「重力を司るもの……」

「私の持つ重力を操る力を一時的に貸してやろう。ただし間違えた使い方をすれば全てが破綻することを忘れるな。お前にその覚悟はあるか……私は喜んで受け入れた。これで敵国を潰せば皆を救える。皆私を信じてくれる」

球体が形を失い、いびつに波打ちながら予言者の体から分離しようとしている。

「これは……」

「もう、手遅れよ」

フレイアはもう、何も言わなかった。

「無理だった。いきなりそんな力を与えられても、すぐに操るなんて……予言通りに国は滅びた。私の大切な人たちも皆死んだ。それから強い重力が時を捻じ曲げると知って、私は何度も過去へ戻っては予言をした。それだけではない。よその国へも行つて沢山の死を予言した。それでもこの呪いが解けることはなかった。そのうち私は人間が憎くなった。私の予言を信じない馬鹿は皆死ねばいい。皆私を死の予言者と呼んで恐れればいい……」

「大きすぎる重力は光や時だけでなく、あなたの心までも捻じ曲げてしまった」

予言者の体から分離した重力の塊は、もはや予言者のものではない。つまりそれは予言者自身も力の影響を受けるということだ。いよいよ力は極限となり、シルヴィア達を守る防御魔法も硝子の擦れるような音を立てて軋む。

「大きすぎる力を手に入れたから、大きな事をしなければならぬ」と思ったのね。その力で敵の動きを封じれば良いだけだったのに。そうすれば敵国の王は互いに争いをやめ、平和を保つ約束を交わしたはずよ。あのひとはそういう存在だったから……」

予言者の被っていたフードが破け、頭上の闇へ吸い込まれて消え

る。予言者の顔は屍のように干からび、目は白く濁っていた。自分に作用する『時』を止めていた力を失った今、急激にその代償を払わされているのだ。

「稀に居るのよ。持つべきではない力を持って人の世に生まれてしまふ存在が。そういつた存在は皆、自分が何なのか分からなくなつて、自分の力に消されてしまふの」

シルヴィア達を守る膜にもひびが入る。どちらも限界が近いようだ。

「私は、私は……」

不自然なほど静かに、ゆっくりと闇の中へと吸い込まれてゆく死の予言者。まるでそれは地に散らばった塵を掃除するかのように。フレリアは目を閉じ、この残酷な儀式が終わるのを待っている。

「私はただ、皆に幸せになつてほしかった……だけ、なのに」

やがて儀式は終わり、重力の闇は消え去つた。イデアは静かに空間を閉じ、一同は先ほどの湖があつた洞窟に戻ってくる。同時に、辺りには元の静けさが帰ってきた。水しぶきの上がついていた湖も、今は鏡のように静かだ。

「調べてみましたが、彼女に呪いの類はかかつていませんでした。

彼女は……」

「そうよ。彼女は本来、私たちの世界に生まれるはずだつた『予兆』という存在」

予兆。未来にどんなことが起きるかが分かり、同時に、それを變えることが出来ないということも理解してしまうという絶望の一種。「予兆という絶望の重さは、人間に耐えられるようなものではないわ。彼女は重力だけではなく、彼女自身の持つ重みにも押しつぶされていったのね」

「なぜこのようなことが起きてしまうのでしょうか……」

「私にも分からないわ。真理にも大自然にも分からない。誰も知らない謎の現象があるのよ」

誰にも分からない謎の現象。『輪の切れ目』もその一種であろう。

しかし、世界を支えている大自然ですら分からない現象とは一体……。

「さて、そろそろこの空間も消えるわ。帰りましょう」

「どうやって帰るの？」

「迎えが来るわ」

アイデアがそう言ったのと同時に、湖の中心から金色の煙が発生する。それは湖を大きく囲むように広がってゆき、やがて平たい輪の形を生成した。出来上がった黄金の輪は静かに回転を始め、転送の準備が完了したことを知らせる。

「行きましょう」

そう言って輪の中心へ向かうアイデア。

「……なあ、シルヴィア」

「うん……」

「水って、歩いて渡るものだったんだな」

「私も水の上は歩けないと思ってた……」

「ふわっ。中心へたどり着いたアイデアが消える。」

「どうしよう、置いて行かれちゃうよ！」

二人の気持ちをくみ取ったのか、フレイアは優しく微笑んだ。

「シルヴィアさん達のために湖を凍らせてあげますね」

フレイアはそっと湖面に触れる。すると湖はみるみるうちに凍っ

てゆき、あっという間に歩ける程になってしまった。

「さすがフレイア、ありがとう！」

「血も涙もない誰かさんとは大違いだぜ」

「血も涙もなくて悪かったわね」

輪の中心からアイデアの声が聞こえた。どうやら全員が入るまで発動しない仕組みになっているらしい。

「あーあ。シエル死亡のお知らせ」

「縁起でもないぞ……フレイア、何とかしてくれよ」

その言葉にフレイアは再び優しく微笑み……

「楽しみですね」

「微笑みだけ貰っても嬉しくない！」

「はいはい、早く行こうね。早く行かないと空間と一緒に消えちゃうからね」

「そっちの方がいい！」

「いけませんよ。シエルさんが居なくなってしまうと、世界の秩序が壊れてしまいますからね」

嫌がるシエルを無理やり押し込み、ようやく全員が中心へと入り込んだ。そして転送が開始すると同時に、この洞窟も姿を失い始める。

隔離された空間と共に、闇の中へと消し去られた悲劇の予言者。

時の枷に捕らわれていたのは彼女自身であったのか……。彼女が見ていたのは過去の思い出。大切な親友、大切な隣人、愛しい父。それらについた戦争の傷跡を、彼女は消すことが出来なかった。かつて多くの人間を恐れさせた死の予言者は、叶うことのない淡い夢に焼き尽くされ、もはや無意味となった記憶の底へと沈んでゆく。

一方、シエルは転送が完了するまでの間、言葉に出来ないほど恐ろしい目に遭っていたのは言うまでもない。

認識の外に潜む気配

「帰って来たか」

「ううー、なんか頭が変な感じ……」

つい先ほどの記憶であるはずだが、隔離された空間のことも、予言者のことも、まるで夢であったかのようにぼやけている。時という概念のない空間であったために、時の流れと記憶との間に矛盾が起きているのだ。

「修正が入っているわね」

「はい。あまり心地の良いものではありませんね……」

「どうした、シエル。疲れているようだが」

「シエルは頑張ったのよ。いろいろと、ね」

からかうような顔でシエルを見るアイデア。一方、輪廻も似たような顔をしていた。

「お前ら……」

もはや苦笑いを浮かべるしかないシエル。

「……それで、これからお前たちはどうするのだ？」

「向こうに戻るわ。少し休憩をして、また手がかりを集めるの。あなたはここに残るのでしょうか？」

「ああ。まだ当分は戻らないだろう」

「そう、ならここで一旦お別れね」

アイデアは夢へと続く次元の扉を開き、他の存在達に先へ行くように合図する。

「またね！」

「じゃあな」

「では、輪廻さん。また会いましょう」
ふわっ。

「……輪廻」

「どうした」

「何か、変な感じはしない？」

「何も感じないということはないが」

「それが何であるか、捉えられないのね」

「その通りだ」

「余程高位の存在であるか、何らかの現象が作用しているか」

「いずれにせよ、時が来れば分かるであろう」

「そうね。それにしても……私の認識の範囲を超える存在が、まだこんなにも存在しているなんて。不思議だわ」

「全くだ。だが、そうであるからこそ、我々はこれほどの長い時を飽きずに過ごして来られたのだ」

「輪廻。あなたが楽しい存在で良かったわ。私はこの時を楽しむつもりよ。今までも、これからもね」

輪廻は表情を変え、穏やかな声でこう言った。

「私は今もこれから、この街で唯一の聖職者、ヴェリタスですよ。アイデアもそれに反応するように笑みを浮かべる。」

「また会いましょう、ヴェリタス。次に会う時は」

「運命の時」

二つの声が重なると同時に、アイデアはその世界から消えた。

ここは以前フレイアが訪れた村。綺麗な墓の前で、娘のために祈りを捧げる母が居た。母は安らかな顔をしており、痩せこけていた頬も今はふっくらとしている。

「また来るわね」

母は優しく墓に触れ、家に戻ろうと背を向けたその時、手に持っていたマルデルの涙にひびが入り 割れた。一瞬驚いた顔をした母だったが、すぐに嬉しそうな顔になり、

「……ようやく、逝けたのね」

今度は天に向かって祈り始めた。そよ風が優しく母を包み、語りかける。

「今が、ずっと続きますように」

ふわっ。

「……相変わらず、こちらの世界は草原ばかりね」

イデアの言う通り、夢には現まじに存在するような建造物や動物は、ほとんど存在しない。それらの存在は人間にとっては必要なものであるが、真理にとっては必要なものではないからだ。

「楽しかったね！」

「やっと終わって……ないのか」

「そうよ。楽しいのはまだまだ、これから」

「まあ、とりあえず今は休憩なんだから。その時が来たらまた呼んでくれ！」

そう言ってシエルは乗り物を呼び出し、どこかへ飛んで行ってしまった。

「私も行ってくる！」

「ふわっ。いつてらっしやい」

それに続くようにシルヴィアも光を呼び出し、消えた。

「相変わらず、気の早いひと達ね」

「賑やかで楽しいと思いますよ。特にこの静かな世界では」

「そうね。それで、あなたはどうするのかしら」

「私は、ここに樂園を創ろうと思います」

こちらの世界には見ての通り『飾り』が少ない。夢に住む者達は、最高度に抽象的な存在であるため、存在を具体的に表す、つまり物を創造することを得意としないのだ。そのため、真理という存在であるにも関わらず物を創り出すことが出来る創造主、フレイアは非常に珍しい存在であると言える。

「素敵ね。こちらの世界には飾りが少なくて退屈していたのよ」

「きつと、素敵な飾りになると思います」

「楽しみだわ。ではまた、その時まで」

ふわっ。

自由と調和の国、ハルモニア

こちらは自由と調和の国、ハルモニア。全てのものが白い大理石で出来ているこの場所は、フレイアが初めて創った装飾品だ。しかし、この国に足を踏み入れる者はほとんど居ない。多くの存在が畏怖の念からか、遠くから眺めるだけで終わらせてしまうのだ。この場所に足を踏み入れる存在とさえも、アイデア達のような、フレイアと近い位置に居る存在くらいだ。

「久しぶりだな、ハルモニアも」

「そうだねー」

街の広場、中心にある噴水の前にシエル達は居た。特に何かをして遊ぶというわけでもなく、本当の意味での息抜きと言ったところか。

「フレイア、今度は何を創るんだろう」

「楽しみだな」

「楽しみだね」

他愛もない話をしている二人の背後から、何者かの気配が……

「真理は時として、我々を畏怖させる……」

「ああつ！」

二人は同時に悲鳴を上げた。

「え、誰？」

「本当だよ、誰だよ！」

「おお、驚かせてしまって申し訳ない。私は最近こちらに来たもので……」

「……なんか、難しいこと言ってるよな」

「うん。途中から何言ってるのか分かんない」

二人はまた難しい存在が増えたと知り、これから先のことを想像し、絶望した。

「ようやく姿が安定してきたものだから、楽しくて散歩をしていた

のだよ」

とは言っても、まだ足の部分は不安定なようで、腰の辺りから下はただの布きれのようになっていいる。

「そうなんだ……」

「それで……何を考えながら散歩してたんだ？」

「ああ。私は今、神的狂気について考えているのだよ」

「なにそれ？」

「最も危険で、最も美しく、最も幸福とされるものだ。君たちもいずれ分かるだろう。フレイアという存在がどのような存在であるか……」

二人はもう反応をしない。考えることをやめたようだ。

「おっと、話が過ぎたようだな。私はもう行くとしよう。ではまた、その時まで」

それに気づいたのか、その存在は話すのをやめ、二人に別れを告げると路地の方へと歩いて行ってしまった。

「あのひと、誰なんだろう……アイデアの知り合いかな？」

「そうだろうな。あの挨拶使ってたし」

「まあ、後でアイデアに」

「あれは『英知』よ」

「ああっ！」

再び悲鳴を上げる二人。

「もう、どうしてみんな驚くような登場の仕方するの！」

「本当だよ！」

「決まっているでしょう？ 面白いからよ」

「……言うと思った」

「うん、俺も……で、どうしたんだ？」

「フレイアの楽園が完成したのよ。行きましょう」

その知らせを聞き、飛び跳ねて喜ぶシルヴィア。

「わーい！ 楽園、楽園！」

「どんな所なんだろうな」

「早く連れて行ってよ!」

「なら、もう少し近づきなさい。ちゃんと飛べないわよ」

「はい」

ふわっ。

「真理は時として、我々を畏怖させる。それは私が真理という立場になっただけから、変わることはないようだ」

その存在　英知は静かに路地を歩きながら呟いていた。

「そろそろ私も、器というものについて考えてみよう……」

永久の楽園、エル・パラディソ

「うわー、ここが楽園……」

「ようこそ、楽園へ」

目に入ったのは一面の花畑だった。シルヴィアは花畑の中を楽しそうに走り回っている。

「枯れることのない花、枯れることのない泉……これ、輪廻も手を加えたのね」

「はい。円形に創ることによって、限りなく無限に近づけています。周囲が深い森に囲まれ、道を知る者にしか辿り着くことが出来ない空間。それはまさに秘境、永久の楽園と呼ぶに等しいだろう。

「ねえフレリア。これ、何？」

シルヴィアが泉を指さして何かを聞いている。よく見ると水面にはここではない、どこか別の場所の景色が映りこんでいる。

「それは現の様子です。秩序が許す範囲でなら、ここを門として行き来することも出来るのですよ」

「随分と景色が変わっているわね」

「私たちが遊んでる間、現ではどのくらい経ったの？」

「ちょうど百年くらいだと思います」

「え、もうそんなに経ってたの？ 私まだ三十年くらいしか経ってないと思ってたよ」

「仕方がないわよ。こちらの世界では時という概念が曖昧なの。十年が一年にもなるし、千年にもなる」

「あの輪廻でも、こっちはあんまり働かないんだね」

「ふふっ、それは違いますよ、シルヴィアさん」

「え、もしかして夢と現では時を担当してるひとが違うの？」

「そうですね」

「全く、誰がどう頑張ればこんなのが時を司る存在になれるのかしら。ふざけているとしか言いようがないわ」

全員の視線が一か所に集まった。

「な、なんで俺を見るんだよ」

「……確かにふざけてるよね」

「そうですね」

「ふざけてない！俺はちゃんと時を任されてるんだぞ！」

「その割には自分が何をしているのか理解できていないようだけど」

「それは私も危ないかも……」というか、フレイアは楽園とかが創れるくらいの力があって、魔法も沢山使えるのに、私とシエルは全然そういうこと出来ないよね。この差は何？」

「あなた達は、自分がどこからどこまでの範囲に存在しているのが、理解しきれしていないのよ。だから出来ることも限られてくるの」「でも何もしてなくても太陽は昇るし、風だって吹くよ？」

「それは大自然が勝手にあなた達を使っているからよ。大自然は常にその時にふさわしい状態を創り出すの。もし、それぞれの存在が『自分』というものを失っても大丈夫なようにね」

イデアは泉の隣に座り、水面に軽く触れる。それによって出来た小さな波が、鏡に映る映像を乱した。

「自分を大切にしたいと思うのなら、むやみに自分を変えようと思わない方がいいわ。湖面に触れれば、それに映る美しい分身は消えてしまうもの」

「うわー。面白いね、これ」

「あ、輪廻のやつ、まだ教会に居るのか」

相変わらず話を聞いていない二人であった。

「……それでいいのよ」

イデアは静かに立ち上がり、シルヴィア達の側へ移動する。

「あ、あれ私達が浄化してきた鏡だよ」

泉の中の輪廻　聖職者ヴェリタスは、多くの信者達を前に、説教と呼ばれるものをしていた。

「心は水で出来ています。環境の影響を受けやすく、一度汚れてし

まうと、なかなか元には戻せません。綺麗な水には浄化の力があります。同様に、美しい環境はその中にある全てを浄化してくれます。しかし私達の心は、決して綺麗であるとは言えないでしょう。私達の居る環境が美しくないからです。ですから、まずは周りの環境を美しいものに変えることから始めなくてはいいけません」

聖職者ヴェリタスは、鏡の入っていない銀の枠と、隣に置いてある布の袋を触りながら続ける。

「周りの環境を美しくするにはどうすればよいか。その環境の中にあるものを愛することです。全てを等しく愛することです。愛は最も美しく、幸福なものです。世界が愛で満たされれば、それは世界が幸福に満たされているということです。いまだかつて神を見たものは居ません。神は愛だからです。私達には愛という感情がありません。私達には神が宿っているのです。私達が互いに愛し合っている、その存在は神であり続けることが出来ます。つまり神の側に居続けられるということです。神は居ないから見えないのではありません。意識していないから見えないのです。当たり前のように目に入るから、それが普通になってしまっただけで、それが大切なもの、神であるということに気づけないのです」

静かにヴェリタスの話を聞く信者達。その静かながらも熱気を帯びた眼差しには、小さな恐怖さえ覚える。

「古代の人間は太陽や大地を神と呼び大切にしました。食べ物や神と呼んだこともありません。今の私達は何を神と呼ぶべきでしょう。命です。神とは大切なものに与えられる称号です。太陽や大地、食べ物、命。自然の中にあるものはどれも大切で、愛するべき存在ばかりです。私も、あなたも、あなたの友人も、全てが神の一部であり、神の子であり、神そのものであるのです。だから愛しなさい、大切にしなさい。全てを受け入れ、全てを愛するのです。そうすることによって世界が愛に満ちた時、私達は第三の世界、永久とこしえの樂園へと旅立つことが出来るのです」

確かに彼の言うことには説得力を感じるが……どの時代、どの場

所でも聖職者の話というものは長いものなのだろうか。

「さて、私は今日のお話で、自然の中にあるものは全て神であると言いました。しかし神は一人しか居ません。そしてその神の名を知った者は、この世の全てを知ることが出来るのです。その意味が分かりますか？ そのお話はまた次にしましょう。今日のお話は、これで終わりです。あなた達にも神の加護がありますよう……」

ようやく話が終わった。すぐに教会を出る者も居れば、他の信者と今日の説教について話す者も居る。ヴェリタスはその様子を見て優しく微笑むと、静かに部屋へ戻った。

「……なんか凄い話してたな」

「うん。あの鏡、私たちが浄化して来たんだけどね」

「あれ本当に輪廻なのか？ 鏡の話から、よくあんなに長い話に出来るよな」

「というか、鏡のこと全く話してなかったよね」

二人は何度か咳払いをした。

「さあ、そろそろ行くわよ」

一通り現の様子を見たところで、そろそろ現へ行くことにするよ
うだ。

「さっそく、この泉を使うのですね」

「そうよ。行きましょう」

「うわ……やっぱり」

アイデアは躊躇うことなく泉へ飛び込んだ。

「アイデアはもう少し迷うということをした方が……」

「余計なこと言っていないで、早く来なさい」

「しかも声が届く仕組みになってるとか……シエル、おめでとつ」

「俺が失言するのを狙ってると思えないぞ」

「ふふつ、私も行きます」

アイデアに続くようにフレリアも泉へ飛び込んだ。

「うっ……あ。シエル、これなんだろう？」

「ん？ なにかあったのか？」

シルヴィアの指さす所に顔を近づけるシエル。

「えい！」

「ああっ！」

シエルは体勢を崩し、泉に落ちた。シルヴィアが後ろから突き飛ばしたのだ。

「わーい、私も行こうっと」

シルヴィアはそっと、尻から現への門をくぐった。

神々の落した指先

「文明って不思議ね。こんなにも早く発達するなんて」

「人間はいろいろと忙しい存在なのですよ」

「それはいいんだけど……なんで私だけびしょ濡れなの？」

「俺を突き落としたからだろ」

「だからって、こんな風にしなくても……いいもん、また太陽創つて乾かすもん！」

そう言つてシルヴィアは魔法により太陽を創り出そうとするが。

「あれ、出来ない……」

「魔法の使い方が間違えていますよ」

「え……イデア、どうして私びしょ濡れで、しかも魔法使えないの？」

「あなたは自分がどれだけの代償を持っていて、いつ、どうやってそれを払えばよいか理解出来ていないのよ。だから大自然によって勝手に決定されてしまうの。一番面白くなるような代償に、ね」

「大自然の意地悪……」

「あなたがくだらないことをするから、くだらない代償がついてきたの。これはあなたが生み出した未来よ」

「これでシルヴィアさんも立派な創造主ですね」

なんとも不名誉な創造主であつた。

「……あれは？」

イデアはこの先にある一風変わった建物を見ていた。民家と呼ぶにはあまりにも綺麗で、城と呼ぶにはあまりにも小さい。他の建物が赤黒い岩で造られているのに対し、この建物だけは白い岩で造られており、圧倒的な存在感をもっている。

「たしか、珍しいものを展示している場所だつたと思います」

「そう。興味があるわ、行ってみましょう」

高級感のある大きな扉を開き、静かに中へ入る一同。

「ようこそ私のマーベラスな世界へ！」

「帰りましょう」

白いスーツを着た男性が恐ろしい速さでこちらへ向かってくると、アイデアが外へと歩き始めたのはほぼ同時だった。

「待ってください！　ここは珍しいものが沢山置いてある、とても素敵な空間なのですよ！」

「どういうものが置いてあるのかしら」

「はい、神々の武器や珍しい絵画などを……」

「行くわよ」

男性が神という単語を出した途端、アイデアは顔色を変え、さつさと奥へ行ってしまった。

「アイデア……」

「私たちも行きましょう」

細い通路を進むと、右手側に大きな広い空間があった。ここが展示場であるらしい。展示品を保護するためのガラスケースが、壁と接着して設置されている。

「うわ……」

数々の展示品に息をのむシルヴィア。男性はその様子を見て笑みを浮かべると、端に並べられているものから紹介をし始めた。

「これは海の神ポセイドンが使っていたとされる三叉の矛さんさ、トリアイナです。本来の持ち主の手から離れた今もなお、黄金の輝きを失うことはありません」

「あいつ、矛を無くしたって騒いでたけど、ここにあったんだな」

「ふふつ、今は新しいものを創らせたと聞いています。きっと大丈夫ですよ」

その会話に男性は首をかしげたが、特に気にはしていないらしく、次の展示品の紹介へと移った。

「この中には、神々の父ゼウスが使ったとされる武器、雷霆らいていが入っているそうです」

次に紹介されたのは、両手でようやく抱えられる程の大きさをし

た銀の箱だった。蓋の部分には神の言葉と思われる奇妙な文字が彫られている。

「しかし、どうやってもこの箱を開けることが出来ず、中身について詳しいことは分からないのです」

「雷霆ライティングは神の世界で最強とされる武器よ。これは二次兵器と呼ばれる低威力版だけど、それでも人間くらいなら一瞬で炭に出来る程度の威力があるわ。原則としてゼウスの専有物だけど、稀に妃のヘラや娘のアテナも、使用を許可されることがあるの」

いつの間にかシルヴィア達の後ろに来ていたアイデアが言った。

「そうなのですか？ お詳しいですね。メモをしておかなければ……」

「そう書いてあるじゃない。それにしても……あなた、これをどこで手に入れたの？」

ここに置かれている品々の異様さには、さすがのアイデアも驚きを隠せないらしい。

「これは先祖代々、家宝として受け継がれてきたものなのですが……なぜか詳しいことは誰も知らなかったようです。これらの物についての解説だけは記録として残っているのですが、手に入れた場所などの記録はどこを探しても見つかりません」

「そう。ところで……神の武器の他に絵画があると聞いたのだけど、どこにあるのかしら」

「いえ、神の武器や、絵画を飾る予定であると言いたかったのですが、先に行ってしまったので……もしよろしければ、あなた方が描いた絵を飾ってみませんか？」

「え、私の描いた絵が飾られるの？ やりたい！」

男性の提案に真っ先に反応したのは、やはりシルヴィアだった。

「素敵ですね」

「道具とかはどうするんだ？」

「ご安心を。全てご用意しますので」

そう言うと、男性は小走りで奥の部屋へ入って行った。

「よし、俺も素晴らしいのを描いて飾るぞ！」

「……私も描くことになるのね」

奥の部屋から忙しい空気が伝わってくる。程なくして、男性は両手に沢山の物を抱えながら戻ってきた。

「お待たせしました。あなた方の為に、最高の画材を用意しましたよ」

男性は素早くキャンバスをセットし、それぞれに筆を手渡す。そして向こうから椅子を引っ張ってきてそれに深く腰掛けると、真剣な笑みを浮かべながら、作品の完成を待つ態度を示した。

「さあ、準備は整いました。あなた方の持つ美しい世界を、存分に描き表わしてください！」

静寂の叫び声

キャンバスに向かい、黙々と筆を走らせている一同。このときばかりはシルヴィアも静かだ。

「出来たわ」

一番先に完成させたのはアイデアだった。アイデアのキャンバスを見ると……まっすぐな線が中心から外に向かって沢山伸びている。それらの線は色、太さ、長さともに不規則であるにも関わらず、謎の一体感がある。

「これは……何ですか？」

「魂の叫びよ。本当はこうしたいけど出来ない、本当はこう言いたいけど言えない。人間のもつ、そういう心の中の叫びを、ここに表したの」

そう言われ、男性は再びアイデアの描いた『魂の叫び』を見る。

「……確かに、この線の色や長さ、いい加減に書いているようには見えません。まるで一本一本に意思が込められているかのような、不思議な迫力を感じます……さすがですね、アメイジング！」

男性は改めてアイデアの絵画を絶賛し、満足げな笑みを浮かべた。

「私も、出来ましたよ」

フレリアは創ったばかりの楽園を絵にしたようだ。さすがは創造主。その繊細かつ大胆なタッチで、楽園という美麗な空間を再現していた。

「なんと美しい……本当にこのような場所があると錯覚してしまうほどの現実味を感じます。綺麗な泉に花畑。見れば見るほど引き込まれて、吸い込まれてしまいそうです……アメイジング！」

「さつきからアメイジングしか言っていないじゃん」

と言いたそうな顔をしているシルヴィア。しかし余程集中しているのか、それを口に出すことはなかった。

「よし、俺も出来たぞ」

「おお、これは……」

キャンバスの中には、例の乗り物の上でアクロバティックなポーズを決めているシエルの姿があった。

「とても未来的な、面白い乗り物ですね。本当にこのような乗り物が現れたら、と思うと、なんだかわくわくしてしまいます。アメィジング！」

シエルはその評価に満足げな笑みを浮かべ、自身の描いた絵を大切そうに眺める。一方シルヴィアの方は……なにやら難しい顔をして、考え事をしているようだ。

「まだ完成しないのか？」

「まだ見ちゃだめ！」

絵の様子を見ようと近づいたシエルを必死に止めるシルヴィア。

「はいはい。待っててやるから、早くしろよ」

「ふふつ。楽しみですね」

「そうですね。どんな素晴らしい作品が見られるのでしょうか……」
アイデアはただ、呆れたような溜息をついただけだった。

「出来た！」

それからしばらくして、ようやくシルヴィアが筆を置く。皆がシルヴィアの絵に興味を示し、近くに寄った。ただ一人を除いて。

「え……なんだ、これ」

シエルの言葉が最初で最後だった。誰もがこの絵の前に言葉を失い、内容の解説に困っている。これには男性も言葉を詰まらせているようだ。

中心辺りで水色と茶色に分かれていることから、これが天と地であることは認識できるが……茶色い部分の中心にある、横たわっている細い灰色の物体と、それを見下ろすように天に位置する生首のようなものは……

「怪我をして倒れている騎士様のもとに、一人の美しい女神が降臨しているの。女神がこっそり騎士様の傷を治そうとしたその時、騎

士様と女神の目が合い、二人は恋に落ちるのよ！」

「……………」
場の空気が明らかにおかしくなった。アイデアは黙って後ろに下がる。

「素晴らしい！ キャンバスから溢れ出て来そうなほどのロマンス。運命に引き裂かれる二人の顔が鮮明に浮かびます。騎士よ、嘆かないで。女神様も涙を拭いなさい……………ああ、儂くも美しい恋の物語……………アメイジング！」

異様だった。こんなにも恐ろしいものを創造するシルヴィアもそうだが、それに感動している男性もまた……………。これにはさすがのフレイアも苦笑いを浮かべている。アイデアに至っては完全に明後日の方向を向いていた。

「さて、これから展示の準備に入りましょう」

男性は透明の液体を用意し、専用の道具を使って何かをしている。「何してるの？」

「表面が傷まないようにする処理です。これが乾いて、初めて展示できる状態になるのですよ」

「へえー。それって、どのくらいかかるの？」

「大体1日くらいですね。その宿に泊まれば、明日の朝には展示できる状態になりますよ。部屋も用意しておきますので、ご安心を」

「え、私達、お金なんて持ってないよ」

「そうなのですか？ なら、なおさら泊まった方がいいですよ」

「どうしよう、アイデア、お金を生み出す魔法とかないの？」

「ないわよ」

金、金と騒ぎ出すシルヴィア。それを男性は不思議そうに見つめ

……………

「あの……………」

「え？」

「その宿、私の家ですから、お金は要りませんよ」

それを聞いたシルヴィアは一瞬で顔を明るくし、今度は

「やった！ やった！」

と騒ぎ出した。

「はい、これで終わりです」

男性は手際よく全ての絵に処理をすると、丁寧に壁に立てかけた。

「では、この絵はここに置いておいて、宿の方へ移動しましょうか」

「はい」

「良かったですね、シルヴィアさん」

建物から出て、宿へと向かうこととなった一同。傾きかけた日を見ながら、ゆっくりと歩くアイデアに対し、シエルはこっそりと、ささやくように話しかけた。

「なあ、アイデア」

「どうかしたの？」

振り向かずに答えるアイデア。

「いいのかよ、あいつに神の武器とか持たせておいて。あれ、本物だろ？」

「大丈夫よ。あのひとはちゃんと分かっているから」

「ふーん。なら別にいいか」

「ところで」

「なんだ？」

「明日、隕石でも落ちないかしら」

「おい、アイデア、まさか」

「冗談よ」

「なんだ……アイデアが冗談なんて、珍しいな」

「そうね。ただ、そんな気がしたのよ。明日、隕石が落ちるような気が」

アイデアはいつもとは違う、何か含みを持たせた笑みを浮かべていた。

「うわー、宿もお城みたい！」

「ささ、部屋へ案内します。どうぞこちらへ」

先ほどの建物と同様、宿の中も城を連想させるような造りになっている。廊下には質の良い絨毯が敷かれ、明かりには高級なるうそくが使われている。

「素敵なお部屋ですね」

「うわー、ベッドに屋根が付いてるなんて、お姫様になった気分！

……目が覚めたら騎士様が迎えに来てて、それから二人は……」
妄想の世界へ旅立ったシルヴィアはさておき、男性は説明を続ける。

「ろうそくはその引き出しに入っています。他の部屋も全部同じ造りになっていますし、他にお客さんは居ないので、どこでも好きな部屋を使つていいですよ。では、私は向こうの部屋に居るので、何かあつたら呼んでください」

そう言つて男性は一番奥の部屋へ入つて行った。

「私は隣の部屋に居ますね」

「じゃあ、私はその部屋を使つわ」

「おお、じゃあ俺はその隣か」

こうして、各自が自分の部屋へと入つて行く。

「うふふ、騎士様……」

シルヴィアは夢で騎士に会えることを願いながら、早々に眠りに落ちた。

夜も更け、草木も眠り始めた頃、一本のろうそくに火が付けられた。真つ暗闇の空間に少しだけ光が生まれる。ろうそくから出た小さな炎はゆらゆらと辺りを照らしているが、そのか弱い光は今にも暗闇に吸い込まれてしまふそうだ。

「大自然は常に姿を変え続け、前と同じ姿を見せることは決してない。大自然は斯くも美しく、生きている……」

そこに存在する靈妙な何かは、目の前にある小さな生命を見つめ、その脈動を感じるかのように深く、優しく、息を吸つた。

「さて、私も聞きに行くとしましよう。静寂の声を」

ふっ。小さな生命の灯火は、灰色の尾を引きながら闇の中へと溶けて行った。

微睡の中に見る面影

「ああ、私の」

「夢が……」

……聞こえにくいわね。

「我々……いう真理を……」

「違う、わ」

もう少し、深みへ……

「て……しまえば」

「大切なことを忘れて……」

「また星が増えている」

はっ。この存在は……

「今度はどんな星を与えようか」

「美しい。君も、そう思うだろう？」

思い出せないわ……いつ、誰……

「眠り、な、さい」

だめよ、まだ

「数多の記憶が生み出した、この星の中で」

とんとん……次に目に入ったのは部屋の扉。耳に入ったのはノックの音だった。

「目覚めてしまったわね……入って」

「おはようございます」

耳に障らない優しい声と共に、静かに扉が開く。

「フレिया……」

フレイアは丁寧に扉を閉めると、しとやかな笑みを浮かべながら、こう言った。

「シエルさんが時を任せられている理由が、ようやく分かったような気がします」

「見えたのね。未来が」

「はい。夢の中では過去も未来も、真理も人間も、一切の隔たりを持たないのですね」

「そうよ。みんな一つだったから。だけど隔たりのない近さは時として、破滅を呼ぶの」

ふと窓から外を見る。まだ日は半分ほど地平線に隠れていた。側では鳥たちの挨拶がよく聞こえる。

「ねえ、あなた」

「はい」

「もし、運命が自分ではない第三者によって決められているとしたら？」

「自分という他人ですか……」

「私は確かに私を認識しているはず。それでも私の認識の範囲を超える何かが、私を見ていることがあるの。過去と未来、夢と現に存在している私もそう。意識は共有しているものの、私から切り離された存在は本当に私なのかしら」

「だから、代償にしたのですね」

「そうよ。私ではない何かの記憶なんて気持ち悪いし、そしてなにより」

「朝食の準備が……ああ、お話し中、失礼しました」

「大丈夫よ。すぐに行くわ」

男性は話を続けて下さい、という態度を見せていたが、イデアはそれには答えず、話を切り上げ、食事をする部屋へと移動した。

「あ、おはようー！」

「おはようございます。シルヴィアさん」

フレイアは静かに席に付き、ナイフを手に取った。

「んー、旨いな、これ」

シエルは食事に夢中で、イデア達が来ても気に留める様子を見せない。

「確かに、とても美味しそうなお料理ですね」

「これはロースト・チキンというものです。開いた鶏の腹に、ハムとマッシュルームをソテーし、塩こしょうで味付けしたものを詰めています」

フレイアはナイフを上品に使ってその肉を切り分け、口に運ぶ。

「今までに食べたことのない美味しさです。隣に添えてある花のつぼみも、塩味が効いていて非常に美味です」

「そう言っていたら、光栄です」

「このワイン、薔薇が入れているのね」

「はい。薔薇の花びらを定期的に交換しながら、長い間漬け続けました。また、飲む前にはハチミツを二滴ほど入れることによって、それはもうマーベラスな風味になるのですよ」

「料理によく合っていて、食欲が湧くわ」

「そうなんだ……ねえ、マーベラスって何？」

男性の話に関心を示しながらも、言葉の意味が理解できなかったシルヴィアは、イデアにそっと尋ねた。

「ここからずっと遠い場所の言葉で、素晴らしい、という意味よ」

「じゃあ、アメイジングと同じなんだね」

「まあ、そう考えていいわ」

まるで城で出されるような料理に、一同は満悦の様子だ。

「さて、私はもう済ませておいたので、皆さんが食べている間に部屋の掃除をしますね」

「行ってらっしゃい！」

男性は、まず初めに、とイデアの使った部屋に入る。

「おや、ベッドは綺麗なままですね」

ではそうろくは、と引き出しを開けるが。

「ろうそくも使われていませんね……」

男性は少し不思議そうな顔をしたが、気にせず他の部屋も見ている。

「これは……どういうことでしょうか？」

男性は首をかしげた。アイデアの使った部屋はもちろん、あのシルヴィアの部屋でさえも、全てがまるで誰も使っていないかのように綺麗なままであったからだ。

「誰一人として、ろうそくもベッドも使わないなんて……」

男性は不思議を抱えたまま、アイデア達が食事をしている部屋に戻る。

「おかえり！ 掃除は終わった？」

「ええ、まあ……ところで、もう一人の方は？」

「ああ、シエルなら食べ過ぎたつて、部屋に戻って寝てるよ」

「そうですか。なら、様子を見てきますね」

「行ってらっしゃい！」

「行ったり来たり、大変ですね」

「いえ、それがお仕事ですから」

とは言ったものの、実のところ男性は気がかりで仕方がなかったのだ。それを解消できると思った男性は、小走りでシエルの部屋へと向かう。

「このタイミングなら、すれ違はずですが……」

男性は既にシエルの部屋の前に居る。男性は扉の前で少し迷ったが、すぐに心を決め、扉を叩く。

「とんとん……。返事がない。眠っているようだ。」

「入りますよ……」

ゆつくりと扉を開ける男性。少しだけ開けた隙間から控えめに中を覗くと、シエルと思われる存在がベッドの上で横になっているのが確認できた。

「大丈夫ですか？」

小さく声をかけるが、やはり返事はない。男性は思い切って中へ入り、シエルに近づいてみる。

「不思議ですね……」

シエルは確かにベッドの、掛け布団の上で眠っている。しかしベッドは少しも沈んでおらず、柔らかさが自慢の高級な掛け布団にもしわ一つ出来てない。つまり、上に人が乗っているというのに、下にある物が一切の重力を受けていないということだ。

「ん……どうしたんだ？」

男性はシエルの体に触れてみようとしたが、シエルはそれよりも早く目を開いた。

「ああ！ いえ、食べ過ぎて眠っていると聞いたので、様子を見に来たのです」

「ああ……俺なら大丈夫だ。ちょっと、手伝ってくれないか」

シエルは腹をさすりながら、左手を男性に差し出した。

「はい」

男性は良い機会だと、その頼みを快く受け入れた。

「結構、重いですね……」

「無理やり人間になってるから、少し矛盾が起きちゃうんだろ」

「何のことです？」

「あ、いや……夢の中でアイデアに言われたんだ。気にしないでくれ。まだ半分寝ぼけたような顔をしているシエルは、何度か強く瞬きをした。

「もう大丈夫だ、ありがとな」

「いえ、これがお仕事ですから」

「おかえり！」

「おかえりなさい」

男性と共に部屋に戻ってきたシエル。アイデア達は既に食事を終えて、食後の休憩をしていた。

「もうすぐ私の描いたアメイジングな絵が飾られるんだね……」

「楽しみですね」

「なら、食事も済んだようですし、もう行きましょつか。着くころには、ちょうど展示できる状態になっていると思いますよ」

「わーい！ 行こう、行こう！」

シルヴィアは興奮気味に宿を飛び出していった。男性もあとに続く。

「シエル。気配、見ておきなさい」

「ん……ああ、分かった」

展示場へ向かう一同。その辺りにそつと漂う、静けさの無い気配。一同は気づいていない様子だが、確かにその足音は近づいていた。

静寂の無い気配

「さて、絵の具合は……」

「わくわく、わくわく!」

シルヴィアは期待に胸を弾ませているが。

「あの絵、本当に飾られるのか?」

「諦めるしかないわね」

「私はいと思いますよ、面白くて」

その背後ではひそひそ話が繰り広げられていた。

「ちゃんと全て展示できる状態になっていますね。それでは最初は

……」

男性はフレイアの描いた絵を手取る。

「『楽園』はここが良さそうですね」

フレイアの描いた『楽園』は、広い空間に入る前、廊下の突き当たりの壁に展示された。

「『アクロバット』はここ」

シエルの絵はポセイドンの矛と並ぶような場所に展示された。

「そして『魂の叫び』は、ここですね」

アイデアの『魂の叫び』はまだ何も展示されていなかった、広い空間の真ん中に展示された。『魂の叫び』からは、この辺りの壁を支配してしまうような、威圧感のある空気が感じられる。

「最後に、この『ロマンス』ですが……。ああ、ちょうど良いところが開いていましたね」

男性がガラスケースの裏側にまわり、展示品を出し入れする時に使う小さな扉を開き、中に入った。

「まさか……」

「私のアメイジングな絵が、ついに!」

シルヴィアの恐ろしい絵は、ゼウスの雷霆らいていが入っている箱を見下ろすような位置に展示された。

「おい、あれ、大丈夫かよ」

「終わったわね」

「雷いかすぢはシルヴィアさんと相性が良いはずですから、きっと大丈夫ですよ」

「いや、そういう話……でいいのか？」

「まあ、大した問題は……」

展示場内を改めて見回していたアイデアの視線が、ある場所で止まった。広い空間を挟んで、雷霆と向かい合うように位置するガラスケースの中。アイデアは早足でそこに向かい、中に入っている物を確認し、言う。

「どうしてこんな物を置いているの？ せつかくの空間が駄目になるわよ」

「どうかしましたか？」

「これ。いつ展示されたのかしら」

「さあ……展示した覚えがありません。これは何ですか？」

「これは正邪せいじやの天秤よ。片方に罪悪の石を、片方に調べたい事柄を乗せるの。どちらに傾くかによって、それが善であるか悪であるかが分かるの」

正邪の天秤は神が人間の行いを量り、それに応じて罰や褒美を与えたとされる神の道具の一つだ。裁く対象を天秤の前に呼びだし、裁く者が合図をし、初めて天秤に選別という概念が生まれる仕組みだ。

「だけど、この世界にはもともと善や悪なんて存在しないの。ただ環境や秩序によって、そのように分ける現象があるだけ。そういうものを絶対的に善であるとか、悪であるとか言い切れるのは、偽り以外にあり得ないのよ。だからこの『正邪の天秤』も、違う人間が使えば違う結果になるわ。結局は自分に言い聞かせるための道具ではないの」

一つ、何かが近づく音がした。

「この世にある全ての存在は、ただ単に取引をしているだけであっ

て、それ以上でも、それ以下でもない。それを勝手に善や悪に選別して、掻き回すなんて、許せないわ」

「あれ？　なんか乗ってるよ？」

「そうですか？　私には何も見えませんが……」

「罪悪の石、ですね」

人間には認識できないもの。物質ではないが、確かに空間を歪め、存在を主張しているもの。それこそが罪悪の石。神の生み出した罪悪という概念。

「おい……なんか、嫌な予感がするぞ」

「ええ、そうでしょうね」

準備は整った。あとは裁く者が合図をするだけだ。

「え？」

「来たわね」

背後から強い光を感じる。雷霆らいていの入った箱から強い光が漏れているのだ。

「これは……どうしたのでしょうか？」

男性は不思議そうに雷霆に近づくと

「危ないわ」

強い衝撃と共に視界が真っ白になった。

「ああ……」

男性はその衝撃に足を取られ、尻餅をつく。天井が崩れ、岩石の塊と化し、隕石のように降り注ぐ。

「フレイア」

「はい」

その声と同時に、一同を守るように虹色の障壁が現れる。それはいかなる存在も侵入を許されない絶対的な領域。一同を襲う隕石は膜に触れた瞬間、砂とも塵ともつかないものに変わり、散って行った。

「きゃあ！」

少し遅れて、耳を塞ぎなくなるほどの轟音が響く。

「シエル、気配は」

「風が届かない所に居るみたいだな。あいつら、こっちに降りて来てないぞ」

光はまだ収まる気配がない。

「随分と横暴なやり方じゃない。私達が相手だと秩序もお構いなしなのね」

「こ、これは一体何なのです？ 眩しすぎて周りがほとんど……あつ」

再び轟音が耳をつんざく。

「動かない方がいいわ。まだ続いているから」

男性は床に崩れたまま、この強襲が止むのを待っている。

「うつ……いつまで続くの？」

「相手が満足するまでよ」

轟音はそれから何度も、何度も響き渡る。

「随分長いな。もう何も残ってないだろ」

「遊んでいるのね……」

「もうすぐ、終わるはずですよ」

長く続いた光の疾走はようやく収まり、辺りも少しづつ静寂を取り戻している。

「なんと……」

砂煙が収まり現れたのは、黒だか茶色だか分からない、汚い色に変わった岩石の山だった。そこにかつての面影は無く、展示していた『家宝』も、シルヴィア達の描いた絵も、今はただの消し炭ではない。

「ああ……これも、これも……みんな、こんなに……」

男性は小刻みに震え、変わり果てた家宝を名残惜しそうに触っていた。

「私のアメイジングな絵が……」

「なあ、アイデア。これ、どうにかしてやれないのか？」

ひどく悲しんでいる男性を見かねたシエルは、そうアイデアに尋ね

たが。

「残念だけど、出来ないわ。他の存在が払うべき代償を、私が代わりに払うことは大自然が許さない。私がそれをすれば、連鎖するよ
うに代償が発生して限が無くなくなってしまふの。あなたなら、それが
どういうことか分かるでしょう?」

「じゃあ……」

「あの存在達を捻じ伏せてどうにかするか、あるいは」

「私の世界が……私の、一族の夢が……」

嘆く男性のもとに、ついにその気配がやって来た。それはアイデア
達が探していたもの。我々の認識を超える、どこか遠くからやって
きた神秘。

「奇跡が起きるか」

今、この場に現れた次元の扉。この扉は誰かが創ったものではな
い。夢が現に変わる瞬間発生する、特別な輪の切れ目だ。

「来ていたのは、夢への扉を開ける鍵……? だとすればなぜ……」
アイデアが考えている間にも、輪の切れ目 次元の扉はゆっくり
と開き、今までに感じたことのない何かが顔を出してくる。

次の瞬間見えたのは、小さな光の舞踏会。渦を巻くようにして辺
りへ散らばるそれは、小さな銀河にも見えた。開式の挨拶が終わる
と、次に始まったのは逆行のワルツ。まるで時が巻き戻されていく
かのような、煌びやかな光景が一同の前に広がる。

「うわー。元に戻ってる……」

「綺麗、ですね」

「これは、どういう……」

「おお……なんだ、この感じ」

「シエルが反応するということは、少なからずシエルに関係してい
る現象なのね」

「ああ。なんか、戻ってるように見えるんだけど、実際には戻って
ないだろ。でも」

「でも?」

「感覚的には、進んでるんだよ。凄い速さで」

「不思議ね……解析をしてみないと」

夢という世界に住む、真理という存在にとっても、全くもって未知な現象。なぜこの時、この場所に現れたのかも分からない。アイデアは研究用の空間を展開し、その場で解析を始める。アイデアは目を閉じ、話すこともやめてしまった。

まもなく岩石の山は消え、元の展示場が姿を見せる。

「元通りに、なりましたね……」

「ねえアイデア、何が起きたのか分かった？」

「この短時間で解析した限りでは……」

アイデアは空間を閉じながら言う。

「人間には『夢』という神を創って、それを降臨させる力があるのよ。もちろん、神には意思があるから降臨しないこともあるけど」「それだったら、向こうに居るときに気づくんじゃないか？」

「人間の創った夢は向こうでも見られないわ。仮に神の世界に降りて観察をしても同じ。人間の夢は、それを共有する者にしか見えな
いものだから」

「それにしても、これだけ大変なことがあったのに、他の人間は全然気づいてないね」

「それも不思議ね。調べているけど、分からないわ」

「アイデアの力でも分からないなんて……」

「不思議なこともあるんだな」

「魔法や大自然の力が及ばないのも当然よ。大自然ですら想定外のことだもの」

「人間もまた、立派な創造主なのですね」

「おめでとう！」

「ええ、私、ですか？」

男性は思わずうろたえた。

「おめでとうございます」

「あ、ありがとうございます」

「ふふっ……そろそろ、ですか？」

閉じかけた輪の切れ目を見て、フレイアが言った。

「そうね。行きましよう」

「え、もう行っちゃうの？」

そう言っている間にも、輪の切れ目はゆっくりと閉じていつてい
る。

「たとえ明日空が落ちようとも、私には関係ない。私には、生きて
いるという現^{うつつ}がある。それを証明できただけで十分。今、私の心の
中には全てがある。そして今」

ふわっ。輪の切れ目は完全に閉じる瞬間、小さな風を起こした。

その風の中に、また新しい何かがあるのを、一同は予感する。

「また新しいものが始まった」

嵐の前の静けさ

「行きましよう。新しい現を探しに」

「行ってしまおうのですか……。やはり、あなた方は人間ではなかったのですね」

もうじき別れの時が来ると知り、最後に気になっていたことを問う男性。

「人間ではないと知っていたら、何か特別なことでもあった？」

男性は少し笑う。

「そうですね……。朝食がもう一品、増えたかもしれません」

その言葉に、イデアも少し笑った。

「それは素敵ね。それで、いつから気づいていたの？」

「ろうそくが減っていませんでした」

「それだけ？」

「あと、ベッドが綺麗なままでしたから」

「当然よ。私は立ったまま寝ていたのだから。それに、私達の中には明かりになるひとが居るの」

「そうでしたか。……今回は恐ろしい体験をしてしまいましたが、それが何であったかは、聞かないでおきます」

「それがいいわ。幸い、他の人間にも気づかれていないようだし」

「私の絵、ずっと飾っておいてね！」

「また、どこかで会えたらいいわね。ではまた、その時まで」

ふわっ。イデア達は男性に見送られながら消えた。

「これからどこへ行くの？」

「すぐそこよ」

「あれ、」

角を曲がると見覚えのある道。そして見覚えのある十字架。

「この教会……って、つまり」

「輪廻が居るのか」

「そうよ」

「えー、一度来たところだったなんて、全然気づかなかったよ」

「現にある物はすぐに形を変えてしまいますからね」

と、その時、教会の方から鐘の音が聞こえてくる。

「聖職者の話が始まる合図よ」

「行ってみますか？」

「シエル、気配を」

「おう」

気配を消し、そつと中へ入る一同。

「お」

「居た、居た……」

一瞬、目が合う。ヴェリタスは微かに笑みを浮かべると、何事もなかったかのように話を始めた。

「みなさん、よく来て下さりました。神はあなた達が熱心に学んでいることを、しっかりと見ておられますよ」

イデア達は空いている席に座る。

「さて、私が前回お話したことを覚えていますか？ 私は前回、自然の中にあるものは全て神であると言いました。しかし神は一人しか存在しない。そしてその神の名を知る者は全てを知る。というお話です」

「覚えてないんだけど」

「うん、俺も」

「私たち人間、大自然、その他あらゆる生命は皆、一つの大きな存在でした。一人の神の、ある一面として、神の心の中に居ました。しかし神は孤独でした。世界に自分一人しか居なかったからです。そこで神は自分の心を解放し、その中にある、ありとあらゆる側面をその世界へ旅立たせ、独立させました。神は心を解放したため、心を失い、長い眠りにつきました。しかし亡くなられた訳ではありません。神は夢の中から私達を見て、時が来るのを待っているの

す。神はより大きく成長した心を手に入れ、新たな世界を創ることを夢見ているのです。この世界を神の心に相応しいものとし、神の体へ還ることが私たちの使命なのです」

「もつすでに意味が……」

「……」

「私たちのこの姿は神の一面です。それを忘れてはいけません。私たちの目に入る存在も同じです。この世界は神の心、そのものです。ですから、たとえ敵であっても、気が合わないと感じる相手でも、自分であるかのように愛しなさい。どんな物であっても、親の形見であるかのように大切にしなさい。それは神の一面であるからです。自分の一面であるからです。私達は皆大きいのです、繋がっているのです」

考えることをやめたシルヴィア。そして隣から聞こえてくる寝息。

「ここまで話せば、あなた達には理解出来たことでしょう。私たちの帰るところ、たった一人の神の名は『 』です」

神の名には音が無かった。ヴェリタスの口も動いていなかったことから、名前が特殊な言語であるということもないようだ。

「神は最高度に抽象的な存在です。そのように大きな存在を、私たち人間が創った『言葉』という具体的、かつ小さいもので表現をすることは不可能なのです。私たちの言う『名前』とは、あるものから切り離して、それと区別をするために付けるものです。ですからそれら全てを一つにしたもの、つまり私たちが今、目にしているもの。それがまさしく、神の名です」

「この話……」

「何か、心当たりがあるのですか」

「ええ。だけど、忘却の彼方にあるみたいね」

「神はこんなにも近くにいらっしやるのです。何も迷う必要はありません。神はいつでも、私たちの選んだ道を最大限に尊重して下さります。ですから私たちは常に恥のない選択をするよう、心掛ければいけませんね。では、今日のお話はこれで終わりです。あな

た方にも神の加護がありますよう」

「面白いお話でしたね」

「長かったよ……すごく難しかったし」

「そういうものよ」

イデアはそう言いながら、シエルの背中を力強く叩いた。

「んあっ！」

「ひとが話をしているときに居眠りをするなんて、いけないひとね」

「イデアがまた何か恐ろしいことを考えてる……」

「楽しみですね」

話を終えたヴェリタスがこちらを見て、部屋へ入っていく。

「行くわよ」

イデア達はヴェリタスの後につき、素早く部屋に入った。

「時が、来たのか」

扉を閉め、人間が部屋の近くに居ないことを確認し、話を始める

輪廻。

「そうよ」

「それで、私の力が必要か？」

「分からないわ。ただ、来れば楽しいものが見られる、ということ
は保障するわ」

「今日の夜は」

「満月よ」

「まさにその時……か。いいだろう、半身で良ければ力を貸そう」
「半身もあれば十分よ」

そして夢への扉が創られる。

「私達は先に行っているわ」

「承知した。その時が来たら居られるよう、調節しておく」

「じゃあ、またな」

「またね！」

それぞれが別れを告げ、中へ入った。

「また会いましょう」

「ではまた、その時まで」
扉を開けると、そこには

崩壊した調和空間

「なんとということでしょう……」

扉を開けると、そこには一面の瓦礫。

「ここって、もしかして……」

「ハルモニア、か？」

「そのようね」

かつて純白の造形美、自由と調和の国と謳うたわれたその面影は失われ、黒く焼け焦げた瓦礫はまるで……

「展示場の時と、同じ？」

「そうよ。夢と現は表裏一体。向こうが直る代償に、こちらのものが壊れてもおかしくはない。だけど、今回の場合は違ってみたいね」

「どうということ……？」

「単なる腹いせよ。予想外のことと破壊を阻止してしまった。だから代わりにフレイアの装飾品を」

「通常ならば、神がこちらの世界に来ることは出来ないはずですが……」

「神は人間の出来ること、望むことは全て出来る。だから彼らは呼び出したのよ。私たちの世界へ介入するという『夢』を」

「じゃあ、他の所もやられるかもしれないってことか？」

「その可能性は高いわ」

「きゃああ、どうしよう！」

シルヴィアは混乱し、走り回っている。

「今のところは大丈夫よ。おそらくはまだ、彼らも力を試している途中。直接こちらへ来て攻撃はしていないはずよ。安全が確認される前に、彼らの居場所を見つけて、阻止するしかないわ」

「でも神の世界になんて行ったことないぞ」

「私たちが器を持ったまま入るのは不可能よ。神の世界で好き放題されては、大自然も大変なもの」

「なら、どうすればいいんだ？」

「出来ました」

「フレイアが行くのよ」

「え」

「どうしよ……え？」

「ふふつ、行ってきます」

「ち、ちよつと待て、話が早い！」

「きゃああ、フレイアが！」

動揺する二人をよそに、神の世界へと繋がる扉が開かれる。

「フレイアならあの世界も拒否しないわ」

ふわつ。

「フレイアは昔、神だったから」

愛と美の女神フレイアは静かに階段を下りていた。それは全ての世界を貫く光の梯子だ。本来は位の上があった存在が、上位の世界へ移動する時にのみ使われるらしい。

とん、とん……。フレイアの歩く音だけが聞こえている。神の世界も、もう目の前だ。フレイアが神の世界へ入ろうと、少し足を速めたその時、下の方から音もなく近づいていた存在と目が合う。

「……お待ちしていましたよ」

「あなたは……？」

すつきりとした顔立ちと、見るからに柔らかそうな栗毛。可憐な声で話すその存在からは、何とも言えない哀愁が漂っている。

「私はフレイア。愛と美を司るものです。人間は私のことをこう呼びます」

「マルデル」

「はい」

「あなたが、私を？」

「いいえ。私はただ、手助けをしただけです」

「そう。ありがとう」

少女は微笑んだ。

「この先へ、行けばいいのね」

フレイアは優しく頷いた。再び歩き出す両者。フレイアはすれ違
いざまに一言。

「ようこそ、楽園へ」

今宵、永久の月をあなたに

こちらはフレイアの創った楽園。混乱しているシルヴィアを落ち着かせるために、アイデアが強制的に連れてきたようだ。

「フレイアって昔は神だったんだ……」

「いつこつちに来たんだ？」

「覚えていないわ。ただ、あなた達が出来ると同じか、それ以前にこちらへ来たことは確かね」

「私達っていつからここに居るんだっけ」

「うーん……」

「風や光ならかなり前からあるわよ。だけど、それがあなた達という存在になったのは、ごく最近のこと」

「じゃあ私達って、最初は違うひとだったの？」

「いいえ。初めは何でもなかったの。ただの風と光よ」

「ならよかった!」

安心したような顔を見せる二人。それを見ていたアイデアが、ふと目つきを変える。

「……何か、来たわね」

「え？」

「何も感じないぞ」

「風を起こさない存在なのよ。このタイミングだと、階段でフレイアとすれ違ったはずだけど……通したのね」

「じゃあ、神とかじゃないってことだね」

「そうなるわ」

「よかった! で、そのひとはどこに居るの? もしかして……」

「ようこそ、楽園へ」

アイデアはゆっくりと後ろを向いた。

「よく気付いたわね……初めまして」

「相手に察知されるのは、音や気配だけではないのよ」

「もうこういうのには慣れたぞ」

「ねえ、名前はなんていうの？」

「器はもう貰っているのでしょうか？」

少女は頷く。

「ノスタルジアよ。よろしく」

「へえー。よろしくね！」

「ノスタルジアか……なんか、あれだな」

「何笑ってるの？もしかして……」

「いや、なんでもないぞ！決してそんなことはない！」

「そんなことって、どんなことよ」

自分で自分の首を絞めるシエルであった。ノスタルジアはその光景を見て、楽しそうに笑った。

「ねえ、この世界には、夜は無いの？」

ノスタルジアは上を見ながら言う。この世界の空はいつも通り、真っ白だった。

「夜というか、朝とか昼とか、そういうもの自体が無いっていう感じだな。その辺はシルヴィアに聞くといいぞ」

「え？ 私そんなの知らないよ？ まあ、レディアントの理ことわりを使えば好きに出来るけど……ね、イデア」

途中で説明に苦しんだシルヴィアは、イデアに助けを求めた。

「そうよ。この世界は時という概念が曖昧だから、空もどうしたら良いか分からないの。だから好きな時に、好きな空にして良いのよ。シルヴィアが許すなら、ね」

「私、許すとかそんな重要な立場だったの？」

「ええ、そうよ」

「知らなかった……」

「ふふ……面白いわね。じゃあ、夜にしてほしいわ。大きな、青い満月の夜に」

シルヴィアがレディアントの理を出すより早く、空は暗くなり、大きな満月が現れた。

「なんか、夜になるのは早いんだよねー。なんでだろう?」

「……綺麗な月」

うつとりと溜息を漏らすノスタルジア。その横顔には、非日常的な神秘がありながらも、どこか日常を感じさせるような、ほのかな安らぎがあった。

「あ、流星」

ノスタルジアは流星を見ると、突然手を合わせる。

「何してるの?」

「流星に願い事をする、月の女神がそれを叶えてくれると信じられているのよ」

「へえー。あ、また流星」

今度はシルヴィアも手を合わせた。

「騎士様に会えますように……」

「へえ、騎士が好きなのね」

「うん! ノスタルジアは、何をお願いしたの?」

「今が、ずっと続きますように」

「素敵な願いね」

遠くから様子を見ていたアイデアが近寄ってくる。

「ならば私は、何度でも素敵な願いを聞けるよう、こっつ願っわ」

月からの使者が、アイデアの願いを聞きにやってくる。

「今宵、永久とこしえの月をあなたに」

迫る絶命の足音を

こちらは神の世界。木々生い茂る林の中を、一羽の白い鳩が飛んでいた。

「やけに静かですね……」

鳩は珍しく静まり返っている空気に警戒する様子を見せつつ、慎重に目的地を目指している。と、その時。鳩は突然、何かに踏みつけられたかのように地面へと落下し始めた。

「はっ」

鳩は止む無く正体を現し、簡単な防御魔法を使う。魔法によってすぐに圧力は無くなり、事なきを得た。

「重力を司るものは、どの世界にも存在しないはずですが」

フレイアの違和感は確信へ変わったようだ。この神々は確実に何かをしている。大自然に背くような、大変なことを、だ。

「我らの領域に何の用だ」

どこからともなく声が聞こえる。世界を包み込むような、おぞましい声であった。

「ゼウス……この世界に、重力を司る者は存在しないはずですが」

「答えよ。これは我らに対する挑発か？ 皮肉か？」

「そうではありません」

「愛と美の女神フレイアよ。お前はかつての戦いの際、一人姿を変え、どこかへ逃げてしまったそうではないか」

「逃げたのではありません。ただ」

「呼ばれただけ、か？ あのふざけた存在に！」

ゼウスは憤怒した。かつて、フレイアの領域に存在する神々と、ゼウスの領域に存在する神々が、この世界における自分達の領域を広げるために、激しい戦いをしたことがある。両者の力是对等であり、領域の広さもまた等しかった。そのため戦いは長く続き、多くの神々がその存在を失った。

「我らに属していた愛と美の女神が殺されたと知り、我は報復としてお前を殺そうとした。だが、お前はどこにも居なかった……厳粛なる神々の戦いを放棄し、逃げたのだ！」

どちらも領域を広げることは出来ず、ただ多くのものを失ってゆくだけだった。結局、互いの領域には立ち入らないという事で戦いは終わった。そして神々は悟る。この世界における神々の領域は決められていて、その領域を侵すことは出来ないのだと。それがこの世界の理ことわりなのだ。

「あの女神は最後まで戦い、死んでいった。対してお前は……」

「どのような存在も、それぞれ必要なものは違います。やるべき時に、やるべき者が、やるべき事をする。それが大自然の理です」

「大自然、真理、理……なんと小賢しいことか。全ての世界において最も優れているのは我ら、神であるというのに」

「例えそうであったとしても、現まであるようなことをして良いわけではありません。更にあなた達は、私たちの世界にまで踏み入るうとしています。それは決して、許される行為ではありません」

「許すかどうかを決めるのは我らだ。秩序や理を創るのは我らだ。お前は最も敬意を払うべき存在に、このような無礼を働いた。愚かな女神フレイアよ。死してその罪を償うが良い」

黄金の雨が降り注ぎ、フレイアを襲う。フレイアはすぐさま聖域を創り出し、身を守った。

「私は、あなたと戦いたくはありません」

「小癩こじやくな。ならば……」

フレイアの前に鋭い雷いかずちが落ちた。雷より現れるは神々の王。白い髪をなびかせ、堂々と立っているその様子からは、体が焼けるような威圧を感じる。

「我が直々に裁きを与えよう」

ゼウスの左手には、青白い輝きが握られている。それは『二次兵器』ではない。本来の威力を持った、世界最強とされる武器、雷霆らいいてい。「女神フレイアよ。我に逆らった罪は重いぞ。最強と崇められるこ

の力、その身をもって感じるがよい」

「……残念ですが、それはもう最強の武器ではありません。私は最強の盾を創れます」

「何だと？ この期ごに及んで、まだそのような戯言たわごとを……まあ良い。試してみれば一目瞭然というものだ」

ゼウスは輝きを握っている腕を高々と持ち上げる。それに反応するように暗雲が立ち込め、雷鳴ひびくが轟く。

「行け。滅せよ」

ゼウスの雷霆は燃えさかる蛇へと姿を変え、天に昇る。それと同じに、柔らかい光がフレイアを包んだ。

「崇高なる神々の怒りに焼かれ、苦しみに悶もだえながら死ぬがよい！」
この世の終わりとも思えるような、凄まじい光が大地へと降り注ぐ。辺りの木々はいとも簡単にへし折られ、瞬く間に炎をあげた。

一方、柔らかい光は黄金のヴェールとなってフレイアを包み、攻撃を完全に防いでいる。

「これが神なる盾か……面白い」

ゼウスは攻撃をやめた。フレイアも防御を解く。

「神という栄光に満ちた地位を捨て、真理などというふざけた存在と成り果てた、愚かな女神フレイアよ。真理という地位を捨て、再び神として、我らに従属すると言うなら、お前の大切な世界を破壊することは止めよう」

「私は神に戻るつもりなどありません。あなたに従うつもりもありません」

「真理とか言う存在が、そんなにも大切か」

「真理を知らない存在は皆、自らの力によって消えていくだけです」「下らん。言いたい事はそれだけか」

「はい。これ以上、多くのことを語るつもりはありません。神なる盾の前に、あなたの雷霆は無力。このまま身を引いてもらえなければ、私はあなたを滅します」

フレイアは本気であった。普段は見せることのない、鋭い目つき

でゼウスを捉えている。その様子にゼウスは不敵な笑みを浮かべた。
「女神フレイアよ。これを目の当たりにしても、まだ同じことが言えるか？」

ゼウスは手元に戻ってきた雷霆を、今度は杖の形に変え、その先で空に何やら文字のようなものを書いた。文字は光を放ち、やがて一条の槍へと姿を変える。フレイアはその光景に目を見開いた。

「これは、オーデインの……」

「そうだ。偉大なるルーンの力、最後の呪法」

目の前に在る黄金、神なる槍。それはフレイア達の領域に君臨していた、オーデインという神のみが知るはずの最後の奥義。

「なぜ、ルーンが秘密が分かったのですか」

「虹の女神、イーリス」

「虹……雨！」

フレイアはかつての戦いが終わった直後、秘かにこちらの世界へ戻って来ていた。かろうじて生きている神々を治療するため、癒しの雨を降らせたのだ。まさかそれが原因で秘密を知られてしまうことになるとは、フレイアにとっても想定外であった。

「お前のおかげで、我らは更なる力を手に入れた。感謝しているぞ、ははは……」

愉快そうに笑うゼウス。

「ルーンを魔術として使うには、単に石碑や武器に刻むだけではなく、いくつかの決められた要素を、手順を踏んで行う必要があるらしい」

ゼウスはからかうような笑みをフレイアに向けた。

「我は分からなかった。ルーンの本当の力を引き出すには、最も効果の高いものの正確な場所に、必要な時に必要なルーンを刻めという。それが一体どこであつて、いつなのか」

神なる槍はじつと動かず、主の指示を待っている。フレイアも同様に、ゼウスの動きをうかがっている。

「だが、これで分かった。これは大自然そのものに刻むのだと。今、

お前を殺すために」

ゼウスは槍に指示をする。貫け、と。

「はっ」

フレイアは神なる盾を呼ぼうとするが、もう遅い。神なる槍と神なる盾は、共に争いあつてはならない掟。片方がこの場に存在する以上、もう片方は存在を許されないのだ。

「哀れな女神フレイアよ。我に従っていれば、永遠の喜びを与えてやったというのに」

神なる槍は対象を確実に貫いた。貫かれたそれは、しばらく時が止まったかのように静止し、それからゆっくりと前に傾いた。

「う……」

水のように倒れるフレイア。同時に、大地に亀裂が走る。そして轟く大地の咆哮。フレイアは大地が開いた口の奥に、迫る絶命の足音を感じた。

「ははっ、女神フレイアよ、我のものとなるがよい！」

地より出でるは黒馬にまたがる黒い騎士。それは冥界への靈柩れいごうであり、死そのもの。名をハデスと言ひ、冥界に君臨する王である。

女神フレイアは大地の割れ目へと連れ去られ、消えてしまった。

女神は幸福の中で嘆く

「フレイアがあの世界から消えたわ」

「え？」

「亡くしたのよ」

「え……フレイアが？」

シルヴィアはまだ状況が呑み込めていないらしい。

「その世界に居る以上、その秩序に拘束される。いくらフレイアでも、秩序を利用されたら勝てないわ」

「じゃあ、フレイアはもう、消えちゃっ、た？」

恐る恐る、確認するように尋ねたシルヴィア。イデアは笑みを浮かべ、答える。

「真理が消えてしまうことの方が問題よ」

シルヴィアはその笑みから言葉の意味を理解したようだ。

「よかった……。それじゃあ、どうすればいいの？」

「迎えに行くのよ。亡者の世界、冥界に」

「冥界……」

「冥界は言ってしまうえば虚無の世界。光も風もない、冷たい世界よ」

「じゃあ」

「シルヴィアも、シエルも存在を許されない。冥界には闇と影しかないの」

「暗いのに影があるの？」

「あそこには黒い月があるのよ。そう、唯一あの世界に入れる存在
と言えば」

「私はこの世界に居るべきではありません」

亡者の世界、冥界。完全なる暗闇の中で、フレイアは戦っていた。とはいえ、ハデスは冥界の王、闇そのもの。フレイアは見えているのに見えない敵に、完全に囲まれていた。

「もう遅い。お前は死んだのだ」

「私を滅すことは出来ません。私が消えれば、世界の秩序は崩れてしまいます」

走り出すフレイア。

「いい加減、諦めたらどうだ。そんなに我が憎いのか」

「そうではありません。ただ……」

「ただ、どうしたのだ？」

返事に詰まるフレイア。

「愛と美の女神フレイア。お前は素直ではないな。ならば、無理やりにも」

ハデスは静かに笑った。

「分かった！ イデアはどうするの？」

「私は特別な姿で行くわ。シエルはここを見ていなさい。何かあったらノスタルジアを守るのよ」

「任せとけ！」

「まあ、どうせ誰も入れないと思うけど。ではまた」

「気をつけるんだぞ」

ふわっ。

「あれ、シルヴィアも行ったのか？ ……まあいいや。何して遊ぶかな」

花畑に寝転び、楽園を照らす大きな月を眺めているシエル。その傍らで、ノスタルジアは祈りを捧げていた。

「月よ、私達を隠して。あのひと達を守って」

「聞こえるだろう？ 我を称える死者達の声が」

「報われぬ魂の悲痛な叫びを、称える声だなんて……」

「そう恐ろしい顔をするな。お前も彼らの一員となり、その命を我と共にするのだぞ」

「いやです」

再び走り出すフレリア。

「ははっ……無駄だ！」

「うっ」

足元から黒い塊が飛び出してくる。それによりフレリアは派手に吹き飛ばされた。

「ここは我のためにある世界。全てが我にとって都合の良いように出来ている」

フレリアは起き上がり、防御魔法を使おうとする。しかし、神なる盾や聖域の魔法はおろか、簡単な防御魔法ですら使うことが出来ない。ここは虚無の世界。満たされる虚無により、いかなるものも存在を否定されてしまうのだ。

「ここにはお前を惑わすものも、苦しめるものも何もない。永遠の時を我と二人きりで過ごせるのだぞ」

「私は永遠など、求めてはいません」

「永遠の魂が得られるのだぞ、永遠の力を得られるのだぞ」

「……」
「ここには水も存在しない。お前の得意な魔法は何一つ使えないだろう」

「私は」

「美しき純白の女神フレリアよ。我の色に染まるがよい」
「うっ……」

ハデスはフレリアの首を絞め、高く持ち上げる。真理は人間や神とは違い、酸素と呼ばれるものを必要としない存在ではあるが、こちらの世界に居る以上、こちらの秩序が適用される。それらの生命が酸素を失ったときと同様、フレリアの体から、徐々に力が抜けてゆく。

「もうすぐ……もうすぐ我のものに」

下品な笑みを浮かべるハデス。闇は確実にフレリアの体を侵してゆく

「ここが冥界か」

背後から聞こえる喉が潰れたような声。不意を突かれたハデスは、思わず首を絞めていた手を緩めてしまふ。ハデスの手から解放されたフレリア。ハデスは素早く距離を取り、後方を確認する。

「何だ、貴様は」

「妾は」

瞬間感じる空気の震え。それは全てを超越した存在への畏怖^{いふ}。

「闇の真理、イクリプス」

「真理だと！……ここは我のみが存在を許される世界。他の存在にはお引き取りを願おう」

「ここには光も風も、水もない。妾にちょうど良い世界ではないか。ぜひ妾のものにしたいところ……」

頭上にある黒い月が、黒い光を放つ。フレリアの影は引き伸ばされ、妖しく揺れ動く。

「……ならば、力づくでも消えてもらおう」

「ふふ……妾を、超えられるか」

「手加減などはしないぞ。覚悟をしろ」

ハデスは意識を集中し、何かを準備しているように見える。

「存在の終わり、虚無を司る者よ。今こそ我に力を」

フレリアを襲ったときと同じ、黒い塊がイクリプスを襲う。

「タナトス」

塊を避けたイクリプスに追撃を与えるように、ハデスが飛びかかってくる。その手には身の丈ほどもある大きな鎌が握られていた。

「無へと帰すが良い」

タナトスとは全てのものに終わりを与え、生命の火種を刈り取るための、死を象徴する鎌だ。ハデスは死を振り回し、闇という真理を刻もうとする。

「……愚か」

タナトスは確かに対象を切った。しかし、タナトスにイクリプスを切ることは出来なかった。完全なる虚無を虚無にすることなど、不可能であったのだ。

「何だと？」

「闇に形を与えるなど、愚かだと言っているのだ。闇は本来、このような存在」

イクリプスが呼び出したのは完全なる虚無。闇に与えられている器が外れた、本来の姿だ。もはや闇と言う色すらないそれは、ハデスの持つタナトスまでも消し去ってしまった。

「はっ」

「やはり、お前の為にあるにはもったいない世界だ。妾の望む世界に変えてしまおう……」

「何をするつもりだ」

「世界を、創り直すのだ」

一つ、何かが割れる音がした。

「解析」

世界に腕を入れ、内部を探る。この世界にある秩序、理を一つずつ調べているのだ。

「許さぬぞ……」

ハデスは迷っていた。世界の再構築を止める、唯一の方法。これを使えば自身が長い時をかけて積み上げてきたものを、一気に失うことになってしまう。

「分解」

世界が揺らぎ、秩序が崩される。しかし一度に崩すのではない。上から順に、世界を落とさぬよう、慎重に。

「仕方がない、か」

意を決し、ハデスが向かったのは、この世界に一本だけ存在するザクロの木。これはこの世界での『契約』に使うもので、この世界に來た存在は二度と外へ出られぬよう、その実を十二粒、体に埋められてしまうのだ。その木を滅すという事は、契約を破棄するという事。それはつまり、ハデスが今までに積み上げてきた生命、秩序、概念すべてを解放してしまうということになるのだ。

「いけません」

それに気づいたフレイアは、動けないイクリプスの代わりにハデスの元へと駆ける。

「邪魔だ！」

ハデスはフレイアを吹き飛ばそうと、再び暗黒の塊を創った。

「効きません」

それを防いだのは神なる盾だった。ハデスは動揺している。一刻も早く木を滅さなければ、と急いで木へ駆け寄る。

「フレイア、ハデスの影を踏みなさい」

突然、足元から声が聞こえた。フレイアはすぐに理解し、ハデスの元へと急ぐ。

「ええい、消えてしまえ！ タナトス！」

ハデスは力を込め、その腕を振った。

「滅せよ！」

「はっ」

最後の一步、足を大きく前へ出し、フレイアが飛ぶ影、踏んだ」

夜の女王は斯く語りき

タナトスは木に触れる寸前で止まっていた。

「危なかったわね」

フレイアの影が言った。

「……再構築」

動けないまま目を見開くハデスの前で、ザクロの木が地面へと吸い込まれるように消えた。この世界には存在しないはずの、強い風がハデスを襲う。そして黒い月明かりに照らされる小さな潤い。

「水……貴様ら、何をした！」

「この世界の本質を変えたのよ」

「ここはもはや冥界ではない。誰もあのような世界など、望んではいなかった」

悔しそうな顔を見せるハデスの姿が、少しずつ薄れてゆく。この世界に冥界の王は不要なのだ。

「おのれ真理どもめ……世界を覆す、忌々（いまいま）しき反逆者へと成り果てたな！ 我をこの世界から追放したその罪、必ず償わせてやるぞ」

世界を崩され、冥界より追放された冥界の王。新たな主を迎えたこの世界は、これから先、一体どのような姿を見せるのだろうか。

「助かりました」

「当然のことよ」

フレイアの影は笑みを浮かべているように見えた。

「さて、妾はもうしばらく、この場に留まるつもりだが」

「いいわよ。私も、もう少し」

「私も、少し休憩をします」

「見て、月虹^{げつこう}」

ノスタルジアは楽園の空に架かる虹を見つけ、感嘆の溜息をつい

た。月の光によって造られた虹は七色の輝きを見せ、この夜という世界を楽しんでいるようだった。

「綺麗だな……ん？」

一瞬、樂園が動いたような感覚がした。

「どうかしたの？」

「いや、気のせいだ。たぶん」

「おかしい……」

「どうしたのですか？」

「妾の一部を勝手に使っている者が居るようだ。勝手に手を加え、変なものにしているらしい。とても不快だ」

「……心当たりがあります」

「重力を操っていた、あの人間か」

「はい」

フレイアは重力を受け、地面に落下したこと、ゼウス達にルーンの秘密を知られてしまったこと、そして虹の女神イーリスの存在を話した。

「そもそも、妾にそのような使い方はないはず。どのようにすれば闇が重力になるのか……」

「重力には闇の他、人間にしかないものが含まれているのよ。それによって人間達は足を地に付けていられるの。本来は大自然にしかその調合は出来ないけど」

フレイアの影が動き出し、フレイアの足元を離れる。

「ルーンの秘密はともかく、重力と虹の女神は厄介ね」

影は地面から離れ、立ち上がった。それは立ち上がると同時に赤いドレスを着た存在になる。影の名残が煙のように広がり、アイデアの元を離れて行く。

「今回のことも含めて、神々はすぐに行動を始めるはずよ」

「はい。神々の領域は侵せないと知れば、次は……」

やがて訪れる、忌避^{きひ}すべき反逆の戦い。この存在達は確かにその

予兆を感じていた。

「反逆者なのは神が真理か。真まことに興味深い。だが、妾は静寂を好むのだ」

「ええ、それでいいわ。その時に、その場に相応しい者が、相応しいことをするの」

「ならば妾は傍観者として、静寂の時を待つとしよう」

イクリプスは闇に溶けるように消えていった。

「私達も、行きましょう」

「そうね」

ふわっ。

「戻りました」

「おかえりなさい」

ノスタルジアは安心したような顔を見せる。

「おお、帰って来たか。冥界はどうだった？」

シエルは寝転んだまま上を向き、フレイア達を逆さに見た。

「とても楽しかったわ。それより、何か異変は？」

「異変？ 特になかったけど、どうかしたのか？」

「神との戦いが始まるのよ」

「きゃああ！」

シルヴィアは樂園に戻るなり悲鳴を上げた。

「ハデスが消えて冥界が追放されて……」

「いや、何言ってるのか分からないぞ」

「冥界が消えて、ハデスが追放されたのよ。元々ゼウス達は、私達を良く思っていない。それで、あの力を使ってこちらの世界へ侵入しようとしているの」

「へえ……そうなのか」

「ここは、大丈夫？」

ノスタルジアは心配そうに尋ねた。

「分からないわ。だけど樂園はフレイアの創造物。神々でもそう簡

単に入れるものではないわ

「どうしよう！ 神にやられちゃっつよ！」

「私に、いい案があります」

「え、本当？」

「はい。本当ですよ」

「どうするの？」

フレイアは微笑みながら一言。

「この辺りに、お城を創りましょう」

聖者は捻じれた空間の中で笑う

こちらは神々の世界、ゼウスの宮殿。大きく、細長いテーブルに、有力な神々が集結し、話し合いをしていた。

「イーリスによれば、向こうの駒は七つ。他の気配もあつたが、姿すら持たない存在であるらしい」

上座に座っているのは神々の王ゼウス。続くように、ゼウスの兄弟である冥界の王ハデス、海洋の王ポセイドンが座っている。それ以下の存在はただ、黙って話を聞いている。

「ならば、姿を持つている者だけで十分か」

「たった七つ。本当に我らが戦うに値するのか」

「ポセイドンよ、ハデスの件を知つただろう。奴らの力は侮れん^{あな}」

「我にはそうは思えぬが……あの世界には、闇の者は居ないのか」

「おそらく、あの者は我と同じく光を嫌う。余程のことが無い限り、現れることはないだろう」

「ふんつ、世界を失わぬ限り、現れぬか」

少し小さな声で言うハデスを見て、ポセイドンは鼻で笑った。

「お前、我を侮辱するか！」

「落ち着け。敵はポセイドンではない。敵はハデスではない」

今にも喧嘩　　と言う名の殺し合いを始めそうな二人を、ゼウスが制止する。

「特に注意すべきは裏切りのフレイア、時を司る者、そしてもう一人、仮にエスプリと呼ぶ存在だ」

謎の存在、エスプリ。靈魂や知性、精神などの総称だ。何を司っているのかも分からず、謎の多い存在であることから、そう呼ばれるようになったらしい。

「そのエスプリとやらは、何を操るのだ」

「分からない。目に見えぬものを操るらしい。力に形を与えられぬほど、無力ではない様子だ」

「時か、重力か、虚無か。フレイアによれば、重力を司る者はどの世界にも存在しない。時を司る者が別に存在するとすれば、残りは「虚無」と考えるのが自然だろう。しかし闇の者が虚無であるとするれば、エスプリはまた別の力を司るか……」

ポセイドンは事前に詳しいことを知らされていない。にもかかわらず、これまでの話で大体のことを理解している。さすがはゼウスに匹敵する力を持つ存在だ。

「そうだな」

「して、その他の駒はどのようになっているのだ」

理解を更に深めようと、ゼウスに問うたポセイドン。と、そこへ。

「ゼウス様、ただいま戻りました」

窓から虹が入り込んだ。

「おお、イーリスよ。ちょうど良い所に来た。報告をしてくれ」

「はい。やはり向こうの駒は七つでした。注意すべき三つの他、二

つの駒はほぼ無力、残りの二つは元人間です」

「人間、か」

「人間とはいえ、どのような力を持っているか分からん」

「ならば、元人間という立場を利用するほかないか」

ゼウスは怪しげな笑みを浮かべる。

「例の力は確認済みか」

「ああ。おそらく出来ないことは、無いだろう」

例の力は万能。ハデスはこれだけ明るい場所に、何の問題もなく存在し続けている。存在条件が無ければ留まることの出来ないこの世界において、それは何よりの証拠であった。

「元人間があそこへ来て何年だ？」

「はい。姿の出来具合から、ちょうど百年ほどであると推定されます」

「時を戻すのか？ ……だが、百年の時を戻したところで、時間の軸が違えば効果は薄いぞ」

「我はあの世界の時を戻すとは言っていない。戻すのは、人間の世

界だ」

ゼウスは笑みを浮かべ、一同を起立させる。例の力を使うのだ。

「さあ、呼び出そうではないか。百年の時を戻すという、『真理なる夢』を」

「出でよ、純白の居城」

フレイアが天を仰ぐように両腕を広げ、唱えた。地面がうめき声を上げたかと思うと、大理石の塊がせり出し、あっという間に城が完成してしまった。

「出来ました」

「うわー、すごい！」

「最も一般的で、最も攻め落とされやすい、簡単なお城です」
「え」

シルヴィアは口がひん曲がったような、変な顔をした。

「城が落とされてからが本番よ。落としてももらえないと、面白くないわ」

「いや、普通は落とされた時点で終わりだよ……」

「私に常識なんて通用しないの。ところで、シエル。なにか変化はあった？」

シエルは意識を一か所に集め、どんな小さな気配でも逃さぬようにしている。

「お、来たぞ」

シエルの感じる範囲に、小さな揺らぎが起きた。

「え、どうしよう！ 早くお城に入ら……」

アイデア達の前で空間が歪み、黄金の輪が現れる。

「調子はどうかな」

「あ、輪廻！」

「ちょうど良かったな」

「少し早く着いたものでな、この辺りを散歩していたのだ。それで、時はあとどれほど来るのだ？」

「はい。もう、まもなくです」

「相手の偵察が入っている可能性があるから、下手に動かない方が良さそうね」

「承知した。ところで、楽園に人間が居るようだが」

「気にしなくていいわ。フレイアが呼んだの」

「あれ、もう一人いなかったっけ」

「ああ、居たな。なんか難しい奴」

「あのひとなら大丈夫よ。放っておいても自分で楽園へ着けるわ」

「イデア、相変わらずだね……」

「ふふっ。一応、招待状は送っておきましたよ」

そこへ再び、小さな揺らぎが。

「はっ……」

輪廻が慌てて力を使った。続くようにイデアも何らかの力を使い始めたようだ。

「なんだ？」

「なんか怖い……きゃあっ」

突然揺らぎが大きくなる。空が明るくなったり、暗くなったり定まらない。どうやらイデアと輪廻は、揺らいでいる何かを押さえつけようと苦戦しているようだ。

「駄目ね」

「奴らが、やったのか」

「それ以外に考えられないわ」

「……ねえ、フレイア。このひとたち、何の話してるの？」

すぐに揺らぎは収まったが、シエルは普段とはどこが違う、不思議な気配を感じ取っていた。

「時間がやられたんだな」

「え？」

「例の力によって、現の時が巻き戻されてしまったようです」

「そんな……輪廻でも敵わなかったの？」

「輪廻さんは元々、戦いをするのに向いている存在ではありません。」

そのため、このようなことになった場合に阻止をするのは、とても難しいことです。しかし、存在を維持しようとする力には、どんな力も敵いません。例の力を使ったとしても、輪廻さん自体を滅すことは出来ないのです」

「とりあえず……輪廻が死ぬことはない、って言う事でいいんだよね？」

「はい」

フレイアは微笑みながら答えた。

「これはもう、存在を滅しても良いくらいね」

「そうか。ならば、我も戦ってみよう」

「え、輪廻って魔法使えるのか？」

「輪廻の戦いつて……」

シルヴィアの頭の中には、普段は背中に付けている輪廻の象徴を持ち、豪快に振り回しながら戦う輪廻の姿があった。

「さすがに、それはないよね」

「輪廻は空間を操れるのよ。時の流れている空間に限るけど」

「へえ、見たい！」

「そうだな……シエル、少々揺れるが、問題はないか」

「たぶん大丈夫だと思うぞ」

輪廻は両手の指先を合わせ、目を閉じる。と同時に、背中の象徴も回転を始めた。

「滅せよ」

一瞬だった。輪廻が言葉を発し、目を開いた瞬間、その空間が無かったこと』になったのだ。

「え……？　ねえ、これのどこが戦うのに向いてないの？　完全に戦うための力だと思うんだけど」

「それが上手く行かないんだよな！。俺には分かるぞ」

「時は扱いが難しいのよ。今のように集中をすれば問題はないけれど、少しでも下手をしたら、私だって消されてしまっわ」

「アイデアでも消えちゃう……」

もし本当にアイデアが消えたらどうなるのか、シルヴィアは想像し、戦慄した。

「では、私はベルクフリートで待機しているわ
「なにそれ？」

「あそこに見える、一番頑丈で背の高い部分です。お城の主は、
この第四層で待機をするのですよ」

「へえ……って、私も戦うの？」

「そうよ」

「アイデアも戦ってよ！」

「それは無理よ。私がやったら、力加減を間違えて、世界ごとあなたを消してしまうかもしれないもの」

「我も可能な限りの援護はするが、あまり派手なことは出来ないぞ」
「俺、気配を察知する係な」

「じゃあ、そういうことだから、頑張るのよ」

アイデアが城内に入ると同時に、城門は固く閉ざされた。

「輪廻とかフレイアはいいかもしれないけど……。私は魔法も使えないし、本当に何も出来ないよ？」

「大丈夫ですよ。シルヴィアさんは魔法を使わなくて良いので、敵の気を引きつけてください」

そう言って笑顔を見せるフレイアであった。

「ははは……成功だ」

ゼウスは満足げに笑う。

「それで、この後はどうするのだ？」

ゼウスの企みが今一つ理解できていない様子の子のハデス。

「まあ、慌てるな。イーリス、あれを」

「はい。用意してあります」

「ならば、後は分かるな？」

「もちろんです。例の場所に置いて来ます」

イーリスは再び虹となって、窓から出て行った。

「これで元人間は隔離した。あとはあの世界へ赴き、注意すべき三つの駒を殺せば良いだけだ」

「ならば、行くか」

そう言つて、矛を手取るポセイドン。

「そうだな。では、始めるぞ」

いよいよ、その世界への扉が開かれる

妖星来たりて乱舞する

「……来るわよ」

その声と共に、シルヴィアの隣からアイデアが現れた。

「きゃあ！　なんで居るの！」

「これは私の半身。私と会話をするためのものだと思えばいいわ」

「つまり、結局力は貸してくれないって言う……」

「うわ、やばい！」

シエルが突然、大声を出した。

「随分と集まったのね」

「え、え？　どのくらい居るの？」

「大体……十五人くらいは居るな」

「加勢も考慮に入れば、もう少し多くなるでしょうね」

「……このお城、大丈夫なの？」

「あなた次第よ」

アイデアの浮かべたその笑みに、シルヴィアは深く絶望した。

「終わった……私の人生終わった」

「人じゃないけどな」

「神なる盾はお城に使うので、皆さんは聖域の魔法で頑張ってください」

さい

「おう」

「承知した」

「……で、神は今どの辺に居るの？」

「もう来ているわ」

アイデアは一步、後ろへ下がった。大きな鎌が首を掠める。

「姿隠しの兜ね」

「なぜ分かった」

どこからか声がする。

「気配が無いという事が気配なのよ」

鎌はすぐに消え、再び敵の居場所が掴めなくなる。

「刹那の煌めきよ、私に光の刃を」

無数の光の剣が現れ、フレイアの頭上で待機する。

「タナトス」

「お行きなさい」

鎌が現れたその瞬間を狙い、フレイアは剣に指示を出した。

「滅せよ」

見えない敵に向かって飛んでゆく光の剣。敵は鎌を構え、振り上げる。光の剣はあっさり消されてしまった。

「その程度の攻撃が我に効くとも？」

「フレイアの魔法を消したのは、本当にその鎌か？」

輪廻は笑みを浮かべた。

「……今がその時」

「なっ」

隠れていた存在の姿があらわになる。姿隠しの兜がハデスの頭から離れたのだ。

「お前がフレイアの魔法を滅す前に、我の力で移動させたのだ。未来の、この場所に」

「時を司る者……やはり、下手には動けぬか」

ハデスの奇襲は失敗した。しかしその顔にはまだ余裕が見える。

「輪廻、上だ！」

強い雷が輪廻をめがけて落下する。

「……遅い」

輪廻は球状の光に包まれていた。更にそれを保護するように、象徴が二つ、交差するように現れている。雷は輪廻に触れる前に、無かったことにされた。

「やっぱり、輪廻の象徴って取り外し可能だったんだ……」

後ろの方で縮こまっていたシルヴィアが呟く。

「さすがは時を司る者。雷など、目に余るほどの遅さか」

「ゼウス……もう、あなたの好きにはさせません」

「裏切りのフレリアよ。もうお前に救済の余地はない。どのようにしてでもお前を殺す。覚悟をすることだな」

気が付けば、目の前には大勢の神々が集まっていた。ゼウスやハデスのような有力な者も、あまり見慣れない者も居る。

「ポセイドンよ、雨を」

「あい分かった」

待機している神々の中から、その存在が何歩か前へ出てくる。銀の軽い鎧に、威厳を感じさせる壮年の顔立ち。やはりハデスと同様、ゼウスに似たような顔をしていた。

「この程度で良いだろう」

ポセイドンが矛を天にかざすと、優しい霧のような雨が降り始める。

「厄介なのが来るわよ」

城門に寄り掛かっていたアイデアの半身が言う。

「シルヴィアさん、レディアントの理で夜にしてください」

雨はすぐにやみ、辺りには湿った空気が残った。

「え……う、うん、分かった!」

「日を出さぬようにしているようだが……無駄だ」

辺りが暗くなり、空は夜へと変わる。大きな青い月が現れると、

その光は先ほどの雨の跡に拡散され、虹を創った。

「あ、月虹^{げっこう}。楽園で見たのと同じだ」

「でしょうね」

「ただいま参りました」

「虹の女神、イーリス……」

フレリアはついに目の当たりにした。動くたびに虹の残像を残す、その存在を。ルーンの秘密をゼウスの元へ運んだ、その存在を。

「イーリスよ、夜となったが闇の者は現れたか」

夜になったことにより、冥界を崩したあの存在が現れるのを危惧^{きく}しているゼウス。

「いえ、情報にあるような黒い気配は感じません」

「おそらく闇の者にとって、この程度の闇は光のようなもの。真の闇は、真の闇にしか存在できないのだろう」

ポセイドンが独自の推察を述べた。

「だとすれば都合が良い。さっさと邪魔な駒を片付けてしまおう」
ハデスは冥界のことで気が収まらないらしい。早く敵を斬りたくて仕方がないといった様子だ。

「シエル、シルヴィア。あなた達も援護をしなさい」

普段ならば、アイデアも援護してよ！ と言うところだろうが、さすがのシルヴィアも今はそれどころではないと理解している。神々が一斉に魔法を放とうとしているのだ。

「でも、どうやって？」

「あなたは光を落とせばいい。シエルは風を起こせばいい。あとはフレイアと輪廻がなんとかするわ」

そう言われ、シエルとシルヴィアは集中を始める。

「我に従いし風の者よ。今ここに集い、嵐となれ。テンペスト」
ポセイドンが竜巻の魔法を放つ。竜巻は地面を抉り、巻き上げながら、一直線に城へ向かう。

「うわ、風が出ない！」

「きゃああ、早くしてよ！」

竜巻はさらに勢いを増し、城門を丸飲み出来るほどの大きさとなる。いよいよ竜巻はシエル達の目の前に迫る。

「……こうか！」

シエルの放った風は真空の刃となり、ポセイドンの竜巻を切った。が、勢いは落ちたものの、竜巻はまだ消えていなかった。

「出でよ、岩石の防壁」

フレイアの創造により、地面から大きな岩の壁がせり出す。同時に、イーリスが何か祈りのような事を始めた。

「イーリスは何を……」

せり出した壁が視界を遮るまでの僅かな時間。その瞬間にイーリスが不審な行動を始めたのを、アイデアはしっかりと見ていた。

「今だ、行け！」

ゼウスの掛け声と共に、神々が一斉に魔法を放つ。『テンペスト』により亀裂の入った防壁に、比較的大きな炎の塊が当てられる。頭上から雷が襲い、フレリアの聖域がなんとか防いだ。続くように、小さな魔法がいくつも壁にひびを入れる。

「ふん、この程度の壁……」

ポセイドンは矛の柄で地面を突く。防壁の下から大きな衝撃が走り、砕け散った岩石が上空へ舞い上がった。

「きゃああ、壁が！」

「降り注げ、岩石の雨よ」

ハデスが暗黒の塊を創り、舞い上がった岩を叩き落とす。追撃を加えようと、ゼウスが雷霆を構える。

「時よ」

輪廻が岩に流れている時を戻した。岩には反対方向の力が発生し、先ほどとは反対の方向へ飛んでゆく。

「裁きの雷を」

燃え盛る蛇が天に昇った。それを見たイデアは指示を出す。

「シルヴィア、光を」

「うん！」

暗雲が妖しい光を放ち、裁きの雷が 落ちる。

「えい！」

シルヴィア達の前に光の壁が発生した。雷は光の壁を通ることにより、ある程度軽減する。

「いてっ」

「聖域とシルヴィアさんの光でも、防ぎ切るのは困難です」

「じゃあ……」

「避けてください」

そう笑顔で言うフレリアに対し、

「無理だよ！」

声を揃えて言う、例の二人であった。

「まさか……」

他の神々が一斉に攻撃をしている間も、イーリスは一人、祈りのようなものを捧げていた。そして今、イーリスはその奇妙な行動を終え、城を見ている。イデアは直感した。

「来るわよ」

突然、城を守っていた神なる盾が揺らぐ。

「ゼウス様、出来ました」

「イーリスよ、良くやった」

「え、なに？」

動揺するシルヴィア。

「神なる盾が、その座から引きずり落とされたのよ。今の盾は聖域と同程度」

イデアの半身が盾に触れ、その反応によって程度を把握したらしい。

「神なる盾が神なる盾ではなくなったという事は」

「神なる槍が……」

フレイアは恐怖した。

「正解だ」

ゼウスの声と同時に、黄金の槍が光の壁と聖域を突き抜け、城を守る盾を砕いた。

「仕方ないわね、一度城へ入りましょう。門と壁には特別な封がしてあるから、簡単には崩せないわ。輪廻」

「承知した。シエル、シルヴィア。用意が出来るまで耐えてくれ」

「させるか」

その声と共にハデスの姿が消える。シエルは風の動きを捉え、見えない敵の動きを感じる。

「来たぞ！」

「えい！」

「く、光が……」

ハデスは光の壁に潰され、思わず後ろへ退いた。

「やった！」

「小癩こじやくな。行け」

ゼウスの命令に従い、一斉に魔法を放つ神々。しかし彼らの魔法では、聖域の魔法には及ばなかった。

「諦めるな、続ける」

小さなものが弾けるような音が聞こえる。他の神々が攻撃をしている間に、ゼウスは再びルーンを書きはじめている。

「きゃああ、また来ちゃう！」

「輪廻、まだかよ！」

「もう少しだ」

輪廻は短く答えた。

「滅せよ」

光の壁が消えた僅かな隙に、ハデスは鎌を振る。

「させません」

タナトスが聖域を滅す前に、光の刃がタナトスを弾く。

「この程度、効かぬわ！」

再び光の壁が出る前に、と、タナトスを構え直したハデスの頭上に雷が落ちた。

「おの、れ、時を司る者……」

その雷は紛れもなくゼウスのもの。先ほどの奇襲で輪廻が防いだものだった。雷に打たれたハデスは地に膝を付け、痙攣けいれんを起こしていた。

「兄弟だと痙攣を起こす程度で済むのね。消えればよかったのに」
不敵な笑みを浮かべるイデア。

「ふん、無駄口を叩けるのも、今の、うちだ」

「貫け」

見れば神なる槍が完成し、こちらへ向かっていた。フレイアは可能な限り聖域の純度を高める。

「フレイア、頑張つて！」

神なる槍と聖域がぶつかり合う。神なる槍は確実に聖域を削り、

内部へ入り込もうとする。

「打ち砕け」

ゼウスの言葉に反応するように、神なる槍の力が増す。そしてとうとう聖域には亀裂が走り……

「きゃあああ！」

どすっ。

神なる槍は、フレイア達が消えた跡に刺さっていた。

二つの月と太陰の都に

そのころ、楽園では。

「戦いの音が聞こえる……」

ノスタルジアは心配そうな顔をしていた。

「まさか、こちらの世界でも戦いを見ることになるとは」

「はっ」

「君がノスタルジアか」

そこへ、ある存在が現れた。どのような存在も抜けることが出来ないと言われていた、あの深い森を抜け、かつノスタルジアの名を知る存在。その存在は安らかな笑みを見せながら、泉の傍らに座るノスタルジアへ近づく。

「……あなたは？」

「私はサピエンティア。英知を司る者だ」

「英知……。よろしくね」

サピエンティアは優しく頷く。

「君も現^まから来たのだろう？」

「ええ、そうよ。私はフレイアに導いてもらったの。あのひとは手伝っただけだって言うけど。あなたは？」

ノスタルジアは途中に笑みを含ませながら言った。

「私は、イデアに」

「へえ……。あのひとも珍しいことをするのね。人間になんて、興味はないと思ってた」

「ふふ、彼女は昔からそうだ。我々の智の範囲を超えていて、何を考えているのか見当すらつかない」

「そうね。私達もだいが、人間の智を超えてしまったのに」

「ここに来て、いろいろなことを知ったな」

「ええ。人間だった頃に信じてた天国や地獄なんて、本当は存在しないんだって、分かってしまった」

ノスタルジアは泉に映る、現の人間達を見て言う。

「だけど、行き場を亡くしてしまう人たちを見てると、天国はあって欲しいって、思ってしまうの。もし天国や地獄が、人間の創り出す夢であるというなら、私は彼らの為に、天国を創りたい」

「相手の痛みを知り、取り除いてやるうとする……それは人間らしい、ごく当たり前な気持ちだと、私は思うよ」

ふと、泉の方に目をやったサピエンティアが気づく。

「おや、どこか現の様子がおかしくはないか？」

そう言われ、泉に映る風景を良く見てみるノスタルジア。

「確かに、少し昔の感じに戻っているような気は……」

風景が変わり、泉にはある村の様子が映し出された。小さなその村には不釣り合いなほど、大勢の騎士が行き交っているのが見える。

「この村！」

ノスタルジアは悲鳴にも似た声を上げた。

「どうした、君の村か？」

「ええ、この村は占いと魔術で守られてきたの。だから騎士なんて居るはずがないわ」

「そうか……」

サピエンティアは騎士達に目を戻す。

「この騎士が持っている旗、まさか」

「もしかして、あなたの」

「ああ。私の国は戦いをしないと決めていたのだが……」

サピエンティアの記憶によぎったのは、戦いをしないと宣言をしているにもかかわらず、卑劣な作戦ばかりを考案し、戦いをするよう提言し続けてきた側近の男。

「こちらへ来てから、百年という時が現の様子を見る間もなく経ってしまっただが……私が死んだ後、もしあのような意地の悪い男が王になっていたとしたら……」

「跡継ぎは？ 子供は居なかったの？」

「私はあの国を捨てようと思っていた。だから跡継ぎは拒んでいた

し、その場合に跡を継ぐはずの遠い血縁の者達も、すでにこの世には居なかった。私の国は言ってしまうえば、ただの大きな村の集まりであったはずだ。もしこれが、私が死んですぐのことであると言うなら」

「多くの者が、あなたの死を……」

サピエンティアは頷く。

「きつと準備は整っていて、あとは私の死を待つだけだったのだろう。跡継ぎの居ない私が死ねば、後を継ぐのは必然的に最も王の近くに居た者になるはずだ。そうか、だからあの男だけは跡継ぎの話をしなかったのか！ 何という事だ、恐ろしい……私は最後の最後に、これほどまでに愚かしい事をしてしまっていたのか……」

サピエンティアは拳を額に当て、肩を落とした。

「まだよ。これはきつと、時が戻されてるっていう事でしょう？
なら、まだ始まったばかりよ」

「ノスタルジア……」

「止めに、行けるかしら」

ノスタルジアは泉に顔を寄せ、問いかけた。すると、泉はそれに答えるように小さな水の音を立て、大きな波紋を広げた。

「……いいのね」

「私も、私も行かせてもらいたい、大丈夫か」

同じようにサピエンティアも問いかけた。泉は再び反応した。

「ああ、よかった。ノスタルジア、私は一度城へ行く。私がああ男の陰謀を阻止するまで、君は村をなんとかして守り抜いてくれ」

「大丈夫よ、まかせて」

「ありがとう」

「ではまた」

「その時まで」

「あの馬鹿な国王が死んでくれたおかげで、ようやく計画を実行に移せる」

「これだけ大きな国を、ただの村で終わらせようなど、愚か極まりない行為であるな」

ある城の一室。今は亡き国王に仕えていた男と、かつて国王の手の中にあつた領地の主が話をしていた。

「全くだ。なぜあのような男が王になれたのか、不思議なくらいだな。ところで、兵の方はどうだ？」

「ああ、うまくいっている。ベルンハルトがなかなか良い兵を用意してくれるものでな」

「あの辺りは血の気の多い者が群れていると聞く。こちらが宝飾の一つでも出せば……」

下品な笑みを浮かべる両者。

「例の村はどうするつもりであるか？」

「あんな小汚い村、焼き払ってしまえ。いや、待て。あの村を拠点として進めば攻略がしやすくなるか……」

「その辺りの判断はあなたに任せよう。他に邪魔な者は居ないか。ヴェルダット家はどうか？」

「あそこは疫病の対応に追われているそうだ。その他、いまだに国王を妄信している家は既に衰退の兆しを見せている。つまり」

「我らの時代が来た、か」

どこか分からない、暗い部屋の中。一人の老婆が水晶を覗き、呟いていた。

「また未来が変わった。二番目の無い一つなるものが二つ見える……」

…二つの月が重なりし時、全てが終わる」

聖女の祈りと血の涙

「私の姿は人間には見えないのね。……良かった」

騎士たちの入り乱れる中、ノスタルジアは状況を把握しようと試みていた。

「入り口の封は消えてなかったのに……。大自然よ、あなたの記憶を私に見せて。この村で何があったのかを知りたいの」

ノスタルジアの意識は過去へと移動する。

そう遠くない過去。ある男が研究用の石を採取しに家を出た。この村に住む錬金術師だ。

「全てのものには、完全なるものを目指す性質があるはず……」

錬金術は自然の状態では不完全な、あるいは未成熟の状態にあるものを、完全なものに導くことを目的としており、錬金術師達は、全てのものには完全なるものを目指す性質があると考えていた。

「ならば、不純物の存在が分かりやすいものが良いか」

もちろん人間にもそれを目指す性質がある。しかし、現には卑しい者と高貴な者、病気の者と健康な者などが複雑に入り混じって存在している。それは物質と同様に、ものが出来る際に何らかの不純物が混じったり、構成の比率が狂ってしまったり、あるいは十分に熟す前に形になってしまったためであると、彼らは考えているらしい。そこで彼らは、自然が長い時間をかけて行う『成熟』という作業を、錬金術によって短時間のうちに再現しようと試みた。これが確実なものとなれば、どんな病でも治すことが出来る。争いや罪は無くなり、完全な知識と徳を獲得し、完全なる人間になれる。物質の錬金は、いわばその段階の一手手前であるといえよう。

「おお、これは珍しい。今度はこれを使おう」

男が手にしたのは、やや赤みがかったような薄灰色の石だった。早速持ち帰り、実験に使うようだ。

「第一段階、不純物の炙り出し」

男は既存の書物に自分の研究結果を書き足したものを見ながら、得体の知れない液体やら植物やらを準備してゆく。火にかけられている釜には水が張られており、中では先ほどの石が動き回っていた。「よし。第二段階、不純物の除去」

そこに謎の植物を投入し、しばらく待つ。すると煮えたぎっている水面に、灰色をした粒状のものが浮かび始める。それを確認した男は、すぐさま得体の知れない液体を入れる。すると白い煙が発生し、激しく天井にぶつかりながら部屋に充満し始めた。

「ごほつ、ごほつ」

部屋が完全に白くなる前に男は窓を開け、換気をした。反応は既に終わっており、煙が外に出ていくにつれ、徐々に視界が良くなつてゆく。

「おお、これは……」

釜の中にあつたのは赤く透き通る石であつた。男は道具を使い、石をそつとすくい上げる。

《願いを……》

「うわっ！」

男は思わず石を落としそうになる。

「な、なんだ？」

《願いを、叶えよう……お前の、願いを》

その声は石から、男の心に直接語り掛けているらしい。

「願い……」

《そうだ。欲しいものは何か？ 金か、力か、名誉か》

「いや、そんなものはいい。私はここで研究が出来れば……そうだ、この村を、良い村にしてくれ」

《いいだろう、叶えよう……》

ノスタルジアの意識はそこで途絶えた。

「あの石、絶対に現まのものではないわ。きっと神の仕業ね」

村人たちは家に籠り、そつと外の様子をうかがっている。血の気の多そうな騎士達だが、暴れているような様子はない。どうやら上の者の指示を待っているようだ。ならば今のうちに、と村人は揃って魔術の準備を始めた。

「何だ？ この声は」

騎士達の会話を遮り、耳に入り込む奇怪な言葉。村の者が一齐に呪文を唱え始めたのだ。

「家を破壊して阻止しろ。抵抗するようなら殺しても構わん」

上の者がそう指示する声を聞き、ノスタルジアは慌てる。

「どうしましょう……お願い、みんなを守って」

ノスタルジアは村中の家に封がされるのを感じた。祈りが通じたらしい。その直後、騎士達は扉への攻撃を開始する。

「今のうちに、あの石を壊さないと。確か錬金術師の家は……あそこだわ」

錬金術師の家に向かうノスタルジア。早速扉を開け、中に入ろうとするのだが……

「きゃっ」

扉の封はノスタルジアをも敵とみなす。なぜなら、祈りとは自分を含まない無償の愛。魔法などとは違い、術者が例外になるというようなことはないのだ。

「入るには封を……でも、今はそれどころじゃないわ」

騎士達の、扉への攻撃はより一層激しくなる。通常ならば二人程度で破れるような扉が何人で叩いてもびくともしないのだから、当然の事だろう。

仮に消さなかったとしても、この封はいつまでもつのか。そう考え、不安を覚えるノスタルジア。と、その時。風が変わり、水の気配を感じる。

「雨の気配……」

思った通り、村には水滴が落ち始めた。この感じからすると、短い間に激しく振る種類の雨だろう。そうしている間にも、水滴は叩

きつけるような雨に変わる。

「地に眠る植物よ。水を源に、力を貸して」

地面が振動し、何かが這うような音が聞こえる。村中に広がる異様な気配を感じ、騎士達も思わず固まってしまう。

「今がその時よ」

地面から飛び出ししてきたのは大きな植物の根であった。その光景は騎士たちの士気を下げるには十分であったらしい。

「退くな、戦え！」

こうなると上の者の指示も届かない。騎士達は剣を落とす、鎧を脱ぎながら逃げてしまった。

「くそ、寄せ集めなどこの程度か」

上の者は動じていない素振りを見せながらも、早足で村を出て行く。一時撤退だ。

「これで封を消せるわね。……ありがとう、もう十分よ」

ノスタルジアは落ち着いて封を解き、敵が戻ってこないことを確認すると、植物の根も大地に戻した。そしてようやく、錬金術師の家の扉を開けた。

「これが……」

錬金術師は部屋の真ん中で、倒れこむように眠っていた。理由は分かる。その傍らに置いてある赤い石だ。おそらくこの石が彼に夢を見せているのだろう。

《願いを……願いを、叶えよう》

石を手にする、ノスタルジアの心にも石の音が響く。

「あなたは何？ この世のものではないわね」

《我は血だ。人間が苦しみながら流した血と涙の結晶。そして我は人間の願いを叶え、欲を満たす奇跡の結晶》

「いいえ。あなたは彼の本当の願いを叶えていないわ。彼はこんなものを望んではいなかった」

《我はお前達の敵でも、味方でもない。我は私の視点で『良い村』にしただけだ》

「その結果が、私達の敵にとって都合の『良い村』だったわけね。血の涙は、血しか生まないのね」

《お前はどうか。叶えたい願いはあるか、満たしたい欲はあるか》
その問いかけに、ノスタルジアは少し止まった。そして何かを考
えるように、口を開く。

「……どんなものでも、叶えられる？」

《当然だ。我はそのように創られているのだから》

「なら、一つだけあるわ」

《所詮は人間、欲には勝てぬか……いいだろう。叶えよう、お前の
願いを》

ノスタルジアは一呼吸おいて、願いを言った。

「血の涙よ、消えなさい。そしてその姿を、二度と現に見せないで」
石は光を放ち始める。『どんな願いでも叶える』とは、どんな願
いでも叶えなければならぬという事だ。血の涙は自身の力によつ
て拘束されていた。そして今、自らに滅ぼされる運命を創り出して
しまったのだ。

《我を、殺すか……》

「そうよ。あなたが消えることが私の願い、私の欲。さあ早く、叶
えなさい」

《愚かな、人間、よ》

「……もう人間じゃないわ」
村はすぐに静かになった。

欲望の石は居場所を失う

「阻止するとは言ったものの、まずは何をすれば良いのか……」

サピエンティアは、自身が人間としての最期を迎えたベッドの上で目を開けた。素早く起き上がり、辺りを確認する。近くに人の気配はない。部屋の物にもまだ手は付けられていない。周りの状況を確認し、そつと部屋を出るサピエンティア。ひとまず城内の様子を見て回ろうと、一階へ降りる。

「人の気配だ」

壁一面が鏡になっている大きな空間、『調和の間』にさしかかった時、サピエンティアは人の気配を感じ、足を止めた。

「あれは……？」

奥の方に二つの人影がある。どうやら話をしているらしいのだが、この場所はとても広く、音が響かないような構造になっているため、比較的大きな声でなければ聞き取れない。当然、その二人がそれほど大きな声で会話をするはずもない。サピエンティアはやむを得ず、柱の陰に隠れながら彼らに接近することにした。

まず一つ。一番手前にある柱へと移る。

「……」

「……」

まだまだ声は聞こえない。サピエンティアは静かに、次の柱へと走る。

「……が、あの村で」

「やはり……だったか」

二人の男の声が聞こえた。いくつかの単語が微かに聞き取れる。

……まだ不十分だ。

「よし、もう一度」

サピエンティアが次の柱へ移ろうと、飛び出したその時。

「はっ」

片方の男がこちらを見た。無駄なことだと知ってはいるが、思わずしゃがみ、身を小さくしてしまうサピエンティア。

「おや……?」

男は確実にこちらを見ていた。しかしその男は何事もなかったかのように顔を戻し、話を続けている。と、ここで、サピエンティアは鏡に自身の姿が映っていないことに気付く。

「私の器は人間には見えないのか。安心した」

器にも次元という概念がある。例えば人間の名前にも使われるよ
うな、シルヴィアやシエルという器は人間の次元にとても近い。そ
のため前述の二名は、気配を消していなければ人間に気付かれてし
まう危険性がある。対して、英知そのものを表す『サピエンティア』
という器は非常に真理に近いため、人間の目に映ることはない。

「想定範囲内だ。ならば土地自体に魔術がかかっている可能性がある
あるな。やはり、一度焼き払うべきか」

隠れる必要がないと知ったサピエンティアは、堂々と二人の前ま
で歩いてゆく。

「イオニアス……」

サピエンティアの嫌な想像は現実となってしまうた。裏切り者は
一人ではない。

「しかし、焼き払ってすぐそこを使うのでは、悪臭に困らないか」

「大した問題ではないだろう。もともと腐敗したような場所に居た
者たちだ。我々とは感覚が違う」

そう話しているのは、かつてサピエンティアの側近に位置してい
た、シャルルという名の男。

「それに、愚者は愚者に相応しく、賢者の声に従えば良い。……こ
れを」

シャルルはポケットから何かを取り出し、イオニアスに手渡した。

「これはまた随分と粗末な」

「物の価値も分からない愚者には、この程度で十分だろう」

イオニアスが受け取ったのは、小さな宝石があしらわれた金属の

腕輪。これを褒美として与えることを条件に兵を集めるという事だろうが、価値の分かる者からしてみれば、これが褒美に値するような物ではないということは明らかだ。安物の宝飾品を扱う商人でも、まず買い取らないだろう。

「あの男、こんなもので人の命を買っているのか」

サピエンティアは憤怒と同時に不安を覚えた。この城にある宝物庫には、代々受け継がれてきた宝が山ほどあるはずだ。安物で兵が釣れなくなれば、今度は宝物庫の物を使うに違いない。

「宝物庫を守らなければ……しかし」

不運なことに、宝物庫はこの『調和の間』にある。鏡になっている壁の一部が、特殊な道具を使うことで開閉する仕組みになっているのだ。そして代々、宝物庫の管理は王の側近が行うことになっている。

「何か方法は無いか……」

思考に行き詰ったサピエンティア。と、その時。

「おおっ」

サピエンティアは体勢を崩した。何気なく鏡に伸ばした手が、鏡をすり抜けてしまったのだ。

「そうか、私は存在ではあるが物質ではない。ということは、物質が受けるはずの影響は受けない……私の体が壁を抜けたように、地面にも沈んでゆくことがないのは、きつと重力を受けていないからか……おっと、こんなことを考えている場合ではないな」

思考を中断し、辺りを見してみる。部屋中、至る所に金の装飾が施されている。天井はそれ自体が大きな額縁となっており、いくつもの絵画が高貴な佇まいで鎮座している。

「不思議だ。明かりが無いのに物が見える。私の目はもう、目ではないのか」

サピエンティアは再び湧きあがる思考の世界を押さえつけ、久しぶりに感じる宝物庫の空気を吸った。

「それにしても皮肉なことだな。今はここに描かれている、神々と

戦っているのだから」

天井のキャンバスには、神々が人間の世界へ降臨し、光と繁栄を与える様子が描かれていた。目を細めるサピエンティア。そしてふと感じる魔の気配。

「ノスタルジアか？ いや、物質からの気配だ」

宝物庫の中に意識を充満させる。すると、側にある金の杯の中に、紅い気配が入っているのを感じた。

「なんて強い力だ……これは何なのだろうか」

《珍しい……》

石がサピエンティアの心に話しかけた。

「何だ」

《我が一度願いを叶えた存在と、再び出会う事となるとは》

「願い？ 私はお前に願いを言った覚えはないぞ」

《言わなくとも、溢れる欲が我には分かる。お前はあの時、こう願っていた。この国を捨てたい、と》

一瞬、サピエンティアの思考が止まった。

《願いを叶えた今、私の役目は終わった。願いを別の願いで打ち消すことは出来ない。この国は裏切り者に利用され、用が済めば捨てられるだろう。お前は王の居ない王国の惨めな姿を、ただ見ていることしか出来ないのだ》

「……それは、どういうことだ？」

石は何も答えなかった。

「なぜ私の願いを叶えた？ 同じように他の人間の願いも叶えたのか？ ……答えよ！」

それからサピエンティアは声をかけ続けたが、再び石の声が聞こえることはなかった。

「この力が利用されたら大変だ。なんとかしてこの石を壊せないだろうか……そうだ」

そう言っただけサピエンティアは意識を切り替える。ふわっ。

サピエンティアが移動したのは、生前、様々な智を与えてくれた書齋。

「ふふ、肉体が無いと、このような時に助かる」

真理は『意識』と似ている。真理が器を持っているというのは、いわば一点に意識を集中しているような状態である。この器というものは非常に難しいもので、一度与えられると特殊な方法でなければ簡単に抜け出すことが出来ないうえに、どこへ移動しても付いて来てしまうという特性がある。

これを利用し、真理と呼ばれる存在は意識を移動する、つまり『先ほどとは違うことを考える』という行為と同じような感覚で、空間を移動することが出来るのだ。もちろん、自分という真理の存在する場所であり、なおかつ自分の知っている場所でなければ移動は不可能だが。

「確かあれは……」

サピエンティアは棚の中から一冊の本を見つけ出し、取り出そうとする。が、それが叶うことはなかった。

「まさか」

人間の目に映らないという事は、現からかけ離れた存在であるということ。それはつまり現に干渉出来ない、物に触れることが出来ないということだ。これは先ほどの調和の間でも証明されたことである。

「はっ、これは……」

サピエンティアは何度も本に手を伸ばす。しかしそれは本をすり抜け、虚しく空を掴むだけであった。

「く……こんな場所で時間をかけている暇などないのに……」

こうしている間にも時間は流れ続ける。いつまでも時間をかけていれば、あの男達が兵を集め、よその国に宣戦布告を、いや、あるいはすでに行われているかもしれない。どちらにしても、良い展開は望めなくなるだろう。

「おおっ」

途方に暮れそうになっていたその時、ふと体の周りに異変を感じた。サピエンティアは自身の手の甲を見ている。輪郭の線がはつきりとしていて、自身が存在することにより、その周りの空間を歪めているのが分かる。これは現にある存在がもつ特性であり、人間であった頃のサピエンティアをたびたび思考の海へと誘った、『物質の存在』と呼ばれる現象の一つであった。

「私は一時的に人間に近づいたのか。これはきっと、ノスタルジアの力だな。いいタイミングだ」

こうしてサピエンティアは書物に触れることが出来た。ようやく手に取ったそれは、異国の言葉で書かれた特殊な書物であるらしい。「言葉、魂、力……」

かつての知識を必死に絞りだし、異国の言葉を解読してゆく。「そうか、このように」

素早く内容を理解し、書物を元の場所に戻す。すると空間の歪みはすぐに無くなり、サピエンティアは本来の姿に戻った。新しい何かを得たサピエンティアは一呼吸ののち、元の宝物庫へ戻る。

「欲望の石よ……」

サピエンティアは改めてその石と対峙する。

「お前は夢の者に創られたのだろう。だがこちらは現の世界。お前の居るべき場所ではない」

石は相変わらず、返事をしない。

「現に魔法を与えるもの、奇跡を与えるものが存在して良いと思うか」

《……頼るものなしに生きていける程、人間は強くはないだろう》
再びあの声が聞こえる。石はようやく返事をしたかと思えば、今度は小さく震えはじめた。サピエンティアの言葉により、そこに石が存在しているという現象が破られそうになっているのだ。

「魔法は自分が作り出すもの。奇跡は自分が起こすもの。お前のよ
うな、大自然の理しきりを外れた存在が与えて良いものではない」

《神々に救いを乞うような存在が、奇跡を起こすなどと……笑わせ
てくれる》

「残念だが、起こせるのだよ。私がそうであったように、彼女がそ
うであったように。ここにお前の居場所はない。あるべき場所へ還
れ。お前は自らの役目を果たせないまま消えるのだ」

《愚かな人間よ。後悔するがよい》

紅い石はそう言い残すと、静かにその存在を失った。

「この宝物庫は代々受け継がれてきた繁栄の象徴。国を裏切る者に
汚されるべきではない。これよりここは聖域となる。卑しい心の持
ち主は、この扉を開けることも叶わないだろう」

空間が反応をし、扉に封がされる。

「さて、いよいよ本番か」

ふわっ。

愚者は凍りついた時と共に

「そうか。それは申し訳のないことをした。すぐに代わりを用意しよう」

かつて国王が使っていた高級な部屋から声が聞こえる。先ほどの二人に加え、後から来た男が一人。向かい合うように設置されたソファの一方に座るのは、今回の首謀者であり、王の側近であった男、シャルル。向かい合うように座るのは、兵の動きを担当しているイオニアス、彼らに兵を提供しているベルンハルトだ。

「やはり、あのような褒美では無理があるのではないか？」

イオニアスは比較的つり合いを重視する男であるらしい。兵の活躍が芳しくないのは褒美のせいだと指摘した。

「あのような者に価値のあるものを渡すのは少々惜しいが……多少の犠牲は付き物か」

シャルルは席を立つとある物を取ってくる。宝物庫を開ける『鍵』だ。そして丁度よく、この場に移動して来たサピエンティア。

「イオニアスだけでなく、ベルンハルトまで……どおりで兵の用意が早いわけだ」

「では、行くとするか」

先に部屋を出るシャルル。それに続く二人とサピエンティア。

「この城にはどのような宝飾が眠っているのか？」

「私も久しぶりに入るものだからな。一体どのような餌が転がっているやら……」

相変わらずな様子 of シャルル。それにはイオニアスも半ばあきれた様子だ。一方ベルンハルトは黙って後ろを付いてきている。

「ここだ」

間もなく調和の間に着く一同。壁一面の鏡と、隠された宝物庫への入り口。そして柱の陰には招かれざる客が。

「ここに入り口が隠されているのであるか」

「その通り。一見ただの鏡に見えるが、これを使えば……」

興味深そうに鏡を見ているイオニアス。その横から、シャルルは先の曲がった棒を取り出し、鏡の繋ぎ目に差し込んだ。

「おお、なんと」

イオニアスは期待を膨らませる。鏡は重い音を立て、ゆっくりとその角度を変えた。

「私の力では不完全だったか……」

開かれる扉を見て、サピエンティアは残念そうな声を漏らした。

宝物庫への入り口が開き、庫内に光が射す。シャルルは明かりを用意し、中へ入ろうとする。と同時に、それを待っていた者が柱の陰より飛び出した。

「シャルル、危ない！」

「んっ」

槍による一撃が時を凍らせる。左肩を押さえ、崩れ落ちたシャルル。素早く護身用の短刀を出し、その存在から距離を取るイオニアス。ベルンハルトはその様子を、いくらか退いた所から見ている。

「誰だ、お前は。誰に命じられてここへ来た」

イオニアスはいつもより低い声で話す。相手は鎧で全身を覆っているため、顔を確認することが出来ない。

「契約により、言うことは出来ない」

相手もまた、低い声で返事をする。

「何が目的だ」

「この国を支配しようとする存在を止めることだ」

「支配？ 国王が死んだ今、王位を受け継ぐのはシャルルであろう」

「国王は生きておられる」

「何？」

「かつての国王は、お前たちに蝕ほじむまれてゆく、崇高なる意思を守るために肉体を滅されたのだ。よって、国王の崇高なる意思はまだ生きています。この国で一番偉いのはお前達ではない、国王ではない。国王の意思が具象化した、この国そのものだ」

「国王の意思が具象化した、この国そのものだ」

「具象化……ただの物体となったものを崇めるか。お前もまた、愚かな類の人間であるか」

「お前達には分からないだろう。物体にも人間が宿るのだ。この国は生きている。国王の名のもとに」

「ふん、馬鹿馬鹿しい」

とはいいつつも、相手は鎧に槍を持っている。イオニアスは安易に斬りかかるわけにもいかず、ただ様子を見ていることしか出来ない。

「話は終わりだ。この男には死んでもらおう」

シャルルは壁に背を預け、肩で呼吸をしている。鎧の男は槍を構え、シャルルに止めを刺そうとする。

「待て」

その時、この場に居る誰のものでもない声が響く。向こうの方から、いかにも上流らしい服装の存在が歩いてくる。

「忘れたのか。城の中では血を流してはならない。逆もまた同じだ」
「ヴェルダット！ なぜここに」

この男こそが彼らの最も恐れる存在、ヴェルダット。国王を、この国を心から愛し、曲がったことを許さない、真面目で誠実な男だ。
「警備兵、警備兵はどうした！」

徐々に安定を失ってゆく男達の陰謀。イオニアスは警備兵を呼ぼうと、大声を出す。

「彼らは私を買ったよ。あのような粗品で命を買ったなど、愚かしい」

「おのれヴェルダット……だが連れ出したところで、お前に私が切れるのか？ 命を奪う罪は重いのだろうか？」

「その通りだ。だから私はあなたを救済したい。これ以上重い罪を背負い、苦しむことのないように」

揺らぎ始める計画の前に、揺るがない敵の存在。イオニアスは悔しそうに歯を食いしばる。

「ベルンハルト、何をしている！ 今すぐこの男を殺せ！ 計画がどうなっても良いのか、死んでもよいのか！」

「シャルル、イオニアス。私は懺悔ざんげしたのだ。人の命を弄び、国王を裏切ったことを。悪いが、私はもう……」

「なんと……」

力を失ってゆくイオニアス。今この場にあるのは、他を圧倒するような謎の威力。その力を盾に、ヴェルダットは口を開く。

「安心してくれ。誰もあなた達を殺すとは言っていない。拘束したのち裁判にかけ、公平な判断のもと、自らの行いを理解してもらうつもりだ」

「国王は自らの故郷を、そして我らを捨てたのだ！ この国はもはや我らのもの。我らが好きに扱っても問題はないだろう！」

イオニアスの言葉が調和の間に響く。まるでその調和を偽りであると主張するかのよう。

「それが間違いなのだよ。この世に与えられた以外のものがあるか？ 商品を与える代わりに金を与えてもらう。金を与える代わりに商品を与えてもらう。仮に商品を創るにしても、その技術は誰に与えてもらったか。そしてその素材はどこから手に入れるか？ 買うにしても、採取するにしても、何者かに与えてもらう行為だ。商品でなくても全く同じことが言えるだろう」

「何が言いたい」

「与えられたものには、必ず何者かの意思があるのだ。その意思を尊重し、その意思に従わなければ、物事が上手く進むことなどありえない。今のお前達のように。……捕らえてくれ」

「はっ」

ヴェルダットの命令に鎧の男が返事をし、シャルルを拘束した。シャルルはとうとう諦めたのか、弱弱しい声で話し出す。

「戦いをしないなど、名誉を捨てるのと同じことだ。戦い、血を流し、時に命を落とす。それが騎士にとっての名誉であるというのに……」

「国の為に死ぬことは名誉ではない。多くの命を奪うことは名誉ではない。互いに血を流さずに済むことが名誉なのだ」

「戦いに、綺麗な言葉は不要だろう」

「綺麗でもなんでもないさ。全ては取引であって、それ以外の何物でもない。何かを得るのであれば、それにふさわしい代償を払わされるだけだ」

「これが我らの払うべき代償であるか……」

シャルルと同様に、両腕を拘束されたイオニアスが言った。

「連れて行け」

「はっ」

後から迎えの兵が何人かやってくる。それらの兵の中にシャルル達は消えていった。こうして、国の『再生』を図る男達の陰謀は崩されたのだ。

「国王よ、私はこれで良かったのでしょうか……」

ヴェルダットは誰も居ない空間に向かって言う。

「もしも問題があつたなら、私に相応しい代償をお与えください。

……国王の名のもとに」

そう言つてヴェルダットは立ち去つた。国王の死、陰謀の終息。

皮肉にも敵対状態にある神々により、一度だけ与えられた機会。サピエンティアに残るのは、自分の見るべきものが見られたという一種の喜びと、少しの違和感。

「これでこの国は間違はなく衰退し、滅びるだろう。全ては私の責任だ。だが、代々受け継ぎ、私が愛し続けたこの国を乗っ取られ、利用されるくらいなら、こうしてしまふしかなかったのだ……」

ここで泉の効果は終わり、サピエンティアは本来の世界へと導かれる。

「さらば、私の世界。さらば、愛しき母国よ。私と共に、役目を終えよう」

「サピエンティア……」

「おお、戻つて来たか。おかえり、ノスタルジア」

こちらは夢の世界、フレイアの楽園。見上げれば空が少し明るい。

しかしこれは日が昇り始めたからではない。

「戦いはまだ続いているのね」

「そのようだな」

「ねえ……良かったの？」

「何のことだ？」

「あなたの国、壊したんでしょ？ 大切な夢だったはずなのに……」

「これから先の、文明のためだ」

「文明のため？」

「叶わなかった夢ほど惨めなものはないだろう。叶わなかった夢ほど馬鹿にされるものはないだろう。だが、他者に馬鹿にされるような夢や願望が積み重なって出来たのが、人間の文明というものだ。私の国はあのままでは文明の妨げになる。夢を見られない国になる。だから私は、夢の為に、夢を捨てたのだ」

「そう……」

「あの時は君のおかげで助かったよ。ありがとう」

「助けたって？ 私は何もしてないわよ」

「おや？ それでは誰が……」

今もなお感じる、輪郭の無い気配。その存在は確かに色を変えていくようだ。不透明な透明へと。

時は再び動き出す

「どうしよう……このままじゃ、やられちゃうよ!」

場所は戦地に戻る。時はフレイアの神なる盾がその座から引きずり落とされ、神なる槍によって砕かれた後だ。刹那せつなの差をつけ、何とか城内へ移動した一同。盾を失った城には、容赦なく神なる槍の雨が浴びせられている。現在、神なる槍はアイデアの掛けた封により、ようやく防がれている状態だ。

「うーん。飛んでくるのは、あの槍だけか。なんで他の奴らは何もしてこないんだ?」

シエルは外の様子をうかがいながら言った。

「おそらく、あの力を使っているのでしょうね。大きな夢ほど、叶えるのに時間と人数を必要とするはずよ」

いつもの通り、研究用の空間を閉じながらアイデアは言った。

「へえ……で、輪廻は何をしてるの?」

シルヴィアは輪廻のことを不思議そうに見つめている。輪廻は意識のほとんどを別の場所に移動していた。輪廻の象徴が万が一に備え、輪廻の周辺を守っている。

「現うつに流れている『時』を監視しているのよ。少しでも時の流れに変化があれば、神々が例の力を使った証拠。これが確認できれば、ある程度の予兆が見えるようになるわ」

「でも、あいつらはあの力を使って時を戻したんだよな。本当にあの力は時を進めるのか?」

「それも問題の一つよ。フレイアが軽く楽園を創っただけでも、現では百年の時が流れた。同じように神々が夢を創造し、降臨させるのであれば、それだけこちらの世界にも負荷がかかるはず。となれば現の時が進むことはあっても、戻るといふ事は考えにくい」

「というか、なんで人間の世界はそんなに時が流れるのが早いのか。こっちで何かやるたびに現の時が流れちゃったら大変だよな?」

「夢と現はどこかの点で、噛み合うようにして繋がっている。これは今の段階では確実なことよ。そしてこの二つの世界は回転をしていると考えるの。時の流れに沿って、どちらも止まることなく回転をしている。だけどこちらの世界に比べて人間の世界は小さいからこちらがゆっくり回転していても、向こうは速く回転してしまう。だとすると、こちらが少し力を入れ、回転を速めれば……あとは分かるわね」

「う、うん。分かるよー!」

シルヴィアは理解できていないようだった。

「ものを造ると時が進むって言うのは俺にも分かるけど、何ていうか、その」

シエルは自分の言いたいことが難しいことであり、どのように説明すれば良いか分からないらしい。

「そもそもその力が、そういった理ことわりの中にあるものであるのか、という事ですね」

「そうそう! って、フレリア、どこに行ってたんだ?」

「少々、楽園の方へ」

「ああ、そう言えばノスタルジアと……あの難しい奴が居たんだっけ。あいつら、大丈夫なのか?」

「サピエンティアさんですね。あのお二人は現まへへ行っていたようですよ」

「あいつ、そんな名前だったんだ……でも、なんでこんな時に?」

「神々がそうするように仕向けたのよ。あのひと達が死んだ直後の現を見せ、惑わそうとしたの。帰りたくなるようにね」

「ああ、だから時を戻したのか」

「ついでに変な細工もしたようだけど、失敗に終わったようね」

ひたすらルーンを描き続けるゼウス。その周りで祈りのような行動を見せる他の神々。そして特に行動をするでもなく、じつと何かを待っている仲間達。それらの様子を見たシルヴィアが、痺れを切らしたかのように言う。

「ねえ、もうずっとこんな状態だけど、アイデアが掛けておいたって言うこの封、大丈夫なの？」

「持久度的な意味で言えば、神なる槍があと三回分ね」
アイデアの返事に凍りつくシルヴィア。

「え……ちよつと、そういう大事なことは先に言っつてよ！」

「お楽しみは取っておくものでしょう？」

「楽しくない！」

「うん、全然楽しくないな。まあ、いつものことだけど」

もはや驚く様子もないシエル。

「そうですか？ 私は楽しいと思えますが」

フレリアの言葉もまた、いつものことである。

「というか、楽しいとかじゃなくて、なんで早く作戦とか考えなかつたの！」

「私達がいろいろと考えている間、あなたはずっと悲鳴を上げていたよっただけど」

「う、それは……」

また一つ、神なる槍が城壁に突き刺さる。封の力が作用し、槍はただの光となり消えた。

「きゃああ、もうあと二回じゃん！ 私の人生終わった！」

「それ、もう五百回は聞いたわ」

「まだそんなに言っつてないよ！」

「それくらい耳に残っつているということよ。でも安心しなさい、封は壊れない。なぜなら……」

「時が動いたぞ」

これまで黙っつていた輪廻が口を開く。神々が例の力を使った証拠だ。

「時は再び、動き出すのだから」

神々は予定調和の中で踊る

「ゼウス様、完了しました」

そう報告するのは神々の伝令、また、今回の戦いにおいて例の力を使う代表者を務める虹の女神、イーリス。

「よくやった。では、始めよ」

はい、と返事をし、神々に合図を送るイーリス。代償は揃った。あとは自分達が創りあげた夢を、こちらに適用させるだけだ。

「生成、パノプティコン」

アイデア達の城を中心に、いくつもの独房が連なるように配置される。

「では、それぞれ独房の中へ」

イーリスの声に従い、神々は自ら独房へと入った。扉は不気味な音を立てながら閉まり、神々を小さな空間へ隔離した。

「どうなってるの？」

どの存在から見ても、これが異様な光景であることは確かだ。シルヴィアは気味の悪そうな顔をして尋ねる。

「全展望監視構造、パノプティコンよ」

「あ、理解出来なさそうだからいいです」

アイデアが回答をしたのに対し、即座に自分には理解できないと判断したシルヴィア。

「俺は一応聞いておこうかな」

「シエルが後悔している未来が見えるぞ……」

シルヴィアが輪廻の真似を言った。

「いいんだよ！ シルヴィアが理解出来なくても、俺は聞くぞ！」

「後悔しても知らないよー」

「からかうように言うシルヴィアに対し、

「聞かない方が後悔するだろ」

もつともらしい返事をするシエル。アイデアはそれを聞き、小さく笑みを浮かべると、説明を始める。

「パノプティコンとは、中央に監視塔を置き、その周りに独房を設置する監視構造の名称よ。円形に配置された収容者の個室が、監視塔に面するように設計されているの。収容者たちは隣の部屋、つまり互いの姿を見ることが出来ず、さらに監視塔の内部はおろか、監視塔という建物自体も見ることが出来ない。一方、監視塔からは全ての独房を見ることが出来るから、収容者たちはいつ自分が監視されているのかという、耐えがたい孤独と恐怖に怯えることになるのよ」

「アイデア……それ、わざと難しく言ってるだろ」

「良く分かったわね」

「アイデアだからな。でも俺はシルヴィアとは違って、ちゃんと理解できたぞ！」

「格好つけて言う言葉ではないわ」

「格好をつけようとするほど格好が悪くなると、よく聞きますね」
「フレイアにまで斬られてしまうシエルであった。」

「……それで、どうなったんだ？ 今の話だと、こっちが有利になったような……」

輪廻の象徴が恐ろしい速さで回転をしている。現に流れている『時』が、相当暴れているのだろう。

「まだよ。もう一つ来るわ」

「因果逆転」

神々は続けて力を使う。その夢は降臨すると同時に原因と結果、過去と現在を逆転し、理を破壊する。

「うおっ、また進んでるぞ」

あの時と同じように、再びシエルが反応を見せる。あまりの速さに、こちらの世界の『時』にも影響を与えているのだろうか。

「もう秩序など、無いようなものね」

「独房へ入ったという原因、監視されているという結果。この場の存在に共通して関係する因果が逆転された。それぞれの監視塔へ入ったという過去、そして、独房を監視しているという現在。つまり、監視塔であったはずのイデア達の城は逆転し、全方向から監視されている独房となってしまったということだ。」

「不思議な力ですね。秩序を崩すことを可能とし、本人たちには何の影響も与えない……」

「パノプティコンのもつ、その構造により、イデア達は外を見ることが出来ない。そして、この城の内部全てが相手に筒抜けとなる。」

「やはり、私達の認識の範囲を超える何かがある」

「そのようですね」

「あ、あ……」

話すタイミングを見つけれないシルヴィア。

「それはそうとして……これ、かなり危ないんじゃないか？」

「そうね」

「どうするんだよ」

「どうすべきかは、もう決まっているわ」

イデアの顔、すぐ右側を黄金の槍が通り抜ける。

「きゃっ」

そしてそのまま向かってきた槍を、紙一重で避けたシルヴィア。

「ちよっとイデア、何で避けるの！」

「私ではなくて槍が避けたのよ。まあ正確には、槍は私の虚像を貫いていたのだけど」

「理解出来なさそうだからいいです……というか、封はどうしたの？」

「封は壊れていないわ。けれどそこを通過する必要が無くなった今、封はあっても無いのと同じ」

「ああ、監視者だから好きに出来るってことか。つまり、それは独房を開けるとか……」

話しながら意味を理解したシエルは徐々に言葉を失う。事の重大さはシルヴィアにも理解できたようだ。

「きゃああ、お城に入られちゃう！」

「城じゃないわ。牢獄よ」

「大して変わらないよ！」

「全く違うわ。城は守るもの。牢獄は 破るもの」

アイデアは右側にある『何か』を睨む。そして響いた破裂音。

「え、なに？」

「おおつ、変な感じがしたぞ」

「……良いのですか？」

「腐った理ことわりに用はないわ。他の存在が手を加えた時点で、それはもう私の作品ではないのだから。今のは言うならば理の断末魔、とでも言いましょうか。最初で最後の作品よ」

アイデアの瞳には感じたことのない『何か』が潜んでいた。それは因果に抗う死の螺旋。理という作品を汚された、大いなる存在の怒りそのものであった。

「さあ、牢を破るわよ。理はすぐに再生するから、急いで」

「脱獄か！ それなら面白そうだぞ」

「フレリア、案内を」

「はい」

「え、え？ どうするの？」

「私に付いて来てください。外へ出るのです」

足早に移動する一同。案内のフレリアよりも先を歩くアイデアの後方から、待機していたアイデアの半身が現れる。城全体が牢獄となった今、ベルクフリートもまた牢獄でしかない。留まる理を無くしたアイデアの半身は、歩きながらも一方のアイデアと重なってゆき、すぐに一つとなった。

「急いで、この先よ」

広間から長い廊下へ出る。突き当りには大きな絵画が掛けられていた。窓からは黄金の輝きが差し込み、廊下を照らしている。

「あの絵画の裏に地下へと続く道があります」

「え、地下の抜け道？」

「はい。地下のことは私以外に誰も知りませんから、きつと抜け出せませすよ」

「きやああ、これで助かる！」

走りながら両手を上げて喜びを見せるシルヴィア。しかし……

「ちなみに、地下には拷問器具があるとか、亡霊が出るとか、悪い噂ばかり聞くといい設定です」

「え……」

シルヴィアが固まった。先ほどの喜びも嘘のように消え去っている。

「ちょっと、なんでそんなの創ったの！ 怖くて入れないじゃん！」

「そうですか？ 楽しくて良いと思っただけですが」

窓の崩れる音と共に、黄金の槍が一同を襲う。衝撃に足元をすくわれ、転倒したシルヴィア。

「きやあっ」

「シルヴィア、早くしなさい。消されるわよ」

「きやああ！」

シルヴィアは素早く立ち上がり、再び走り出す。

「逃がさぬぞ、裏切りのフレリア！」

広間の方からゼウスの声がした。その怒号は空を裂くように廊下へと伝わり、壁全体にひびを入れる。

「おい、何か来てるぞ」

「槍が来るわ、避けなさい」

「無理だよ！」

神なる槍が廊下を駆ける。フレリアは時間を稼ごうと、聖域を用意し、こう告げた。

「ゼウスは私を狙っています。ですから先に行ってください」

「フレリア、大丈夫かよ」

「大丈夫よ、私が保障するわ」

アイデアが言い切る前に、聖域と神なる槍が衝突する。しかし聖域は神の創り出すもの。神の物である以上、神そのものであるこの槍に勝つことは出来ない。そうして神なる槍は聖域を砕こうとする、が。

「あれ？」

「どうなったんだ？」

槍は聖域を砕く前に消えた。不可解な現象に戸惑い、一瞬、足を止める一同。

「行け」

消えた槍の辺りから声が聞こえる。

「その声は……もしかして」

「ハデスか？」

姿を隠し、神なる槍を滅したのは冥界の王ハデスだった。

「え、でも、どうして？」

「勘違いをするな。純白の女神フレイアを手に入れるのは我ただ一人。他の存在に邪魔はさせん」

「……大丈夫なの？」

「当然だ。我の持つ死の力を使えば、ゼウスであっても敵うことは
—

一瞬の空白ののち、ハデスは自身の胸から雷霆らいていが生えていることに気付く。

「冥界の王ハデス。ここで何をしている」

異様な冷たさが辺りへ広がる。魂まで凍るような冷たさの中、ハデスは力を失い、地に膝をつけた。

「油断した、か……」

形を失い、黒い煙へと還ってゆくハデス。

「冥界の王ハデス。あるべき場所へ還れ」

ゼウスは抜け落ちた雷霆らいていを再び振り上げる。

「行くわよ」

「ふふつ。またお会いしましょう」

雷霆がハデスを裂く寸前、ハデスは黒い狼に姿を変え、広間へと駆ける。ハデスはそのまま柱の陰に飛び込み、その幼い暗闇と同化した。

「……逃げ失せたか。イーリス、エスプリを追え」

少し遅れて、虹色の光が広間に差し込む。

「はい、ゼウス様」

「もう、なんでこんなに長い廊下を創ったの！」

「豪華な方が素敵かと思ひまして」

「素敵だけど、素敵じゃない！」

絵画へと急ぐ一同。そしてそれを追いかける虹の縄。

「あなた達は逃がさない！」

「虹の奴が来たぞ！」

「フレイア、壁を」

「はい」

フレイアが返事をするよりも早く、水が床板の間から勢いよく噴き出す。すぐにそれは分厚い壁となり、イーリスの前に立ちふさがる。

「この程度……」

水の壁はいとも簡単に突破された。フレイアはもう一つ、今度は自身の目の前に壁を創る。

「追いつかれちゃう！」

「早く、飛び込みなさい」

絵画をすり抜け、地下に入ってゆく一同。イデアは絵画を抜ける際、水の壁を振り向きざまに、ひと睨み。

「うっ」

水の壁は瞬時に凍りついた。中の透き通っていない氷は光を複雑に屈折、拡散させる。イーリスはやむを得ず、人型の姿に戻り、壁と衝突した。

「……ゼウス様、取り逃がしました」

「まあ良い。奴らに逃げ延びる道などないのだからな」

「はい……ですが、一つだけ分かったことがあります」

「何だ？」

「あの女、エスプリは、現象を操ります」

ゼウスは目の色を変える。

「大地の母に匹敵するか……」

遙か昔、神々の住む世界を創り、別の次元へ昇華したと言い伝えられる、大地の母ガイア。現象を操るその力には、神々の王ゼウスですら及ばないとされ、今もなお畏怖の対象とされている存在だ。

「イーリスよ」

「はい」

「この戦い、なかなか面白くなりそうだ」

因果に抗う死の螺旋

悪い噂ばかりを聞くといい、薄気味悪い地下通路を抜けると、そこは深い森の中であった。こちらは先ほどとは打って変わって、静寂の音が聞こえるほど静かである。

「……ここ、どこ？」

「楽園を囲んでいる、森の部分です」

「え、じゃあ、ゼウス達が来ちゃったら危なくない？」

「それなら大丈夫です」

フレイアは地下通路の方を向く。地下通路はその四角い口を大きく開け、森の風を吸い込んでいる。フレイアはその口の四隅に触れ、地下通路が役目を終えたことを示す。

「使い終わったら元に戻す。これが上手にものを進める秘訣です」

そう言ってフレイアは微笑んだ。地下通路は正しく閉じたようだ。

「本当に、来てないかな……」

「この森は一つ次元をずらしてあるの。楽園もまた一つ次元がずれているから、森は認識できたとしても、楽園は難しいでしょうね」

「それに地下通路はもう閉じましたから、神々がこの場所に現れることはありません」

「危なそうな気配も感じないしな」

「そっか……なら良かった！」

それらの言葉を聞き、ようやく胸を撫で下ろしたシルヴィア。

「……ところで、輪廻は？」

シルヴィアは先ほどから姿の見えない輪廻のことを思い出し、辺りを見回す。

「観戦席よ」

アイデアは左手首を見せる。

「あ、本当だ」

意識のほとんどを現に傾けているせいか、存在感は非常に薄いのが、

確かにその象徴はアイデアの手首を輝かせていた。

「ねえ、アイデア。私も輪廻みたいな象徴が」

「無理よ」

「俺も輪」

「無理よ」

「ですよね……」

二人は揃って肩を落とす。

「フレリア、そろそろ楽園へ移動しましょう」

「はい。案内をするので付いて来てください」

こうして、楽園へと歩きはじめた一同。草をかき分けるようにして進む足音が静寂の音を打ち消し、そこに眠る存在の聴覚を刺激する。

「いいなー、輪廻は観戦とか出来て。シエルもそう思うでしょ？」

「うん、そうだな」

シエルは何か集中しているようだった。シルヴィアはふと、自身の気配が抑えられていることに気付く。

「え、なんで？」

「どこかしましたか？」

「なんか気配が消えてるような……ねえ、もしかして、この森も……」

「はい、悪い噂ばかりです」

フレリアはやはり微笑んでいた。

「ちょっとシエル、さっき危なそうな気配はないって……」

「ああ、面白そうな気配なら沢山するぞ」

「……」

森には恐ろしい悲鳴が響いた。

その頃、楽園では。

「空が紅い……」

空を覆い尽くす程の光の線が、何かを探しているかのように飛び

交っている。ノスタルジアは不安な表情を浮かべつつ、イデア達の無事を祈る。

「流星ではない光……何なのかしら」

「そういえば、私がまだ若かった頃にも同じようなことがあったな。その時は世界が火事になったと、街の者は大慌てしていたよ。……まあ、今はそんな悠長なことを言っている場合ではなさそうだが」

光は飛び交うのをやめ、雨のように落下し始める。

「こっちに来てるわ……大丈夫かしら」

「私の推測では、この樂園には特別な力が働いている。それは……そうだな、周りと比べて、世界が一分違うくらいの差を生んでいるのではないかと思う。そして存在は通常、世界を移動することが出来ない。つまり、ここに居れば安全だということだ」

「なぜ分かるの？」

「私は『英知』だぞ」

サピエンティアは頬をゆるめる。それにつられて、ノスタルジアの頬もゆるんだ。

「ふふ、そうだったわね」

「おーい、大丈夫だったか？」

「きゃああ、やっと出られた！」

森の方から声が聞こえる。イデア達だ。

「みんな、無事だったのね。よかった」

ノスタルジアはイデア達に駆け寄る。

「危険なのは、まだこれからですよ」

「やっと恐ろしい城から出られたと思ったら、その森もすごく恐ろしくて大変だったんだよ！ 変な飛んでる生き物が頭に乗っかったり、腕の長い亡霊に足掴まれたり……で、あの光は何？」

「私も気になるわ。まるで私達を探してるみたいで」

「姿が見えなくても、全ての範囲を攻撃すれば必ず当たるでしょう？ 神々は可能な限り広い範囲を攻撃し、私達を仕留めるつもりなのよ。だけどここに居る限り、そのような心配はないわ」

「次元が違うから、だよな？」

「そうよ。普通の存在は次元を移動できないから、この辺りの空間に触れた瞬間、消えてしまうの。つまり違う次元に居る私達に、雷霆の雨が届くことはない。まあ、もしこちらの次元に居る存在が、神々の存在を肯定したら、話は別だけど」

「つまり、ゼウス達を歓迎しなければいいんだね！」

「その通り」

「ですが、一つだけ……」

フレリアは心配そうな眼差しをアイデアに向ける。

「ええ、分かっているわ」

「え、なに？」

「聞きたい？」

「聞きたくないです。あ、でもシエルが……」

シエルは二回、頷いた。

「俺は聞くぞ」

「でしょうね」

「では私が説明します。先ほどのお話の通り、雷霆の雨は楽園の辺りの空間に触れた瞬間、消えてしまいます。これで私たちが滅される心配は無いのですが、相手の目的はそれではなく」

「次元の違う場所を探すことだったら……」

「その通り。手の届くところまで、落としてしまえばいい」

「シエルさん、さすがです」

シエルは久々の称賛に満足げな笑みを浮かべたが、すぐに我に返る。

「いや、それすごく危険だって」

「はい」

「はい、じゃないよ！ やっぱり聞きたくなかった！」

アイデアは悲鳴を上げるシルヴィアを見ると、黙って透明な空間を創り、シルヴィアの声を遮断した。

「……それで、どうするんだ？」

「どうもしないわよ。全ては予定調のうち。今までの出来事は全て、誰かの計算によって創られている」

「それは、つまり……?」

「楽園の墜落よ」

「またあの力か」

「いいえ、今回は違う力よ」

「おお?」

「原則として存在が次元を移動することは不可能。だけど例外のない規則はないの。唯一、次元を自由に移動できる存在と言えば」

「空気が震え、視界が揺らぐ。どこかで感じたことのあるこの力に、一同は小さく震えた。」

「なぜ、ここに……」

フレイアは身構えた。戻った視界の中に、黒い煙のようなものが混じる。

「うわ、こいつ!」

「……」

黒いローブを着た女。かつて死の予言者と恐れられた、悲劇の女。

「……、……!」

シルヴィアが何かを言っているようだ。しかし透明な空間によって遮断されているため、何も聞こえない。

「ようやく分かりました。ゼウス達の領域で私を襲ったのは、あなただったのですね」

神々の世界にて、フレイアを襲った謎の重力。冥界での、イクリプスの違和感。全てが繋がった。

「……」

予言者は返事をしない。あの時と同じだ。

「どういうことだ、重力を司る者は存在しないはずではないのか?」

「彼女は人間として生まれてしまった『予兆』という存在。だけど予兆という絶望を受け入れられるほど、人間は強くない。その絶望

という重さが、彼女を狂わせ、彼女の心に重力を生み出してしまった。だから彼女は重力を持っていてだけで、重力を司っているわけではないわ」

予兆とは、近い未来に何が起きるかが分かっただけ、同時に、それを変えることが出来ないという事も分かっただけという、絶望の一種。無知ほど恐ろしいものはない。しかし無知ほど幸福なものもまた無いのだ。

「ということは、彼女が、死の予言者か」
「そうよ」

予言者は無表情のまま、両腕を上にあげる。

「来ます。気を付けてください」

どこか分からない方向から重力を感じる。輪廻の力によって次元を移動するときに感じる、あの感覚だ。

「実に不思議な現象だな。理を破り、次元の移動を可能とするほどの力……」

「ノスタルジアさん、私の後ろに居てください」

「分かったわ」

「サピエンティア、あなたは私の後ろに。シエルはその辺に居なさい」

「承知した」

「おい、俺の扱いひどいぞ！」

「あなた、シルヴィアのようにになりたい？」

「アイデアは透明な空間を指で叩く。」

「……………！」
シルヴィアは隔離された空間の中から何かを訴えているが……放置されたままだ。

「いや、じゃあ俺はフレリアの後ろに……」

予言者が腕を振り下ろす。不快な振動音によって夜空が壊され、無色の破片となって落ちてくる。楽園はアイデア達の次元から綺麗に切り離され、張力を失う。

「きゃああ、落ちてる!」

強い重力に覆われ、空の破片ごと神々の世界へ墜とされてゆくフレリアの楽園。シルヴィアを遮断していた透明な空間も破碎された。一同は強い落下感に耐える。

「空気が変わりましたね。神々の音が聞こえます。もうすぐ到着するでしょう」

衝撃と共に落下感が消え、地面は新しい空気に押し固められた。

「うわ……」

シエルは新しい空気を感じ取ると、思わず顔を歪めた。

「これ、神々の空気か？　すごく危なさそうなうえに、全部俺たちの方に向いてるぞ」

「今さら驚くことではないわ」

「今回は特別だろ。世界も神々に合わせて出来てるわけだしな」

「大丈夫よ。世界が変わっても、私達は変わらない。あなたの未来もまた、変わらないわ」

「それ、悪い意味で捉えるとすごく絶望的な……」

「未来はもう決まったから、あとは待つだけよ。……ところで、今ここを囲んでいる森、違うわね」

楽園であつた空間は森に囲まれていた。しかしこれは本来の森ではない。森が養分として吸収し、蓄えているものが、本来のものと違うのだ。

「ああ、なんか嫌な感じがするな。亡霊とかじゃなくて、もっと危ない感じの……って、予言者はどこ行った？」

「楽園が地に付いた時から、姿を消しているわ。だけどフレリアが追跡しているから、大丈夫でしょう」

フレリアは目を閉じ、望遠の魔法によって予言者の後を追っていた。しかし予言者には時や空間を歪める特性がある。フレリアの集中の度合いからしても、追跡が困難であることは推察に難くない。

「一度ゼウス達のところに戻るのか？」

「そうですね。十分に気を付けなさい。彼らはもう、構えてい

るわ」

アイデア達が高等な話をしている間、元人間の二人とシルヴィアは、後ろの方に身を小さくして集まっていた。

「すごく怖かったね……」

「ええ。私もこんなに怖かったの、初めてよ」

「よかった……分かってくれるのはノスタルジアだけだよ！」

「私を忘れてもらっては困るぞ」

「あ、えつと」

「サピエンティアだ。君も不思議な存在だな。やはり、真理という存在は今でも我々を畏怖^{いふ}させてくれる」

「え……」

「ふふ、シルヴィアには難しかったわね」

からかうような笑みを浮かべる二人に、シルヴィアは頬を膨らませた。

「もう、みんなそうやって私をからかって……」

「楽園の墜落、予言者の甦生、鍵は因果の逆転ね。それにしてもあの力、一体誰の……」

アイデアはフレイアとは違う目を使い、フレイアとは違う何かを見ているようだ。それは過去を再生する追憶か、未来を再生する予兆か。それはアイデア以外の存在に理解できることではない。

「そろそろ私も、力を出すべきね」

因果に抗う死の螺旋。世界を司る真理達を脅かす、大いなる予兆を前にしてなお、アイデアは不敵な笑みを浮かべていた。

出づる予兆は妖艶に

辺りに静寂の音が戻る。しかし一同は気を緩めない。この静寂がすぐに破られると予感しているからだ。だからこそ、ほんのひと時の静寂が、永遠のように思えてしまう。

「……」

「……」

アイデアも、フレリアも、ここではないどこかを見たまま、黙って待機の姿勢をとっている。その緊張感は徐々に一同の精神を削り始めているようだ。

「……」

風の音が静寂と絡み合い、小さな唄を創る。……微かに、予感していた音が聞こえた。

「ゼウスが」

フレリアが小さな動きを見せる。次の瞬間、永遠だった静寂は急に加速する

「来ました」

突如、剣の姿をした雷霆らいていが現れ、フレリアの頭部を突こうとする。フレリアは聖域を創り、剣による一撃を難なく防いだ。少し間をおき、雷霆の持ち主が降臨する。

「ようこそ我らの領域、愛の楽園へ」

「歓迎にしては、随分と手荒ですね」

ゼウスとフレリアは互いを視界に捉えたまま、一步も動かない。ノスタルジアは両者の様子を見つつ、小声で隣に話しかける。

「なにが愛の楽園よ。フレリアの作品を壊しただけじゃない」

「ゼウスが愛とか言っても全然いい予感しないよね」

「彼らにとつては、殺すことが愛することと同意なのだよ」

サピエンティアも本人に聞こえないよう、小声でゼウスを皮肉った。

「おい、俺も入れるよ」

シエルは退避しているシルヴィア達に気付き、素早く移動してきた。

「私達、どうなっちゃうのかしら」

「もうこれ、私達が居るべきじゃないよね」

「なんかあそこだけ別の世界だよな」

「私はもう戦いたくはないのだが……」

サピエンティアは小難しい顔をし、ゼウスとフレイアのやりとりを見ている。アイデアは相変わらず目を閉じ、何か別の作業をしている。

「どうだ、抗う術もなく我らの世界へと落とされた気分は」

「術が無かったのではありません。術を与えなかったのです。私達の戦いを、ここで終わらせるために」

「大いなる力を前に、まだそのようなことを。まあ良い。我らに盾突くことがどれほどの罪か、その身に刻んでやるとしよう」

風と共に、ゼウスの兄弟である海洋の王ポセイドンが到着する。

「エスプリ、真理、裏切りのフレイア……確かに強い。だが、これまでだ」

ポセイドンの装備している肩と胸だけの鎧が、銀色の光沢を見せる。ポセイドンを包んでいる海の風が、常に鎧を研磨しているのだ。「準備は整ったか？」

近くから主の見えない声がする。しかし聞き覚えの無い声だ。禍々しい気配と共に黒い渦が発生した。二つの影が、地面から生えてくるように現れる。片方は、漂わせた帯状の布で体を覆う妖艶の女。そしてもう片方は重力を持つ女、『予兆』だ。

「よし、これでこちらの準備は整った。お前たちの方はどうだ？」

裏切りのフレイア……いや、エスプリを初めとする、真理という者達よ」

ゼウスに代わり、ポセイドンが話を進行させる。すると今まで黙っていたアイデアが目を開き、

「ええ、こちらも、準備完了よ」

準備が完了したことを告げた。同時に、一同は空間に圧迫されるような感覚を覚える。

「おお……」

妖艶の女はすぐに気づいたのだろう、目の色を変えてアイデアに話しかけた。

「お前が現象を司る者、エスプリか。私は妖術を司る者、ベアトリ―チエ」

「魔女が神へ昇華したのね。珍しいわ」

「然様。現象を操る力は、魔女を志す者にとって最大の目標。お前とは愉快な話が出来そうだ。先ほどは何をしたのだ？」

「この世界を防壁で覆ったのよ。理が壊れ、秩序が大きく揺らいでも、世界が破裂しないようにね」

「なるほど、それは面白い。これで私達は気兼ねなく、この舞踏会を楽しめるといふことか」

「その話はさておき」

進行役のポセイドンが間に入った。

「ここは戦いの場である。神々と真理の、雌雄を決する戦いだ。逃げることは叶わない。互いに例の力は使わず、公平に行おう」

「異論はないわ」

「私も異論はありません。後ろの者達も同様です」

「え、私達も戦うの？」

「はい」

「当然よ」

「私の人生終わった！」

「俺の人生も終わったかも……」

「人生とは人間の生を表す言葉。だとすれば真理が人生という言葉を使うのは誤りでは……」

サピエンティアは思考の海へと旅立った。

「駄目よ。私が祈るから、私の為に、終わらないで」

「そうですね。ここで消えてしまえば、本当に全てが終わっています」

「シエル、シルヴィア。ノスタルジアはあなた達を守るから、あなた達はノスタルジアを守りなさい。祈りは自分を含まない魔法。ノスタルジアが消えることは、あなた達の滅を意味するわ」

「お、おう……」

「どうしよう！ 私達、消えちゃうー！」

「私の祈りは必ず届くの。だから、大丈夫よ」

「そもそも生という言葉は……おっと、また思考の海へ行ってしまうところであった。ノスタルジアがそう言うなら心強い。私も可能な限り役に立てるよう、尽力しよう」

「そうだよ、ノスタルジアが頑張ってくれるんだから、勝たなきゃ！」

「うんうん、そうだな」

ゼウスは冷笑した。

「そのような様子で、どのようにして勝つというのだ。笑わせてくれる」

「大丈夫よ。勝敗の予兆は既に見えているから。さあ早く、始めましょう」

「良いだろう。時は満ちた。ゼウス、合図を」

ポセイドンがそう言うのとゼウスは頷き、雷霆らいでいを掲げる。

「では、開戦だ」

両者の間に、合図の雷が落ちた。

月下の幻想舞踏会

神々はまだ動きを見せない。真理たちの力を把握していない以上、下手に攻撃をすれば身を傷つける可能性がある、ポセイドンが提言をしたためだ。

「……」

ベアトリーチェは静かに目を閉じる。しかし呪文を唱えている様子でも、何かを見ている様子でもない。

「私とフレイアが前に立つから、あなた達は後ろに居なさい」

イデアは神々を視界に捉えたまま言う。シエル達は黙ったまま、後ずさりをするように後ろへ下がる。

「後ろは聖域で覆っておきますね」

フレイアは少し隙を見せるようにして聖域を創る。しかし、それでも神々は動かなかった。

「……」

かつての死の予言者『予兆』は、おそらくベアトリーチェの所有物とされているのだろう。ベアトリーチェの隣で、命令を待っているかのように佇んでいる。と、ここでフレイアは思い出す。予言者は目に見えない『時の枷^{かせ}』を指先で操るのだ。悟られないよう、下の方へ目をやると、予言者の指先は 動いていた。

「はっ」

「見えているわよ」

「テンペスト」

枷の碎ける音と同時にポセイドンの竜巻が飛んでくる。フレイアは慌てて聖域の魔法を唱えるが、すでに背後を守っているため、発動しない。やむを得ず、低級の防御魔法を練って発動するが、聖域以下の魔法では効果が無いようだ。

「お願い、フレイア達を守って」

ノスタルジアの祈りが対立する風を呼び、テンペストとぶつかり

合う。

「おお……」

思わず感嘆の声を漏らすベアトリーチエ。やがてテンペストは勢いを失い、消えた。

「お前は祈りという奇跡を使うのか。なんと面白い」

「私もかつては魔女と呼ばれていた存在。だから魔女であるあなたとは戦いたくないけれど、仕方がないわね。お互い、守りたいものがあるから」

ベアトリーチエは頷き、笑みを浮かべた。

「然様。これは神々と真理との、雌雄を決する舞踏会だ。互いに力を出し合い、楽しもうではないか」

「やはり、小細工は効かぬか。ならば……」

ゼウスは小細工が通用しないと判断すると、雷霆を杖に変え、ルーンを描き始める。

「待て、ゼウス」

ポセイDONはルーンを描くゼウスを制止した。

「何だ」

「エスプリの力を見ただろう。あれはおそらく『滅』という現象。うかつに神なる槍を見せれば、消されるぞ」

「……そうだな。今は様子を見よう」

ポセイDONの話の聞き入れ、描きかけたルーンを消去したゼウス。雷霆はただの雷に戻り、ゼウスの手の中で唸っている。

「あら、残念。そして」

アイデアの足元からは小さな輝きが漏れ出している。アイデアは素早く飛び退き、それを回避する。

「これもまた、残念」

「逃すな」

それは大きな蛇であった。雷霆を元の姿に戻すまでの僅かな時間、ゼウスは雷霆の一部を蛇に変え、地中に隠していたのだ。地面は大きく突き破られ、綺麗な花畑は一変した。

「大地はあなた達を生かす重要な条件なのに、随分と乱暴に扱うのね」

蛇は勢いよく飛びかかってくる。イデアはそれを踊るような身のこなしで避けると、無防備になっている蛇の背中を踏みつけ、もとの雷いかすちに戻した。

「さすがは現象を司る者。雷霆の蛇を一撃で還すあたり、一筋縄ではいかないか」

「それはそうとして。これだけ大きな穴を開けられたら、やりにくいことこの上ないわ。どうするつもり？」

「これではこちらやりにくい。使ったものは元に戻さなければ」
ポセイドンは矛を大地に向ける。

「あるべき姿に戻れ」

矛の先から黄金の輝きが放たれ、傷付いた大地を癒す。地面に出来た丸い陰は、すぐに消えてなくなった。

「大地を揺るがす者。その異名は飾りではないようね」

「我にも誇りというものがある。甘く見られては困るぞ」

「あら、それは失礼」

「エスプリよ」

名を呼ばれたイデアは視線を移動させる。声の主は、ベアトリーチエだ。

「話をしている場合ではないぞ」

ベアトリーチエは妖しげな笑みを浮かべていた。……隣に居た存在の姿が無い。

「きゃあ！」

シルヴィアが悲鳴を上げた。ベアトリーチエの術により、予言者がシルヴィア達の方へ瞬間移動してきたのだ。

「うわ、なんで来たんだよ！」

「きゃああ、消される！」

「散らないで、そこに居なさい」

「で、でも」

「俺は重力に弱いんだぞ！」

「二人とも落ち着いて。安心して祈れないわ」

ノスタルジアに言われ、ようやく静かになる二人。

「この女が、死の予言者か……」

サピエンティアは目を細めた。

「さあ、重力を解き放つのだ」

ベアトリーチェの声に従い、予言者は腕を上へ伸ばす。頭上には見る見るうちに重力が集結し、空間を歪める黒い渦が出来始める。

「裁きを」

「させません」

フレイアは光の剣でゼウスの手元を狙い、雷霆が雨となって降り注ぐことを阻止する。

「ミラーージュ」

予言者が重力を生成する時間を稼ぐためか、神々は次々と攻撃を仕掛けてくる。今度は白い霧のようなものが発生し、アイデア達を包もうとした。ベアトリーチェの得意とする幻惑の魔法だ。

「シエル、風を」

「おう」

シエルが発生させた風により、霧はすぐに吹き飛ばされた。

「よし、上手くいったぜ」

「打ち滅ぼせ」

「エクスハティオ」

魔法はまだ止まない。ポセイドンは矛を掲げ、雷を呼び、ベアトリーチェは火炎の魔法を放つ。

「アルドヴィ・スーラ・アナヒタ」

「時よ」

フレイアは水源の魔法を放ち、無作為に放たれる数多の火炎から一同を守る。アイデアは左腕を水平にあげ、輪廻の象徴を飛ばす。象徴が一同の上で広がり、ポセイドンの魔法を無効化した。

「はっ」

フレイアは不意に飛んできた、回転する雷霆の刃を紙一重で回避する。が、雷霆の周りに発生した小さな真空により、フレイアのドレスには小さな裂け目が創られてしまった。

「次は当ててやろう」

雷霆の刃はゼウスの意のままに飛び回り、フレイアを翻弄する。

しかしどういうわけか、それはいつになってもフレイアの身に触れることが出来ない。

「うっん……ゼウス、まだ当たらぬのか」

ポセイドンはもどかしそうに言う。

「我は正確に狙っているのだが……どのような細工をしたのだ？」

フレイアは水の粒を飛ばしながら動き続けている。水によって残像を創り、ゼウス達に錯覚を起こさせるためだ。もちろん、それに気づかないポセイドンではない。

「仮に、残像を発生させているだけであれば」

ポセイドンは矛の柄で地面を突く。地面より木の根が飛び出し、フレイアの足を引っ掛ける。

「止めてしまえば終わりだ」

転倒したフレイア。背中を強く打ちつけてしまい、すぐに起き上がれない。

「ほう。これで終わりか」

不気味に笑うゼウス。雷霆の刃は空を切る音を立てながらフレイアへ向かう。

「刹那の煌めきよ、私に光の刃を」

「効かぬぞ」

雷霆の刃はフレイアの呼び出した光の剣を造作もなく破壊した。

「さらばだ、裏切りのフレイアよ。なかなか面白い戦いであったぞ」
フレイアは自身に向かってくる雷霆の刃を、ただ見ていることしか出来ない。辺りには雷霆の刃が空を切る音だけが響く。策は尽きた

「面白いのは、まだこれからでしょう？」

雷霆の刃が動きを止める。それはフレイアの息の根を止める寸前だった。ゼウスは直感した。何か大きな存在が自身の最強の武器、雷霆を狙っていると。ゼウスは恐る恐る『それ』に視線を移す。

「まさか……」

雷霆が、イデアの視界に捉えられている。

「さようなら、雷霆」

雷霆は破裂し、絶命した。思ったよりもつまらない音だった。だが、ゼウスの顔色は見る見るうちに変わる。それは神々の王が初めて見せる、戦慄という色だ。

「お前、私の最強の武器を……」

「最強は壊れない。雷霆が壊れたのは、最強ではないからよ」

「我にこれほどまでの屈辱を……おのれ、忌々しき、忌々しきエスプリめ！ 許さぬ、許さぬぞ」

「そうよ。戦いはそうでないよ、楽しくないわ」

ゼウスは今までにないほどの怒りを露わにしている。しかしそこは神々の王。決して感情に流されぬよう、あくまでも王としての器を示そうという態度が見て取れる。ゼウスは声を静めて言った。

「……ポセイドン、雷を」

ポセイドンは矛を掲げ、雷を呼ぶ。

「この程度で良いか」

ゼウスは目の前に落ちた雷を掴む。雷はその手から逃れようと暴れていたが、すぐに大人しくなった。

「雷霆には及ばぬが、十分だ」

ゼウスは小刻みに肩を震わせながら、先ほどの雷を握りしめている。雷に自身の力を流し込み、可能な限り雷霆に近づけているのだ。「ならば、ベアトリーチェの術が発動するのを待とう」

ポセイドンはベアトリーチェの方へ目をやる。ベアトリーチェはちょうど今、長い呪文を唱え終わったようだ。

「……トラジエディー」

ベアトリーチェがそう唱えると、背景が崩れるように黒へと変わ

つてゆく。

「きゃああ、シエル、これ何！」

「俺にも分らないって！」

「ははは……愉快、愉快だ」

ベアトリーチェは楽しそうに笑った。こうしている間にも、重力は究極に達してしまふ。急がなければシエル達が危ないだろう。しかしイデア達は動かない。いや、動けないのだ。間もなく辺りは暗転し、完全に黒の世界に包まれてしまふ。

「これはお前たちの影で創られている。影はお前たちと繋がっている。そしてその影を握っているのは私だ。私が影を握っている限り、お前たちは動けない。お前たちは究極となった重力に押しつぶされ、もはや判別の付かない、淀んだ粉となるのだ」

「我也動けぬぞ。これはどうということだ」

「案ずるな、ゼウスよ。これはベアトリーチェが術を使うための代償。我らが動かなければ、奴らも動けん」

「然様。力を使うのであれば、それに相応しい代償を払わなければ。そつだろうか？ エスプリよ」

「その通りよ。もつとも、私達の世界へ侵入してきた時点で、払い切れないほどの代償を負っているわけだけど」

一面が黒となつても、空間が大きく揺れているのが分かる。先ほど展開された輪廻の象徴は、この事態に反応したのか元の大きさに収縮し、イデアの手元に戻ろうとする。

「フェリオ」

ベアトリーチェの手先から小さな光の弾が放たれ、イデアの腕に戻ろうとする象徴を打ち落としてしまった。象徴は金属のような音を立てて地に転がり、消えてしまふ。

「きゃああ、輪廻が！」

「現に戻つただけよ」

「よかつた……」

しかし、安堵の表情を浮かべていられないのが現状だ。側で祈り

を捧げるノスタルジアは、深刻そうに言う。

「駄目だわ……拘束を解く祈りをして、解かれた瞬間にまた掴まれてしまうの」

いよいよ重力は極限となり、その力は飽和を始めている。空間を破壊しないよう、魔法によりある程度の修正がされている様子ではあるが、それでも広範囲の存在を十分に消し去れるだろう。

「どうしよう！ このままじゃ、私達……」

「ああ、くらくらする……」

シエルは強い重力の闇にあてられ、意識を維持するのがやっとのようだ。

「これで終わりか？ 確かに、ここまで来ては、もうどうしようもないか……さあ、解放するのだ。お前の持つ、究極の重みを」

楽園の風や花が、重力の渦に迷い込むように消えてゆく。その混沌とした光景には、意識までも迷い込んでしまいそうになる。特に、この近くに居るシルヴィア達にとってはなおさらだ。

「仕方がないわね」

アイデアは再び力を創る。アイデアの中で呼吸をしている何かに、『滅』という器を与えるのだ。

「……」

予言者は無言のまま、その腕を、重力の闇を、シルヴィア達に向かって振り下ろす。

「壊れて」

ベアトリーチエの創り出した世界が、音を立てて崩れてゆく。拘束から解放されたアイデア達。代償の必要性を失った神々も同時に解放される。

「フレイア、糸を」

「はい」

フレイアは素早く魔法を唱える。神々には驚きの声を上げる余裕すらない。

「刹那の煌めきよ、私に光の刃を」

狙うはベアトリーチェの指先から伸びている魔力の糸。それぞれの指から伸びるそれは、予言者の各部位に接続され、その動作を支配しているのだ。

「お行きなさい」

重力の間が予言者の元を離れる寸前、フレイアの呼び出した光の剣が魔力の糸を

「フェリオ」

されど時は止まらない

ベアトリーチエが、勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「きゃああ！」

「うそ……」

光の剣はベアトリーチエの放った光の弾に強打され、その存在を失った。シルヴィアは悲鳴をあげ、ノスタルジアは恐怖のあまり、祈りを忘れる。

「俺たち、終わるのか……」

意識が混濁し、ついに倒れこんでしまったシエル。もはや反応をする気力もない。

「きゃああ、もうだめ……」

重力の闇が不気味なほどゆっくりと下りてくる。息を止めるシルヴィア。恐怖に震えるノスタルジア。そして神々の達成感に満ちた表情。それはアイデアの追憶を刺激する、いつかと似たような光景であった。しかしアイデアは知っている。その追憶の彼方に、目的のものを見つけることは出来ない。解き放たれた重力の闇は、予言者の記憶や絶望を秘め、見果てぬ夢と共にその役目を果たそうとし消えた。

「……」

僅かな空白。小さな風が発生し、一同を撫でる。先に反応したのはシルヴィア達の方だった。神々はまだ空白の中に居る。

「ん……どうなったんだ？」

シエルは混濁から回復し、気怠そうに体を起こす。しかし完全な状態に戻るまでは暫しの時が必要だ。

「え、私、何もしてないけど……ノスタルジア、なにか祈った？」

ノスタルジアは首を横に振る。

「私も、なにもしてないわ」

「じゃあ、あの、サピエンティア？ あのひとは……」

サピエンティアは完全に思考の海へ旅立っており、意識をこちらに置いておくようには見えなかった。

「違うみたいね」

「このひと、なんか変だよ……なんというか、イデアみたいな狂気を感じ……いや、なんでもないです」

シルヴィアは誰かの恐ろしい視線を感じ、前言を撤回した。

「こいつ、こんな時でも考えごとしてるのか……」

「でも、それなら誰がやったんだろう？」

「うーん、何の気配もしなかった……気がするんだけどな」

辺りは困惑に染まった。誰もが状況を理解出来ず、戸惑う。それは先ほど空白より抜け出した、ゼウス率いる神々も同様だった。

「一体……何が、起きたというのだ？」

「非常に不可解だ。理解できん」

ゼウスとポセイDONは状況を理解しようと努める。

「な、何故だ！」

ベアトリーチェの顔は動揺の色に塗り替えられた。その色は彼女が自身の指を見ることにより、更に深くなる。

「糸が、無いだと！ これはどういことだ、エスプリか？」

「いいえ、私はあなたの術を壊しただけよ」

「ならば一体……」

「居るじゃない。私の他に、滅という現象を使う存在が」

イデアの言葉は、神々が心の中に隠していた、あの存在を顕在化けんざいさせる。

「まさか……」

神々は必死に否定した。これから訪れる必然の前兆を、虚なる事実であると。だがそれも無意味。なぜならその未来は、過去の時点からここに存在しているのだから。

「純白の女神フレリアよ……我は、還つて来たぞ」

重力の闇は消え去ったが、地面にはまだその影が残っている。存在条件も気配も持たない丸い影が、そこにある、認めたくない存在

を描写していた。

「我が純白の女神フレイアは誰にも渡さぬ。冥界の王ハデスの誇りにかけて！」

高らかに響くその声は、ゼウスの神経を逆撫でする。

「冥界の王ハデス、何のつもりだ！」

ゼウスは怒りのあまり、持っていた雷を影に向かって放つ。しかし、それはまだ雷霆ライティングと呼ぶには弱すぎるものだ。ゼウスの『駄作』はあっけなく滅の餌食となった。

「何を言うか。我は、我のものを壊さぬよう、配慮をしたただけだ」

「姿も居場所も失って、それでもなおフレイアを狙う。余程フレイアに執心しているのね」

イデアの言葉に対し、ハデスは自嘲気味に、鼻で笑った。

「今の我は姿を持たない……故に、本来の居場所でない場所に居られるのは、ごく短い間だけだ。……純白の女神フレイアよ。お前は我的世界を奪ったのだぞ。その代償として、我はお前を求めるのだ。我のものとなるその時まで、死ぬでないぞ」

影は笑いながら消えていった。

「おのれ、ハデス。最後の最後で……」

ゼウスは怒りに肩を震わせる。ふと見ると、ベアトリーチェもまた下を向き、肩を震わせていた。

「く、く……」

何かをこらえているかのように、時折声を漏らすベアトリーチェ。

「どうした、ベアトリーチェ」

「ゼウス、下がれ。これは……」

ポセイドンがやや慌てた様子で言うのとはほぼ同時、先ほどよりも大きな笑い声が響く。今度の笑いはハデスではなく、ベアトリーチェのものだ。

「愉快的長男を持ったものだな、ポセイドンよ！」

ベアトリーチェの体から力が溢れている。しかしそれは魔力と呼ぶにはあまりにも不安定だ。

「いつもの癖が出たな」

ポセイDONは矛を構え、防御の姿勢をとった。

「面白い、面白いぞ。あまりの愉快さに、私の魔力も踊っている！ さあ、もっと、もっと私を楽しませてくれ。代償を、生贄を用意しろ！ 誰が先だ、私を楽しませるのは誰だ！」

ベアトリーチェの狂笑が辺りを震わせる。数多の火球が瞬時に現れ、ゼウス達を襲う。

「何をする、ベアトリーチェ！」

「無駄だ、こうなつては手が付けられん。上手くエスプリ達の方へ誘導するしか……」

魔力とは、術者の安定した精神があつて、初めて意味が生まれる力である。ベアトリーチェは大きな魔力を持つが故、精神が高ぶると、その力を制御することが出来なくなってしまうのだ。ベアトリーチェの精神が最も高ぶる要因は『戦いと裏切り』。ただでさえも精神の高ぶる戦いの中で、裏切りともとれるハデスの行為を目の当たりにした彼女の精神はもはや、安定とは程遠いものとなっていた。「ベアトリーチェ、早く目を覚まさないか！」

ゼウスは声を荒らげるが、彼女の耳には届かない。逃れても逃れても、瞬時に炎が発生し、ゼウス達に襲い掛かる。武器を失っているゼウスは、ただ必死に身を捻って回避するしかない。

「暴走は大きな魔法を使った後ほど重度になる。ゼウスよ、万が一のことも考えておくれ」

暴走したベアトリーチェの意識は完全にゼウス達に向いているらしい。誘導は思つようにいかず、しばらくはこの状態が続くことが予想された。

「フレイア、少し下がるわよ」

「はい」

ベアトリーチェの放つ魔法を回避し続けるゼウス達。慎重にベアトリーチェの視界から逃れるアイデア達。その時、魔力の糸から解放された死の予言者が意識を取り戻す。

「あ……わた、し、は、わたし、は」

「きゃああ、しゃべった！」

「いや、喋らない方がおかしいだろ」

と、言いつつも動揺を隠しきれていないシエル。

「ああ、ああ……」

「きゃああ、来ないで、消される！」

「大丈夫よ、敵意はないわ」

シルヴィア達の動揺ぶりを見て、イデアは一言。それが効いたのか、シルヴィア達は徐々に大人しくなった。予言者は全身を大きく震わせている。長い間操られていたことにより、正しい体の動かし方を忘れているのだ。

「変えたい、変え、たい……」

フードの合間から見える予言者の顔は、かつてのように干からびてはいなかった。声も出し方が分からないだけで、枯れている様子ではない。

「あなたは既に幸福な未来から切り離されている。あなたに不幸な過去を変えることが出来たとしても、幸福な未来に生きるのは別のあなたよ」

「それで、いい……皆が、幸せなら……」

予言者は安らかな顔をした。亡くした過去のことを思い出していたのだろう。

「……そうね。私も、叶うならばそうなって欲しいわ。だけど、もう」

イデアは残念そうに言う。その周囲からは、心なしか、防御用の空間に似た空気を感じる。

「あなたは壊し過ぎた。だから、あのひとが来てしまう」

予言者の表情が曇る。彼女の持つ本質により、その存在を知らなくとも、それが恐ろしいものであると本能的に理解出来てしまうのだ。

「あの、ひと……?」

予言者は恐る恐る口を動かす。

「忘却よ」

「あ」

一瞬だった。予言者は一瞬のうちに膨張と収縮を繰り返し、それによって発生した熱により蒸発した。同時に、世界の記憶から『死の予言者』という記述が抹消される。

「おお……なんだ、この感覚は」

その反動により、ベアトリーチェの暴走は止まった。

「ベアトリーチェ……」

「自分よりも大きな力に反応して止まったか。これは良い発見だ」
呆れたような顔をするゼウスと、あくまでも冷静、沈着を保つポセイドン。

「エスプリよ、今度は何をしたのだ？」

ベアトリーチェは先ほどの暴走のことなど、もはや覚えていないらしい。たった今覚えた奇妙な感覚に、興味が湧いて仕方がないようだ。

「無かったことにしたのよ。世界に存在する、ある理を……彼女も、その方が良かったでしょう」

イデアの声は徐々に小さくなり、最後の方はベアトリーチェには聞こえなかったようだ。

「と、なると、何かが不可能になり、何かが可能になったということだな。……しかし、それが記憶にない以上、私には縁のないことだと考えるのが自然か」

「そうなるわね」

「ふふ……現象を操る力を目の当たりに出来るなど、魔女を統べる者として、これ以上に喜ばしいことはない。感謝するぞ、エスプリよ」

「自然と共に生きることによって、その力を借りようとする。そうだった魔女の考え方は嫌いではないわ。けれど中には、人間が借りてはならない力も存在するの」

「分かっている……未來的なものは、いつの時代も理解されない。その壁を壊したい一心で、私は絶対的な力を持ってしまった。結果、魔女の存在は誰もが認めしたが、良い展開にはならなかった。それが代償というものであると、私たち魔女は理解している。だから私はただ天秤の上に身を置くのみ」

ベアトリーチェが瞑想状態に入る。今までとは違う魔力の使い方だ。溢れ出す気運の中に、通常のものとは異なった秩序が見える。それは魔法というよりも、何かに器を与える、すなわち、創造に近いものであった。

「目覚めよ、死の化身タナトス・エゴ」

大きな鎌が空中に寝かされた状態で現れる。ベアトリーチェの手に届く位置で浮遊しているそれは、指示を待っているかのように静止していた。しかし魔力の糸が繋がっている様子はない。アイデアはいくらか前へ出る。

「これはハデスの鎌タナトスを極限まで再現したものだ。持っている能力は、ハデスのそれと、ほぼ同等だ」

「けれど、それでは私を消すことは出来ない。……いえ、そのつもりはないのね」

「然様^{うんやう}。私の目的はお前を消すことではなく、あくまでも戦いを楽しむこと」

ベアトリーチェは目尻を下げ、笑った。

「さあ、始めよう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1707q/>

天使は甘美な夢の中で

2011年10月3日03時33分発行